

吉倉B遺跡発掘調査報告

一 公害防除特別土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告V一

富山県文化振興財団
埋蔵文化財発掘調査報告
第二七集

二〇〇五年

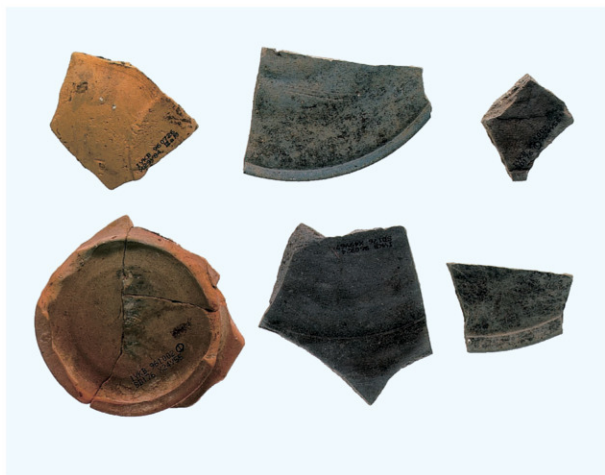
富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

2005年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所



上 吉倉B遺跡 竪穴建物 SI03(南から)
下 吉倉B遺跡 竪穴建物 集中区(南から)



上 吉倉B遺跡 出土の黒書土器
下 吉倉B遺跡 出土の須恵器

吉倉 B 遺跡発掘調査報告

- 一 公害防除特別土地改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 V 一

2005年

財団法人 富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所

序

当埋蔵文化財調査事務所では、平成7年度から県営公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査を行っております。

本書は、平成8・9年度に実施した富山市吉倉B遺跡の発掘調査成果を一冊の報告書としてまとめたものです。県営公害防除特別土地改良事業における婦中町域での発掘調査の報告が一応完結し、本報告書が富山市域における最初の調査報告書となります。

吉倉B遺跡は扇状地扇端部分に位置し、この周辺は奈良時代以降に著しく集落が増加した地域です。これらの集落は古代の開墾集落と考えられ、周辺の遺跡では任海宮田遺跡・南中田D遺跡・栗山楮原遺跡などが存在します。吉倉B遺跡もこの地域一帯で展開する開墾集落の一群と考えられます。また、当調査地南方200mには平成6年度に富山県埋蔵文化財センターによって調査された地区から、吉倉B遺跡の中核部分と考えられる掘立柱建物群と竪穴住居群が確認されています。当地区の住居はそれらの建物に先行する時期の建物で、開墾集落の初期の形態を窺う資料として注目されます。

また出土した遺物は、日常生活で使用されたものが大半でしたが、「城長」と墨書された土器や、転用硯などの識字層が使用した遺物などもみつかっています。本書が郷土の成り立ちを知る手がかりとなれば幸いです。

最後に、本書を作成する過程において、多大なご指導、ご助力を賜りました関係機関・団体および諸氏に、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

富山県文化振興財団
埋蔵文化財調査事務所
所長 桃野真晃

例 言

- 1 本書は富山県富山市新保地内に所在する、吉倉B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は富山農地林務事務所からの委託を受けて、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所が実施した。
- 3 発掘調査と内業整理の期間については以下のとおりである。

発掘調査期間	平成8（1998）年6月20日～12月5日
	平成9（1998）年7月3日～12月12日
内業整理期間	平成16（2004）年4月1日～平成17（2005）年3月31日
- 4 本書の執筆・編集は武田健次郎が担当・実施した。
- 5 出土遺物の写真は、楠華堂（代表 内田真紀子）に委託した。
- 6 自然科学分析は、（株）バリノ・サーヴェイに委託し、その成果について報文を得た。
- 7 本書に記載される図面・図版・記述の凡例については、必要に応じてその都度本文中で言及した。
- 8 本書で使用した遺構の略号は次のとおり
SI：竪穴住居 SX：大型土坑等 SK：土坑等 SP：柱穴等 SD：溝

目 次

第Ⅰ章 地理的・歴史的環境	1
1 地理的環境	1
2 歴史的環境	2
第Ⅱ章 調査経緯	5
1 調査に至る経緯	5
A 調査の契機	5
B 試掘調査	5
C 本調査	6
2 調査経過	6
A 調査方法	6
B 調査の経過	6
C 調査体制	7
D 現地説明会	7
E 整理の経過	8
F 整理体制	8
第Ⅲ章 吉倉B遺跡の調査	9
1 調査地区の設定と基本層序	9
A 調査地区の設定	9
B 基本層序	9
2 遺構	10
(1) 古代	10
(2) 中・近世	24
3 遺物	30
(1) 土器・陶磁器	30
(2) 金属製品	35
第Ⅳ章 総括	36
(1) 遺構の変遷	36
(2) 「城長」墨書土器について	37
第Ⅴ章 自然化学分析	113
(1) 珪藻分析	114
(2) 花粉分析	118
(3) 骨分析	118

(付図) 吉倉B遺跡古代下層遺構全体図

巻頭写真目次

巻頭写真1 吉倉B遺跡 1. SI03 2. 竪穴建物集中区ブロック

巻頭写真2 吉倉B遺跡 出土遺物 1. 墨書土器、転用硯 2. 須臾器

図 面 目 次

図面01：吉倉B遺跡調査地配置図

図面02：吉倉B遺跡古代面下層遺構全体図分割区割り図

図面03～11：古代面下層遺構全体図(1)～(9)

図面12～17：古代面下層竪穴建物実測図(1)～(6)

図面18～20：古代面下層土坑等実測図(1)～(3)

図面21：古代面下層溝・古代面上層土坑実測図

図面22：吉倉B遺跡古代面上層遺構全体図分割区割り図

図面23～28：古代面上層遺構全体図(1)～(6)

図面29・30：古代面上層溝群実測図(1)(2)

図面31～33：古代面溝断面図

図面34：吉倉B遺跡中・近世面遺構全体図分割区割り図

図面35～43：中・近世面遺構全体図(1)～(9)

図面44・45：中・近世面土坑等実測図(1)(2)

図面46～48：中・近世面溝断面図

図面49～52：出土遺物(古代)

図面53：出土遺物(古代・中近世)

図面54：出土遺物(中近世・近代)

図面55：富山平野（狭義）の古代遺跡分布範囲

写真目次

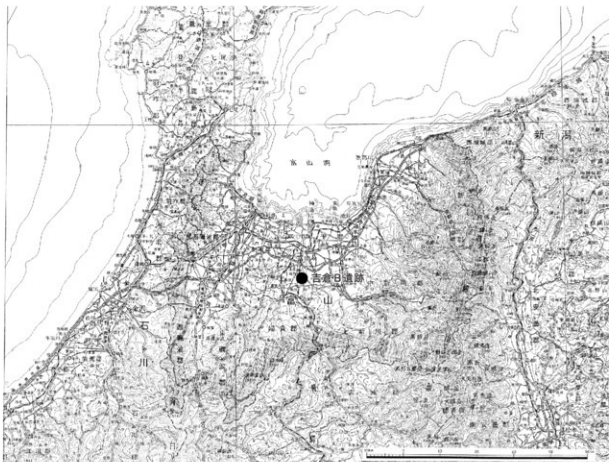
- 写真01 吉倉B遺跡航空写真(1964年撮影)
- 写真02 吉倉B遺跡航空写真(1987年撮影)
- 写真03 吉倉B遺跡古代面全景
- 写真04 吉倉B遺跡古代面 1. A地区全景 2. B地区全景
- 写真05 吉倉B遺跡古代面 1. 竪穴建物集中区ブロック 2. SI01 3. SI02出土状況
4. SI02 5. SI02遺物出土状況
- 写真06 吉倉B遺跡古代面 1. SI03 2. SI03 3. SI04 4. SI04
5. SI05 6. SI05 7. SI08 8. SI12
- 写真07 吉倉B遺跡古代面 1. SI06 2. SI06 3. SI07 4. SI07カマド
5. SI竪穴建物集中区ブロック 6. SI09・10・11ブロック
7. SI09カマド 8. SI09カマド
- 写真08 吉倉B遺跡古代面 1. SK36 2. 竪穴建物集中区
- 写真09 吉倉B遺跡古代面 1. 東側溝群ブロック 2. 西側溝群ブロック
- 写真10 吉倉B遺跡古代面 1. SD58 2. SD58 3. SD59 4. SD87・88
5. SD59 6. SD59 7. SD06 8. SD06
- 写真11 吉倉B遺跡中・近世面全景
- 写真12 吉倉B遺跡中・近世面 1. A地区全景 2. B地区全景
- 写真13 吉倉B遺跡中・近世面 1. SD60 2. SD60 3. SD60 4. SD60・63 5. SD60・63
- 写真14 吉倉B遺跡中・近世面 1. SD63 2. SD62・63 3. SD63 4. SD61 5. SD61
- 写真15 吉倉B遺跡中・近世面 1. SD61 2. SD61 3. SD80・83 4. SD80・84 5. 61
- 写真16 吉倉B遺跡：出土遺物(須恵器)
- 写真17 吉倉B遺跡：出土遺物(須恵器、土師器)
- 写真18 吉倉B遺跡：出土遺物 1. 須恵器 2. 須恵器
- 写真19 吉倉B遺跡：出土遺物 1. 須恵器 2. 須恵器
- 写真20 吉倉B遺跡：出土遺物 1. 須恵器 2. 須恵器、土師器
- 写真21 吉倉B遺跡：出土遺物 1. 土師器 2. 土師器
- 写真22 吉倉B遺跡：出土遺物 1. 土師器 2. 土師器、土錘
- 写真23 吉倉B遺跡：出土遺物 1. 珠洲、瀬戸美濃施釉陶器、越中瀬戸 2. 近世陶磁器
- 写真24 吉倉B遺跡：出土遺物 1. 近世陶磁器 2. 金属製品
- 写真25 吉倉B遺跡：出土遺物 1. 戦時統制品 2. 戦時統制品

第I章 地理的・歴史的環境

1 地理的環境

本書で報告する吉倉B遺跡は、富山県富山市南部の新保地内に所在する。古代を主たる時期とする集落遺跡である。

富山県は、北東日本海側の能登半島の付け根付近に位置する。県内は中央部を南北に走る呉羽丘陵で大きく東西に二分し、それぞれ「呉西」「呉東」と呼称されることが多い。富山市は後者に入るものの、県のはば中央部に位置する。一方県域全体を見渡すと、県域南部は大きくは山岳地域に、県域中央から北部の海岸線に沿っては平野部が発達している。この平野部は大きくは4つからなり、西から東にかけて水見平野、砺波・射水平野、富山平野、黒部平野と続く。このなかで富山平野は県中央部に位置し、東は早月川扇状地を東端に、西は前述の呉羽丘陵を西端とする地域に広がりを見せる。平野内には早月川、神通川、常願寺川などの水系があり、とくに常願寺川扇状地の発達が最も著しくみられる。吉倉遺跡周辺は富山平野内では、神通川右岸沿いに位置し、富山平野のなかでも中央付近に位置する。標高は35m前後を測り、神通川と熊野川によって挟まれた扇状地上にあり、かつての流路に沿って堆積した礫が幾筋にも見られる。また流路に沿って谷と微高地が幾つも確認でき、それらの微高地上に集落が占地されている。本書で取り扱う吉倉B遺跡も、それら微高地上に占地している集落の一部である。



第1図 吉倉B遺跡位置図(1:1,000,000)

2 歴史的環境

神通川・熊野川中流域では、縄文時代から中世を中心とした遺跡が認められる。遺跡は複合河岸段丘上（大沢野段丘）に立地する一群と扇状地上に立地する一群に大別できる。

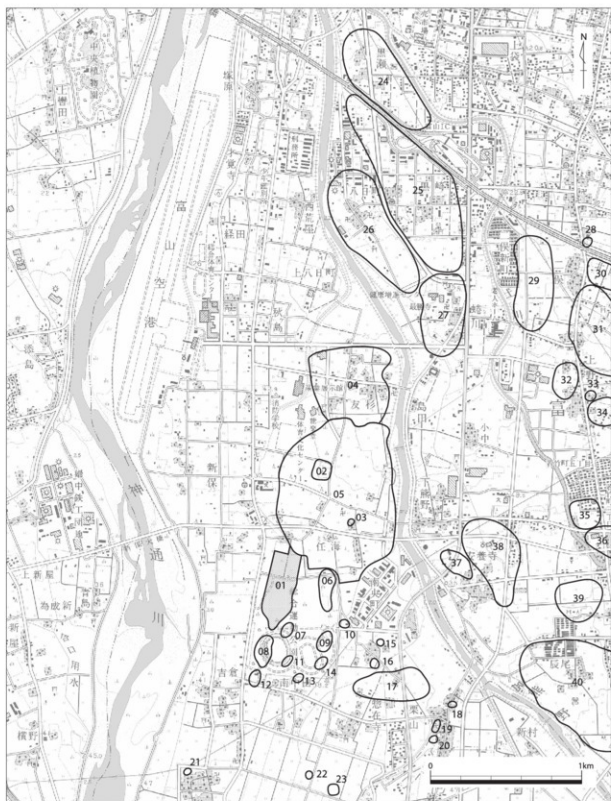
縄文時代では伊豆宮Ⅱ遺跡が大沢野段丘上にあり、中期後葉の縄文土器が出土しているが、遺構は確認されていない。晩期以降になると段丘上から扇状地へと遺跡が移るようで、扇状地には悪王寺遺跡、栗山A遺跡、大利屋敷遺跡において晩期の遺物の散布が認められる。

弥生から古墳時代にかけての遺跡は希薄であり、弥生時代では黒瀬大屋遺跡で遺物の散布が認められる他、この周辺地域で概期の明確な遺構は現在のところ確認されていない。古墳時代では中期の福居古墳や後期の伊豆宮古墳がある。伊豆宮古墳の円礫積横穴式石室からは須恵器・馬具・刀子・紡錘車が出土している。また任海宮田遺跡で概期の遺物が少量だが認められる。

古代になると扇状地上にも多くの遺跡が形成されるようになり、周辺では当遺跡を含め任海宮田遺跡、南中田D遺跡、栗山楮原遺跡など多くの遺跡が確認されている。これらの諸遺跡は東西1.5km、南北2kmの範囲内に密集して所在しており、さながら一続きの古代・中世の遺跡群を形成しているかのような様相を呈している。7世紀後半～8世紀代に小規模な集落が出現し、9～10世紀前半にピークに達するが11世紀代には集落が確認されておらず、一旦衰退の時期を迎える。また新保地区は県史によると『加茂別雷神社文書』の中の寿永3年（1184年）の源頼朝下文などの文献にみられる「加茂社領新保御厨」の比定地の一つとされ、当地以外に滑川市高月付近説も有力視されている。

一旦衰退した集落も中世になると再び大規模に集落が形成されるようになる。集落自体の占地は古代に形成された既存の遺跡の上層に形成されるものが大半であり、新規に生活圏を獲得する例は少ない。このことから古代において扇状地内の定住可能な地域については殆ど開発の手が伸びていたものと考えられる。集落以外では起源を中世に求められる城跡や豪族の館、寺院跡などが認められる。上熊野城跡は土塁や堀の一部が確認されており、布市遺跡には布市城跡の存在が推定されている。また豪族蛭川氏の館跡は本遺跡の北方に地名として残っており、北東には興国寺館跡もある。寺院では森田瑞泉寺跡、龍高寺跡、月岡新安国寺跡、任海池原寺跡などが推定・確認されている。

近世には、富山から飛騨に抜ける飛騨街道が熊野川沿いを南北に走っており、その街道から現在の任海橋付近で岩木道・八尾道が分岐していた。任海橋あたりには熊野川の「徒歩渡り」があり、富山・飛騨・任海・下熊野・八尾方面からの街道が交差し、往来が頻繁に行なわれていたようである。



第2図 周辺遺跡地名一覽

01. 吉倉B遺跡、02. 任海池原寺跡、03. 任海三十苜塚、04. 友杉遺跡、05. 任海宮田遺跡、06. 任海遺跡
 07. 任海鎌倉遺跡、08. 南中田D遺跡、09. 栗山椿原遺跡、10. 任海砂田遺跡、11. 南中田C遺跡、12. 吉倉A遺跡
 13. 南中田B遺跡、14. 南中田A遺跡、15. 栗山塚、16. 惣在寺庭寺、17. 栗山A遺跡、18. 伊豆宮Ⅱ遺跡、19. 円教寺遺跡
 20. 伊豆宮古墳、21. 押上古墳、22. 大栗屋敷遺跡、23. 大栗遺跡、24. 黒瀬大屋遺跡、25. 黒崎種田遺跡、26. 八日町遺跡
 27. 鶴川館跡、28. 二俣寺跡、29. 上野井田遺跡、30. 二俣北遺跡、31. 二俣南遺跡、32. 上野鍋田遺跡、33. 上野遺跡
 34. 上野亀田遺跡、35. 悪王寺遺跡、36. 若竹町遺跡、37. 安養寺遺跡、38. 下熊野遺跡、39. 宮保遺跡、40. 辰尾遺跡

番号	遺跡名	所在地	種 類	時 代
01	吉倉B遺跡	富山市宇柿/木又割、押上字藤地割、南中田字土屋野割、任高、新保	集落	古代(奈良・平安)・中世
02	任海地原寺跡	富山市任海字仙田割、板町割	寺院	中世・近世
03	任海三十万塚	富山市任海字三十万割	塚	中世?
04	友杉遺跡	富山市友杉字北条田割、宇止/内割、宇田割、宇城田割、任海字板町割	集落	古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
05	任海宮田遺跡	富山市任海字宮田割、字大塚割	集落	縄文(晩)・古墳(古墳・白鳳)・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
06	任海遺跡	富山市任海	集落	平安・中世
07	任海鎌倉遺跡	富山市任海字鎌倉	集落	奈良・平安・中世
08	南中田D遺跡	富山市南中田	集落	縄文(晩)・古墳(古墳・白鳳)・古代(奈良・平安)・中世(鎌倉・室町)・近世
09	栗山権原遺跡	富山市栗山字権原割	集落	平安・中世
10	任海砂田遺跡	富山市任海字砂田割、栗山字権原割	集落	平安・中世
11	南中田C遺跡	富山市南中田字田嶋割	集落	平安・中世
12	吉倉A遺跡	富山市吉倉字小屋作割	集落・墓	平安・中世
13	南中田B遺跡	富山市南中田字嶋割	集落	平安・中世
14	南中田A遺跡	富山市南中田字土屋野割	集落	奈良・平安
15	栗山塚	富山市栗山字権原割	墓・経塚	中世・近世
16	惣在寺庵寺跡	富山市南中田字土屋野割、惣在寺	敷布地・墓	中世・近世
17	栗山A遺跡	富山市惣在寺字下寺田割、栗山	集落	縄文(晩)・古代(奈良・平安)・中世
18	伊豆宮川遺跡	富山市上栗山字野田割	集落	縄文(中期)
19	円教寺遺跡	富山市上栗山	敷布地	奈良・平安・中世
20	伊豆宮古墳	富山市上栗山(伊豆ノ宮)、大沢野町	古墳	古墳(後期)
21	押上古墳	富山市押上	古墳?	古墳?
22	大利屋敷遺跡	富山市大利字大利割、惣在寺	敷布地・墓	縄文(晩期)・平安・中世
23	大利遺跡	富山市大利字大利割	敷布地	平安
24	黒越大屋遺跡	富山市黒越字大屋割	敷布地	弥生(後)・古代(奈良・平安)・中世・近世
25	黒崎種田遺跡	富山市黒崎字種田割、寺田割、橋川	敷布地	平安・中世・近世
26	八日町遺跡	富山市八日町	敷布地	平安・中世
27	橋川館跡	富山市橋川	城館	中世・近世
28	二保寺跡	富山市二保	寺院	不明
29	上野井田遺跡	富山市上野、二保	敷布地	奈良・平安・近世
30	二保北遺跡	富山市二保	敷布地	縄文(中・後)・奈良・平安
31	二保遺跡	富山市二保	敷布地	不明
32	上野鎮田遺跡	富山市上野	敷布地	不明
33	上野遺跡	富山市上野	敷布地	不明
34	上野亀田遺跡	富山市上野	敷布地	不明
35	恵王寺遺跡	富山市恵王寺字水尻割	集落	縄文(後・晩)・奈良・平安・中世
36	若竹町遺跡	富山市若竹町、恵王寺、吉岡字神田割	敷布地	古墳・奈良・平安・中世
37	安養寺遺跡	富山市安養寺字寺後割、中川原割他	敷布地	中世・近世
38	下熊野遺跡	富山市下熊野字庄平割、安養寺他	敷布地	奈良・平安・中世・近世
39	宮保遺跡	富山市宮保字三日田割、宮西割、辰部	敷布地	縄文・奈良・平安・中世
40	辰尾遺跡	富山市辰尾字沼、栗割、窪田、日崎他	敷布地	奈良・平安・中世・近世

第1表 周辺遺跡地名一覧

第Ⅱ章 調査経緯

1 調査に至る経緯

A 調査の契機

明治時代に亜鉛の採掘を開始した岐阜県神岡鉱山から排出されたカドミウムは、神通川を經由して下流域の水田地を広く汚染し、同時にこの地に住む人々の身体をも触らした。このなかで昭和45年に農用地の土壤汚染防止法が公布された。翌年から土壤汚染調査が行われた結果、富山市、婦中町、大沢野町、八尾町の1市3町に及ぶ1500.6haが汚染土壤地域に指定された。その結果昭和54年から、県営公害防除特別土地改良事業による本格的な土壤復元が始まった。この事業により、汚染対象地域では1～3次地区、2期地区に分けて復元工事が進められることになった。事業は大型圃場による区画整理で、汚染対策地域と指定された農地に隣接する地域を併せて行われることとなった。復元工法は上乗せ客土工法と埋め込み客土工法の二つの工法が採用された。両工法とも地下の埋蔵文化財に影響が及ぶことが予想されたため、個々の復元計画の内容に応じて発掘調査が必要な場合、事前協議のうえで発掘調査の計画を立案した。

汚染対象地域の第1次地区は90haで昭和54年に始まり昭和59年に完了、第2次地区は357haで昭和58年に始まり平成6年に完了、さらに第3次地区の工事が平成4年から平成16年までの予定で着手された。この第三次地区は、残余の436.9ha（富山市107.7ha）が対象地域となった。そこでこれらの工事に伴い破壊される可能性の高い埋蔵文化財について、該当地域の埋蔵文化財の保存措置を講じるための処置が検討・協議され、さらに必要に応じて試掘調査、本格調査へと段階を踏んで進む運びとなった。

B 試掘調査

平成3年に、富山県農地林務事務所から第3次事業地区内の埋蔵文化財所在状況について富山市教育委員会に照会があり、市教育委員会は吉倉B遺跡、任海宮田遺跡、友杉遺跡の3遺跡（50ha）が調査対象であるとした。平成4年には、遺跡の所在しない区域の工事が着工され、平成8年度以降の遺跡所在区域についての調査対応・工事工法の変更などについて協議が行われた。協議の結果、平成8年度工事区域の吉倉B遺跡（1.2ha）について富山市教育委員会が主体となって試掘調査する運びとなった。埋蔵文化財包蔵地に対する試掘調査は、地表面を対象とした分布調査だけでは確認しえない遺跡の具体的な様相を把握するために実施する調査である。この試掘調査によって、はじめて地下に眠る遺跡の実態が明らかとなるわけだが、汚染田の復元工事が前提となるこの試掘調査では、とりわけ遺構面の平面的広がりや遺構深度の確認が重要となる。すなわち遺構面が工事施工の影響深度よりも浅い場合は、客土の上乗せ盛土保存が可能となり、遺跡自体もまた現状のまま保存されることになる。逆に施工影響深度が遺構面よりも深い時や、汚染土を埋め込み深い溝や穴を掘削する時、遺跡は工事により破壊されることになる。この場合記録保存を前提とした緊急発掘調査（本格調査）が必要となる。埋蔵文化財保護の立場からは、できるだけ現状で遺跡を保存するほうが望ましいが、この保存処置は工事の施工法等の変更や調整によって達成できる場合も多い。それだけに早急な試掘調査による遺跡の実態把握が必要となる。

このような観点から、吉倉B遺跡では幅約1mの試掘溝が14ヶ所で設定された。試掘調査の結果、古代～近世の遺構・遺物が確認され、遺構面までの深度が把握された。

C 本調査

前述のように、汚染田復元工事の工法は、大きく埋め込み客土工法と、上乗せ客土工法とがあるが、工事による破壊が予想される遺跡については、事前に緊急発掘調査による記録保存が必要となる。

このため試掘調査の結果をもとに、富山県耕地課、富山県農地林務事務所、富山市農地課、富山市教育委員会、富山県教育委員会文化課(現文化財課)、富山県埋蔵文化財センターからなる事前協議がなされ、計画田面高の調整による遺跡の最大限の保存措置が考慮・検討された。田面調整では、遺構・遺物包含層の高さに保護層10cmを上乗せした数値を工事掘削の限界深度とし、この深さに達しない範囲で施工可能なら現状保存、さらに深く掘削が及ぶものについては記録保存を目的とする緊急発掘調査(本調査)を実施することとなった。

このような経過を経て、平成8年度より吉倉B遺跡において本調査が開始された。この中で、財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所では、平成7年度より県営公害防除特別土地改良事業関連事業として発掘調査を富山農地林務事務所から受託しており、本調査を実施していた。事業開始年度となる平成7年度には、婦中町域で清水島Ⅱ遺跡、中名Ⅱ遺跡を、平成8年度は婦中町域で中名Ⅱ・Ⅴ遺跡、持田Ⅰ遺跡を、富山市域で吉倉B遺跡の調査に着手した。吉倉B遺跡の本調査は、平成8・9年度の二カ年にわたり実施された。

2 調査経過

A 調査方法

本調査地は、吉倉B遺跡の周知範囲の北端付近に位置し、富山県総合運動公園の北側に隣接する。試掘調査では、周知の遺跡範囲よりも北側および東側へ広がることが窺えた。また調査の結果、奈良・平安時代と中世～近世の大きく2時期の遺構・遺物が確認された。遺構面は中世・古代の2面が存在すると考えられた。ただし後世の削平により農道東側部分では中世の遺物包含層が一部削平を受けており、1面と考えられた。吉倉B遺跡の発掘調査の基準となるグリッドは、国家座標を用い設定した。吉倉B遺跡の場合69,4700.00、2,7300.00、をX0Y0の基点とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。グリッドは2×2mの方面を遺物取り上げ等の基本区画とし、グリッド名は北東角のX軸・Y軸の座標名で呼称した。発掘調査は表土・耕作土を機械で掘削・除去した。次いで遺構面に至る包含層掘削、遺構検出および個別の遺構掘削については、作業員の人力によった。遺構掘削の過程において、または完掘後、必要に応じて適宜遺構断面図、出土状況図などの図化作業、および写真撮影作業などを、調査補助員の協力を得て実施した。また調査区全域にまたがる遺構平面図の作成には、空中写真測量を利用した。空中写真測量には、ヘリコプター実機を使用した。その他調査方法の詳細については、すでに報告済みの他財団調査地などと基本的に共通する基準で実施している。

B 調査の経過

調査は富山農地林務事務所と協議のもとに実施し、発掘調査中も進捗状況等によって、必要に応じて協議を継続した。当財団の場合、現地調査にあたる技術職員は2名1班体制で行なった。吉倉B遺跡は平成8・9年度に調査を実施している。このうち平成8年度調査(吉倉B遺跡A地区)は、調

査対象面積5,800㎡、延べ面積13,050㎡、調査期間は平成8年6月20日～12月3日、調査員4名の調査体制で実施した。平成9年度調査（吉倉B遺跡B地区）は、調査対象面積2,883㎡、延べ面積5,766㎡、調査期間は平成9年7月3日～12月12日、調査員2名の体制で実施した。

C 調査体制

平成8年度（1997年度）

総括	桃野 真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	谷井 保男	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶務	宮成 真幸	埋蔵文化財調査事務所主任
	岩崎 証意	埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括	山本 正敏	埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長
調査員	森 隆	埋蔵文化財調査事務所主任
	武田健次郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	内田亜紀子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	野口 雅美	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成9年度（1998年度）

総括	桃野 真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	谷井 保男	埋蔵文化財調査事務所副所長
	棚田 信之	埋蔵文化財調査事務所嘱託
庶務	宮成 真幸	埋蔵文化財調査事務所主事
	蒲田 和志	埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括	山本 正敏	埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長
調査員	森 隆	埋蔵文化財調査事務所主任
	中村 亮仁	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

(1) 吉倉B遺跡

地区	調査期間	延日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
A地区	中世上層 H.8.6.20～9.4	149日	5,800㎡	森 隆・武田健次郎・内田亜紀子・野口雅美	土坑、溝、旧河道	中世土師器、瀬戸美濃焼軸陶器、中国陶磁
	古代上層 H.8.9.5～10.2	62日	1,450㎡		土坑、溝、谷	珠洲、金属製品他
	古代下層 H.8.10.3～12.3	107日	5,800㎡		竪穴住居、焼土坑、溝、谷	土師器、須恵器、黒色土器、磨き土器
B地区	中近世層 H.9.7.3～9.29		2,883㎡	森 隆・中村亮仁	土坑、溝、谷	中世土師器、珠洲他
	古代層 H.9.9.30～12.12	34日	2,883㎡		土坑、溝、大溝	土師器、須恵器

D 現地説明会

当財団の発掘調査では、その調査成果を地元の方々をはじめ広く一般に周知していただくため、現地説明会を発掘調査現場で開催している。吉倉B遺跡の発掘調査においては、平成8年度の吉倉B遺跡A地区を主たる会場とした現地説明会を計画・実施した。開催日時は、平成8年11月17日（日）午前10時から12時。当日は調査地区内に順路を設定し、各主要遺構の周辺には説明員を配置し、遺跡見学の際の便宜を図った。当日は、調査現場事務所前での発掘調査概略説明の後、調査現場であるA地

区へ見学者を誘導し、実際の調査現場を見学していただいた。見学順路の各所には説明員を配置し、現在掘削中である遺構や完掘済みの遺構について適宜見学者に説明した。また現場調査事務所においては、吉倉B遺跡A地区の出土遺物を展示し、遺跡・遺構などの写真パネルの掲示もおこなった。また説明会当日に見学不可能であった上層遺構についてスライド映写機を利用して解説した。当日の見学者参加人数は約50名を数えた。

E 整理の経過

現地での発掘調査作業段階から並行して土器・陶磁器等の出土遺物の洗浄・注記等の作業を実施した。現地発掘調査は通常年内（12月頃）までに終了するが、以後年度末にかけて埋蔵文化財調査事務所において当年度調査の基礎的な整理作業をおこなった。これらの諸作業には調査員による遺構カード、写真台帳、木製品・金属製品・石製品台帳、遺構別出土遺物台帳等の作成がある。同時に概要作成に向けての出土遺物の選別・実測図作成作業や空中測量図面の最終校正もこの時期に実施した。なお当年度調査の一部成果については概要報告（『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』『埋蔵文化財調査概要－平成9年度－』）として年度末に刊行している。以上の作業は、後の報告書作成のための本格整理に先立って基礎整理作業の段階となる。また遺物写真撮影については業者委託となるため、これに先立ち各出土遺物の法量計測、メモ写真、整理台帳等を整理作業員の補助のもとに作成した。

報告書刊行に向けての本格的な整理は、平成16年3月に開始した。遺物の実測のうち土器・陶磁器、金属製品については調査員がおこなった。遺構の実測図・写真・航空測量図はそれぞれ調査員が台帳を作成・整理し、遺構カードとともにパーソナルコンピューターを使用してデータ入力した。データ入力は人材派遣会社に委託し、これを整理作業員が補足した。遺物の写真撮影は業者委託（金属製品・土器陶磁器は「写房楠華堂」）し、4×5インチ判及び5×7インチ判で各々白黒・カラースライドフィルムで撮影し、それぞれ納品を受けた。自然科学分析は①珪草分析②花粉分析③骨類同定の各項目について、平成16年度にバリノ・サーベイ株式会社に分析の委託をおこなった。本報告書の写真図版作成、遺構・遺物図版のレイアウト・トレース作業、遺物・遺構一覧表の作成、および本文原稿の執筆・編集・校正等については、平成16年度に武田健次郎を担当に、整理作業員の協力を得て埋蔵文化財調査事務所で行った。

F 整理体制

平成16（2004）年度

総括	桃野 真兎	埋蔵文化財調査事務所所長
	関 清	埋蔵文化財調査事務所副所長
	盛田世津子	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶務	竹中 慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	広田 英貴	埋蔵文化財調査事務所主任
	岩田 扶紀	埋蔵文化財調査事務所主任
整理総括	宮田 進一	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担当	武田健次郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	中村 亮仁	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	細辻 真澄	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

第三章 吉倉B遺跡の調査

1 調査地区の設定と基本層序

A 調査地区の設定

本書で報告する吉倉B遺跡の発掘調査とは、平成8年度に調査を実施したA地区、平成9年度に調査を実施したB地区の発掘調査のことを指す。

平成8年度調査のA地区は、吉倉B遺跡の推定範囲（南北400m、東西200m）の北端部分に位置する。この調査区は富山県総合運動公園の北側に隣接した調査地区で、その北側一帯の水田中に設定されたものである。調査地は過去には場整備が実施されており、A地区は水田2枚分の5,800㎡が調査された。

B地区はA地区の調査に引き続いて次年度に調査が実施された。A地区の更に北側に隣接し、面積は現水田1枚分の2883㎡を測る。

B 基本層序

A地区とB地区は近接しているため、土壌の堆積状況はほとんど同じである。以下両地区の概観および土壌の堆積状況について述べる。調査地の現況は平坦地形であるが、調査結果から旧地形には若干の高低差が窺えた。すなわち調査地東側が微高地状に高まっており、西側は谷状に落ち込む状況である。西側の谷の幅は約30mほどの規模をもち、調査区内を南北に縦断する。過去の周辺の本格調査および試掘調査から、このような埋没谷（旧河道）を数多く認めることができ、各旧河道の間に南北に長い微高地がこの付近一帯に広がっていた様相が明らかになってきている。吉倉B遺跡でも、その微高地上に堅穴住居などの集落遺構が確認されている。

遺構の分布のみられないA地区南側の南北30m東西60mの範囲については、ほ場整備時ないしはそれ以前に大きく地形の改変を受けていることが調査の結果明らかとなった。この範囲は以前、鯉の養殖池があったという話もあり、深いところでは検出面から1.5m以上の深さにおよぶ大規模な地形攪乱が認められた。調査前の現況は水田である。調査区は南側がやや高く北側が低い、遺構検出面の標高は県道側の南端付近が33.40m前後、北端付近が33.00mとなる。調査地南端と北端の比高差は0.5m未満で、それほど大きなギャップはみられない。調査地内の基本層序は上位から、Ⅰ層：耕作土、Ⅱ層：黒褐色砂質シルト（中世遺物包含層）、Ⅲa層：黄褐色砂質シルト（古代遺物包含層）、Ⅲb層：オリブ褐色砂質シルト（古代遺構基盤層）の順で堆積する。中世遺物包含層（Ⅱ層）は調査地の東側のみにみられ、旧河道付近に最も厚く堆積する。また調査地内の所々で基盤礫層（地山）が直接露出しており、最も浅い部分では耕作土直下が礫層となる。反対に基盤礫層が深い部分ではⅢb層との間に30～40cmの間層が認められる。

古た面は上下2層に分かれており、Ⅲa層上面が平安時代遺構の切り込み面、それより10cm掘り下げたⅢb層に奈良時代の遺構切り込み面がある。

2 吉倉B遺跡の調査

調査地（平成8年度調査A地区および平成9年度調査B地区）では、上層から順に、大きく中世～近代、古代上層、古代下層の3時期の遺構が検出されている。但し集落として検出される遺構は古代下層の時期にほぼ限定される。集落遺構は、A地区のほぼ東側で密集して検出された。古代の遺構については堅穴住居群以外では土坑、溝、谷が全域で検出された。特に北から西側部分に関しては自然流路の谷地形であり、村落の境界部分にあたると考えられる。これに比べ古代上層以降は、古代集落廃絶後の耕作関連と考えられるものが主体となる。また古代上層以降の北および西側部分は引き続き谷地形となっており、自然流路であったと考えられる。

(1) 古代の遺構

古代の遺構は西側では、南北に延びる自然流路が確認された。調査区の北東側では、堅穴住居および溝群などが検出された。また調査区南側は遺構面が後世の攪乱によって影響を受けており、遺構が確認されなかった。西側のSD59は最大幅25m、最小幅21m、深さ1.2mの規模をもつ自然流路である。近世の溝SD61と重複する。川底には2本の川筋が認められるが、恐らく流路が変わったためであろう。断面の土層観察から両者の先後関係を窺うことはできなかった。北東側の遺構検出面は上下2面が確認されている。上面では平行に延びる溝群がほぼ等間隔で確認されており、耕作関連の小溝群と考えられる。遺構は古代遺物包含層であるⅢa層黄褐色砂質シルトの上面から切り込む。下面では堅穴住居が10棟、堅穴状の土坑を呈し、カマドや炉など火所をもたない遺構が2基確認されている。堅穴住居は調査区中央やや北東寄りに集中して存在し、建物群は3～4群に分けることができる。またそれぞれの群で2～3回の重複関係を認めることができ、東西南北の3方向に馬蹄形状に堅穴住居が配置され中央が広場状を呈す。また堅穴住居集中区の南側では土坑が多数検出されている。東西方向に列状に並ぶ土坑も認められるが、建物にしては規則性に欠け掘方も浅く柱根痕跡などもないことから耕作痕の一部と考えられる。以下これらの遺構について記述していく。

古代下層

堅穴住居

SI01（図面12）

調査区東端に位置し、周壁にかかるため部分検出となった。検出部分の平面形態は長方形で、東端は調査区外へ延びる。全体の平面形態は方形と考えられる。検出部分の規模は、南北2.46m、東西1.28m、最大深0.26mを測る。壁面は緩やかな勾配をもち、カマドは認められないが、調査区外に存在するものと考えられる。また調査区東壁の北寄りの一部に貼り床と考えられる土層を確認している。明確な主柱穴は有しておらず、埋土はオリーブ褐色砂質シルトを基調とし、上層は粘性がやや強い。遺物では須恵器（杯・杯蓋）、土師器が出土しており、8世紀前半のほぼ完形の杯も出土した。

SI02（図面12）

SI02はSI01の南側約0.6mに隣接している。SI01と同様、東側が調査区外へと延びるため、西側半分を検出した。全体の平面形態は方形と考えられ、検出部の南北辺の長さ3.50m、東西1.41m、最大深0.31mを測る。カマドは認められないが、調査区外に存在する可能性がある。貼り床や柱穴は有しておらず、埋土は黄褐色砂質シルトを基調とし周囲の地山よりもやや締まりがある。出土遺物には須恵器の杯・杯蓋・壺蓋・横瓶や土師器の小型甕・長甕・鉢などがある。

SI03 (図面13)

SI03はSI02の西側2.5mにあり、竪穴住居集中区の中央東寄りに位置する。SI04と重複し、SI04よりも新しい。東西2.78m、南北2.36m、床面積6.56㎡、最大深0.35mの規模で方形の平面プランをもつ。竪穴住居の北壁中央の床面には南北0.9m、東西0.36mの範囲に焼土および炭化物層が広がっており、カマドと推定できる。煙出しは北壁中央に付けられており北側へと延びる。カマドの規模は煙出しの部分を含めて1.36m、幅0.76mを測り、掘り込みの深さは最深部で0.35mを測る。カマドに礎などの構築物は認められず、柱穴は確認できなかった。埋土は上層にオリブ褐色砂質シルト、下層に褐色砂質シルトが入る。カマド前面の床面直上からは土師器の小型甕、建物埋土からは須恵器の杯および杯蓋が出土しており、8世紀初頭から前半に比定できる。

SI04 (図面13)

SI04はSI03と重複する建物で、竪穴住居集中区の中央東寄りに位置する。東西3.76m、南北3.2m、面積12.03㎡、深さ0.26mを測り、平面形態は方形を呈する。床面の北東部分には南北2.3m東西2.04mの範囲に硬化面が広がっており、貼り床と考えられる。貼り床の厚さは6cmで、黄褐色砂質シルトで構成される。カマドは確認されておらず、SI03との重複部分に存在した可能性がある。遺構埋土は上層に褐色砂質シルト、下層にオリブ褐色砂質シルトが堆積する。遺物には土師器の小型甕の小片がある。

SI05 (図面14)

SI05は竪穴住居集中区の中央南寄りに位置する。建物中央部が中世の溝SD62と重複しているが、東西両端が残っており建物規模を確認できた。東西3.20m、南北3.05mの長方形を呈し、床面積は9.76㎡を測る。東壁中央部にカマドの煙出しが付けられており東側へと延びる。煙出しの根本付近には焼土が広がっており、SD62との重複部分にカマドが存在したと考えられる。柱穴および貼り床は確認できなかった。埋土はオリブ褐色砂質シルトを基調とし、検出面からの深さは0.26mを測る。遺物には須恵器の杯A・杯B、土師器の甕が出土している。

SI06 (図面15)

SI06は竪穴住居集中区の南寄りにあり、SI05の南西側3.5mに位置する。SI07と重複しており、SI06の方が新しい。東西3.5m、南北3.41m、床面積11.93㎡を測り、平面形態は隅丸方形である。建物の東側2ヶ所で柱穴(SP24・25)を検出したが、深さ0.03mと非常に浅く、柱根も確認されていない。本来は、東側と同様に西側にも柱穴が2本並ぶ4本柱構造をもつ建物であったと考えられる。他の竪穴住居や同時期における周辺遺跡の竪穴住居でも柱穴が明確に確認されていないものが大半であり、柱穴が明確に残らない柱構造をしていたためと考えられる。東壁南寄りにはカマドと考えられる焼土及び炭化物層の広がりを確認した。煙出しは東側延び、礎などのカマド構築材は確認出来なかった。埋土はオリブ褐色砂質シルトを基調とし、検出面からの深さは0.17mを測る。遺物では須恵器の杯A・杯B・杯蓋、土師器の甕がカマドを中心に小片が大半であるが出土した。

SI07 (図面15)

SI07は、建物西側部分がSI06と重複する竪穴住居である。南北3.74m、東西3.46m、床面積12.94㎡を測り、平面形態は方形である。建物南東隅にはカマドと考えられる焼土及び炭化物層の広がりを確認した。南壁には煙道が付けられており、南側へ延びる。カマド西側では幅0.35m長さ1mのカマド袖部と考えられる地山の盛り上がりを確認した。焼土及び炭化物層はカマド袖部の内側と外側前面の一部に広がっていた。またカマド西側に近接する穴、SK67の埋土には多量の炭化物が含まれていた。

柱穴や貼り床は確認出来なかった。埋土はオリブ褐色砂質シルトを基調とし、検出面からの深さは0.24mを測る。遺物は須恵器の杯A・杯B・杯蓋、土師器の把手付き甕や甕が出土した。

SI08 (図面14)

SI08は竪穴住居集中区の中央に位置する竪穴状の遺構である。東西3.01m、南北2.66m、床面積は8.01㎡を測り、平面形態は隅丸方形を呈する。古代上層のSD20と重複しており、カマドや炉などの火所をもたず、貼り床や柱穴も認められなかった。埋土はオリブ褐色砂質シルトを基調とし、検出面からの深さは0.14mを測る。遺物は須恵器の杯、土師器の甕・小型甕が出土している。

SI09 (図面16)

SI09は、竪穴住居集中地区の東寄りにあり、SI09・10・11が重複して存在し、SI09が最も新しい。南北3.88m、東西3.25m、床面積12.61㎡で、平面形態は隅丸方形を呈する。またSI09は後世の耕作痕と考えられるSD22とも重複している。東壁の北寄りにはカマドと考えられる床面よりもわずかに掘り窪められた部分を確認した。カマドの南側では東壁中央から建物中心部に至る広い範囲で炭化物層が認められた。これはカマドで煮炊きした際に出た灰などをカマドの南側の壁際に溜めていたものが、建物廃絶後に耕作地として転用されて攪乱を受けたために、炭化物などが拡散したものと推測される。柱穴や貼り床などは確認していない。建物埋土は上層に黄褐色砂質シルト、下層にはにぶい黄褐色砂質シルトが入る。検出面からの深さは0.24mを測る。遺物は須恵器の杯A・杯蓋・壺、土師器の小型甕が出土した。

SI10 (図面16)

SI10は竪穴住居集中区の西側に位置し、北東隅をSI09によって切られる。南北3.35m、東西2.49m、床面積8.34㎡の小規模な長方形プランを有する竪穴住居である。南壁のほぼ中央にカマドと考えられる炭化物層の堆積を確認した。遺構埋土は褐色砂質シルトを基調とし、検出面からの深さは0.26mを測る。遺物は須恵器の杯A・甕、土師器の甕が出土した。

SI11 (図面17)

SI11は竪穴住居集中区の西側に位置し、南西隅をSI09によって切られる。南北2.92m、東西2.32m、床面積8.4㎡の小規模な方形プランを有する竪穴住居である。カマドや貼り床、柱穴などは確認していない。遺構埋土は上層が黄褐色砂質シルト、下層はやや締まりの強い褐色砂質シルトであり、検出面からの深さは0.16mを測る。南壁のやや東寄りにカマドと考えられる炭化物層の堆積を確認した。遺構埋土は褐色砂質シルトを基調とし、検出面からの深さは0.16mを測る。遺物は須恵器の杯Aや甕、土師器の杯や甕が出土した。

SI12 (図面17)

SI12は竪穴住居集中区の北側に位置し、他の建物群からやや距離をおいた配置である。南北3.02m、東西1.70m、面積5.13㎡の長方形プランを有し、遺構埋土はオリブ褐色砂質シルトを基調とし、検出面からの深さは0.22mを測る。竪穴内からカマドや柱穴は確認できなかった。遺物は須恵器、土師器が出土した。

土坑等

土坑については、規模によって0.4m以下をSP(穴)、0.4m～2mのものをSK(土坑)、2m以上の大型土坑や落込み、不明遺構をSXと表記した。

穴

SP01 (図面18)

SK27と重複する土坑で、SK27よりも新しい。平面形態は長楕円形で、規模は長径0.27m、短径0.20m、深さ0.08mを測る。埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には須恵器の杯A・Bがある。

SP02 (図面18)

平面形態は円形で、規模は径0.20m、深さ0.03mを測る。埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には須恵器と土師器の甕がある。

SP03 (図面18)

土坑集中区に位置し、SK13・14と東西方向に並ぶ柱穴である。径0.35mの円形を呈し、深さ0.10mを測る。埋土は黄褐色砂質シルトの単層である。出土遺物は認められない。

SP04 (図面18)

平面形態は円形で、径0.32m、深さ0.04mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は灰オリーブ色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP05 (図面18)

平面形態は円形で、径0.27m、深さ0.11mを測る。断面形態はU字形で、埋土は灰オリーブ色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP06 (図面18)

平面形態は円形で、径0.29m、深さ0.05mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は灰オリーブ色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP07 (図面18)

平面形態は円形で、径0.23m、深さ0.07mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は灰オリーブ色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP08 (図面18)

平面形態は円形で、径0.31m、深さ0.06mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は明黄褐色シルト質砂で、出土遺物は認められない。

SP09 (図面18)

平面形態は円形で、径0.24m、深さ0.03mを測る。埋土はオリーブ色シルト質砂で、出土遺物は認められない。

SP10 (図面18)

平面形態は円形で、径0.21m、深さ0.07mを測る。埋土はオリーブ色シルト質砂で、出土遺物は認められない。

SP11 (図面18)

平面形態は円形で、径0.34m、深さ0.04mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はオリーブ色粗砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP12 (図面18)

平面形態は円形で、径0.32m、深さ0.03mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はオリーブ色粗砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP13 (図面18)

平面形態は円形で、径0.40m、深さ0.07mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はオリーブ色粗砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP14 (図面18)

平面形態は円形で、径0.36m、深さ0.07mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は灰オリーブ色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP15・19・20 (図面18)

いずれも古代下層の遺構である。SK05と合わせて、SI01・02に近接して平行に並ぶ穴である。軸線が南北方向に延び、穴と穴の間隔は0.7～1.4mを測る。SP19は径0.30mの円形を呈し、深さ0.10mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトのみの単層となる。SP20は径0.35mの円形を呈し、深さ0.10mを測る。埋土は褐色砂質シルトである。SP15は径0.27mの円形を呈し、深さ0.05mを測る。埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。いずれの穴からも出土遺物は認められない。

SP16 (図面18)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.25m、短径0.15m以上、深さ0.07mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器の甕がある。

SP17 (図面18)

平面形態は円形で、径0.47m、深さ0.11mを測る。埋土はオリーブ褐色粘質シルトで、出土遺物は認められない。

SP18 (図面18)

平面形態は円形で、規模は径0.30m、深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には土師器の甕がある。

土坑

SK01・02・21・65 (図面19・20)

いずれも古代下層の遺構である。SI01の西側に位置する。円形および楕円形を呈する。長軸方向は様々であるが、中心軸が南北方向に列状に並ぶ。SK21は長径1.25m、短径0.50mの不整形を呈し、深さは0.10mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトであり、遺物では土師器が出土している。SK65は長径0.60mの楕円形を呈し、深さ0.04mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトのみの単層である。SK01は長径0.55mの楕円形を呈し、深さは0.03mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトのみの単層となる。SK02は径0.40mの円形を呈し、深さ0.06mを測る。埋土は第1層：オリーブ褐色砂質シルト、第2層：オリーブ褐色砂質シルトである。SK21以外からは遺物が出土していない。

SK03 (図面19)

平面形態は不整形で、長径0.45m、短径0.27m以上、深さ0.07mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には土師器の甕がある。

SK04 (図面19)

平面形態は楕円形で、長径0.40m、短径0.20m、深さ0.10mを測る。埋土は第1層：オリーブ褐色砂質シルト、第2層：黄褐色砂質シルトとなる。出土遺物には須恵器の杯蓋がある。

SK05 (図面19)

SK05は長径0.40mの楕円形を呈し、深さ0.05mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルト層に炭化物が少量混入する。出土遺物は認められない。

SK06 (図面19)

平面形態は楕円形で、長径0.65m、短径0.56m、深さ0.11mを測る。埋土は第1層：オリブ褐色砂質シルトとなる。出土遺物は認められない。SI07と重複しており、土坑の方が新しい。また遺構が建物検出面から切り込んでいることからSI07との関連は薄い。

SK07・08 (図面19)

いずれも古代下層の遺構である。両者は重複しておりSK07の方が新しい。SK07は長径0.37mの楕円形を呈し、深さ0.07mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層である。SK08は長径0.54mの楕円形を呈し、深さ0.04mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。いずれの土坑からも出土遺物は認められない。

SK09 (図面19)

平面形態は楕円形で、長径0.80m、短径0.55m、深さ0.06mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には須恵器、土師器の碗・甕がある。

SK10 (図面19)

SD18およびSI05と重複する土坑で、SD18よりも古く、SI05の検出面から切り込んでいる。SI05が埋まってから形成されたものと考えられ、SI05との関連は薄い。平面形態は楕円形で、規模は長径0.38m、短径0.32m、深さ0.14mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトの単層のみとなる。出土遺物には須恵器がある。

SK11 (図面19)

平面形態は円形で、規模は径0.40m、深さ0.10mを測る。土坑集中区に位置するものであり、埋土は黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK12 (図面19)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.40m、短径0.34m、深さ0.14mを測る。埋土は黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK13・14 (図面19)

いずれも古代下層の遺構であり、土坑集中区に位置し、東西方向に並ぶ土坑である。SK13は径0.45mの円形を呈し、深さ0.15mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層である。SK14は長径0.55mの楕円形を呈し、深さ0.15mを測る。埋土は黄褐色砂質シルトのみの単層である。いずれの土坑からも出土遺物は認められない。

SK15～18 (図面19)

いずれも古代下層の遺構で、土坑集中区に位置し、東西方向に列状に並ぶ土坑である。SK15は径0.45mの円形を呈し、深さ0.07mを測る。埋土はにぶい黄色粘質シルトを基調とする。SK16は径0.40mの円形を呈し、深さ0.18mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層である。SK17は径0.45mの円形を呈し、深さ0.15mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層である。SK18は径0.65mの円形を呈し、深さ0.10mを測る。埋土は黄褐色砂質シルトに小礫が混じる。いずれの土坑からも出土遺物は認められない。

SK19 (図面20)

平面形態は楕円形で、長径1.00m、短径0.74m、深さ0.12mを測る。埋土は黄褐色砂質シルト層に小礫が混じる土層で、出土遺物はない。

SK20 (図面20)

平面形態は円形で、径0.44m、深さ0.05mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層である。出土遺物は認められない。

SK22 (図面20)

平面形態は楕円形で、SD02を切る。長径0.46m、短径0.28m、深さ0.04mを測る。断面形態は不整形で非常に浅い。埋土は浅黄色シルト質砂のみの単層である。出土遺物は認められない。

SK23 (図面20)

平面形態は楕円形で、長径0.78m、短径0.35m、深さ0.10mを測る。断面形態はU字形で、埋土はオリブ黄色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK24 (図面20)

平面形態は楕円形で、長径0.89m、短径0.59m、深さ0.09mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は第1層：灰オリブ色シルト質砂を基調とする。第2層：明黄褐色シルト質砂、第3層：暗灰黄色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SK25 (図面20)

平面形態は楕円形で、長径0.47m、短径0.31m、深さ0.04mを測る。断面形態は不整形で、検出面からの掘方は非常に浅い。埋土はオリブ黄色砂質シルト層で、埋土下位に酸化鉄が沈着。出土遺物は認められない。

SK26 (図面20)

平面形態は楕円形で、断面形態はレンズ状の掘方をもつ。長径3.15m、短径1.94m、深さ0.22mを測る。埋土は第1層：黄色シルト質砂、第2層：黒褐色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SK27 (図面20)

SP01と重複する楕円形の土坑である。規模は長径0.91m、短径0.50m、深さ0.09mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK28 (図面20)

平面形態は円形で、径0.42m、深さ0.20mを測る。埋土は黄褐色砂質シルトのみの単層である。出土遺物は認められない。

SK29 (図面20)

平面形態は楕円形、長径0.52m、短径0.36、深さ0.07mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は黄褐色砂質シルトのみの単層である。出土遺物は認められない。

SK63 (図面20)

平面形態は楕円形で、長径0.56m、短径0.46、深さ0.15mを測る。埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。遺物は土師器の甕が出土した。

SK64 (図面08)

SD90と重複する土坑で、SD90よりも古い。平面形態は不整形で、規模は長径0.53m、短径0.40m、深さ0.12mを測る。埋土は暗オリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には須臾器の甕がある。

溝**SD01** (図面21)

SD59の西側部分にあり、平面形態が直線的で、南北方向にのびる溝である。北端はSD58と重複し、

SD58を切る。途中でSD02に切られ一旦途切れた後再び南側へと続き、南端がX50付近で消失する。長さ16.7m、最大幅0.55m、最大深0.21mを測る。断面形態はU字形で、埋土は第1層：オリブ色シルト質粘土、第2層：灰オリブ色粘質シルト、第3層：明黄褐色砂質シルトにマンガン粒が斑点状に混じる。出土遺物は土師器のみがみられる。

SD02 (図面21)

平面形態は三日月状で、概ね南北方向にのびる溝である。SD01と重複し、SD01を切る。長さ7.3m、最大幅0.60m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形で、埋土は黄褐色シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD03 (図面21)

SD59の東岸沿いを直線的に南北方向にのびる溝である。長さ8.30m、最大幅0.65m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：暗オリブ色シルト質砂、第2層：オリブ黄色シルト質砂となる。出土遺物は須臾器のみがみられる。

SD04 (図面21)

SD59とSD58の空間に位置する南西から北西方向に直線的のびる小溝である。長さ1.10m、最大幅0.20m、最大深0.03mを測る。断面形態はU字形で、埋土は灰オリブ色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD05 (図面21)

SD59とSD58の空間に位置する南北方向に直線的のびる溝である。長さ5.20m、最大幅0.30m、最大深0.06mを測る。断面形態はU字形で、埋土は灰オリブ色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD06 (図面21)

SD59の東岸沿いをやや蛇行気味に南北方向に走る溝である。南端は調査区外へと続くが、北端はX50付近で消失する。上層の溝群と重複し、全ての溝に切られる。検出部の全長83.1m、最大幅3.00m、最大深0.64mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色粗砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD58・87・88 (図面03・31)

いずれもSD59の西側を重複しながら併走する比較的大きな溝群である。SD58は幅7.10m、深さ0.65mの規模である。また堆積状況からSD58は最後出の溝であり、埋土が粗砂で形成されていることから、出水時に短期間に一気に埋もれた可能性が高い。出土遺物には須臾器の杯・杯蓋、土師器の杯や甕が多数出土した。SD87・88はほぼ同一の場所で重複して検出された溝であり、SD87の方が後続する溝である。SD87は幅1.46m深さ0.24mを測る。遺構埋土は第1層：にぶい黄色シルト質砂、第2層：明黄褐色粘質シルト、第3層：明黄褐色粗砂に分層される。SD88は灰色シルト質砂の単層のみとなる。出土遺物はSD58に反して、両溝では認められなかった。

SD59 (図面32・33)

調査地を南西から北東方向に縦断して走る谷で、調査区北端付近でやや屈曲して北側に方向を転じる。谷幅は最大21.9mの幅を持ち、調査区北側の最深部では深さ0.66m前後を測る。SD59の両岸を比較すると東岸部は西岸部に比べ緩やかな傾斜をもつ。緩やかな傾斜をもつ東岸の南東方向には前述した堅穴住居集中区が配置されている。また、谷の西側には、ほぼSD59とほぼ同一方向に走る溝を中心に遺構を検出した。谷の底面には島状の高まりが認められ、数次の水流失遷によって形成された凹

凸と考えられる。埋土は明黄褐色砂質シルトを基調とする。谷の底面付近では酸化鉄の沈着による赤化・硬質化した部分や、あるいはマンガン沈着の著しい部分が認められた。出土遺物には奈良～平安時代の須恵器の杯・壺・甕、土師器の杯・碗が出土することから古代の上下層面を通して存続したものと考えられる。

古代上層

土坑

SK30 (図面21)

平面形態は円形で、径0.94m、深さ0.05mを測る。SD07と重複し、SD07よりも古い土坑であり、埋土は褐色砂質シルトが入る。出土遺物には須恵器の杯・甕、土師器の甕がある。

SK31 (図面21)

SD14と重複する土坑であり、SD14よりも新しい。平面形態は長径0.94m、短径0.70mの楕円形を呈し、深さ0.07mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層である。遺物は須恵器の甕と土師器の甕が出土した。

SK32 (図面21)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.70m、短径0.44m、深さ0.10mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器の甕がみられる。

SK33 (図面21)

SD59の東岸に位置する。平面形態は楕円形で、長径0.50m、短径0.30m、深さ0.10mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は第1層：黄褐色砂質シルト、第2層：オリーブ褐色砂質シルトとなる。出土遺物は認められない。

SK34 (図面21)

西側溝群の東に位置する。平面形態は不整形で、長径0.97m、短径0.50m、深さ0.08mを測る。埋土は第1層：褐色砂質シルト、第2層黄褐色砂質シルト。出土遺物は認められない。

SK35 (図面21)

SD59の東岸に位置する。平面形態は達磨形で、長径0.75m、短径0.45m、深さ0.06mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルト層にマンガンが混じる層である。出土遺物は認められない。

SK36 (図面21)

畑のさくと考えられるSD18と重複する土坑である。平面形態は楕円形で、長径1.70m、短径0.80m、深さ0.17mを測る。埋土はオリーブ褐色砂質シルトを基調とし、炭化物がブロック状に混入する。底面には焼土が広がっており、赤褐色に変色した被熱痕跡が窺える。出土遺物には土師器の杯や甕がある。また埋土内からは炭化した木と人骨を確認した。同定された骨は被熱した成人男性の四肢骨および頭骨の一部の可能性が高く、出土した骨は原型をとどめないほどの細片が中心であった。火葬後の土坑に捨骨をしたものであろう。

溝

古代上層からは同一方向にほぼ等間隔で平行してのびる小溝群が検出された。溝群はSD59の東側で2ヶ所に集中して配置されている。その内の東側の溝群は竪穴住居集中区の上面に形成されたもので、竪穴住居廃絶後に形成された9世紀代の耕作関連の遺構と考えている。西側の溝群はSD59の東岸沿いに平行に等間隔で並ぶ。東側の溝群と同方位を示し、東西断断面も後世の攪乱によるためと考

えられる。恐らく同時期の同じ性格をもった遺構と考えられる。

SD07 (図面29)

平面形態はL字状で、北から南にのびた後、途中で屈曲し西へのびる溝。SD91と重複し、SD91よりも古い。また、溝の方向も他の溝と異なる方位を示す。長さ16.8m、最大幅0.60m、最大深0.18mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には須恵器の杯・甕、土師器の甕がみられる。

SD08 (図面29)

平面形態は直線的で、南西から北東にのびる小溝。北東端はSD09に接合し切られる。長さ2.20m、最大幅0.40m、最大深0.17mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD09 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端は調査区外に消失、東端はSD62に接合し切られる。SD16はSD09の延長と考えられる。長さ9.20m、最大幅0.50m、最大深0.13mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。土師器の甕が出土。

SD10 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端は調査区外に消失、東端はSD62に接合し切られる。長さ5.80m、最大幅0.40m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。須恵器の杯、土師器の甕が出土。

SD11 (図面29)

平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南東端は調査区外に消失、北西端はSD62に接合し切られる。長さ4.70m、最大幅0.50m、最大深0.15mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。土師器の甕が出土。

SD12 (図面29)

平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南東端は調査区外に消失、北西端はSD62に接合し切られる。長さ9.50m、最大幅0.60m、最大深0.18mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。須恵器の横瓶(243)、土師器の甕が出土。横瓶はSI02のものと接合することから、耕作時に攪乱されて混じり込んだものであろう。

SD13 (図面29)

平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南東端は調査区外へ消失。北東端はSD63に接合し消失する。途中SD63に切られ途切れる。長さ9.50m、最大幅0.60m、最大深0.14mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には土師器の甕がみられる。

SD14 (図面29)

平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南東端は調査区外へ消失。北東端はSD63に接合し消失する。SK31とは重複し、土坑に切られる。長さ8.00m、最大幅0.40m、最大深0.17mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には須恵器の甕および土師器の甕がみられる。

SD15 (図面29)

平面形態は直線的で、北西から南東にのびる溝。南東端は調査区外へ消失。北東端はSD63に接合し消失する。途中SD63に切られ途切れる。長さ6.50m、最大幅0.50m、最大深0.13mを測る。断面形

態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には土師器の杯・甕がみられる。

SD16 (図面29)

平面形態は東から西へのびた後、再び東へのびるU字状に湾曲した溝である。東端はSD62で途切れるが、SD09・89が続くと考えられ調査区外までのびる。SD62までの規模は、長さ26.5m、最大幅1.00m、最大深0.25mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は須恵器の杯、土師器の甕がみられる。

SD17 (図面29)

平面形態は直線的で、東から西へのびる溝。東端はSD62に接合し消失する。平面形態がドーナツ状のSD18と重複し、SD18を切る。長さ14.5m、最大幅1.10m、最大深0.32mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：褐色砂質シルト、第2層：オリーブ褐色砂質シルト、第3層：暗褐色砂質シルトとなる。出土遺物には須恵器の杯・甕、土師器の甕がある。

SD18 (図面29)

第1溝集中区に位置する溝で、平面形態はリング状を呈す。2本のさく状遺構が合流したものであろう。SD17と重複し、SD17よりも古い。長さ11.0m、最大幅1.40m、最大深0.24mの規模をもち、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には須恵器がみられる。

SD19 (図面29)

平面形態は直線的で東から西へのびる。長さ10.8m、最大幅1.10m、最大深0.15mを測る。断面形態は逆台形で浅く広い。埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。須恵器の杯・甕、土師器の甕や把手の一部が出土した。

SD20 (図面29)

平面形態は直線的で、東から西へのびる溝。長さ7.70m、最大幅1.60m、最大深0.13mを測る。SK26と重複し土坑に切られる。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトとなる。須恵器の杯・甕、土師器の甕が出土。

SD21 (図面29)

平面形態は直線的で、東から西へのびる溝。長さ4.20m、最大幅0.60m、最大深0.16mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はオリーブ褐色砂質シルトのみの単層である。出土遺物には土師器の甕がある。

SD22 (図面29)

平面形態は不整形で、概ね東西方向へのびる溝。西端はT字状に南北に分岐し、更に東西溝と合流する。長さ28.0m、最大幅1.00m、最大深0.33mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はオリーブ褐色砂質シルトを基調とする。出土遺物には須恵器の甕、土師器の甕がある。

SD23 (図面29)

平面形態は直線的で、東西へのびる溝。長さ2.90m、最大幅0.40m、最大深0.23mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD24 (図面29)

平面形態は直線的で、東西へのびる溝。SD62によって途中とぎれるが、SD62の更に東側にものびる。長さ12.7m、最大幅0.50m、最大深0.18mを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器の甕がある。

SD25 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端は攪乱によって消失する。長さ4.60m、最大幅0.50m、最大深0.15mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はにぶい黄色砂質シルトのみの単層となる。須恵器の杯、土師器の甕が出土した。

SD26 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる小溝である。SD27と重複し、SD27を切る。長さ3.46m、最大幅0.44m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトとなる。出土遺物には土師器の甕がみられる。

SD27 (図面29)

平面形態は不整形で、概ね東西にのびる溝である。西端はSD26と重複し、SD26に切られる。長さ2.30m、最大幅0.50m、最大深0.15mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトとなる。出土遺物には土師器の甕がみられる。

SD28 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。長さ3.20m、最大幅0.80m、最大深0.10mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器の甕がみられる。

SD29 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端はSD60に接合する。長さ3.20m、最大幅0.60m、最大深0.13mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物には土師器の甕がみられる。

SD30 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端は攪乱に切れ、西端はSD60に接合する。長さ3.20m、最大幅1.00m、最大深0.10mを測る。断面形態は逆台形で浅く広い。埋土は暗褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器の甕がある。

SD31 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる小溝。長さ2.30m、最大幅0.50m、最大深0.29mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルト層である。出土遺物は認められない。

SD32 (図面29)

平面形態は西から東にのびた後、再び西へのびるU字状に湾曲した溝である。西端は攪乱によって途切れるが、SD29・30が続きと考えられSD60までのびる。攪乱までの規模は、長さ8.50m、最大幅0.50m、最大深0.06mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD33 (図面29)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端はSD62と重複し、SD62に切られる。西端は攪乱を受けており消失する。長さ8.20m、最大幅0.70m、最大深0.21mを測る。断面形態はレンズ状で、浅く広い。埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD34 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる小溝である。長さ2.90m、最大幅0.60m、最大深0.09mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトを基調とする単層となる。出土遺物は認められない。

SD92 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。長さ5.50m、最大幅0.42m、最大深0.10mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD35 (図面30)

東西方向にのびる小溝である。長さ0.67m、最大幅0.25m、最大深0.08mを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD36 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。長さ5.80m、最大幅0.80m、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形で、浅く広い掘方である。埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD37 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる小溝。長さ3.00m、最大幅0.50m、最大深0.13mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD38 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端は開放しており、SK66と重複する。長さ2.40m、最大幅0.50m、最大深0.05mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD39 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。長さ2.80m、最大幅0.40m、最大深0.08mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD40 (図面30)

平面形態はU字状を呈し、東西方向にのびる溝で本来は平行にのびる2本の溝であったと考えられる。SD06と重複し、SD06を切る。長さ8.00m、最大幅0.60m、最大深0.20mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトを基調とする層。出土遺物は認められない。

SD41 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる小溝。長さ1.75m、最大幅0.50m、最大深0.19mを測る。断面形態はU字形を呈し、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD42 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。SD06と重複し、SD06を切る。長さ3.80m、最大幅0.70m、最大深0.18mを測る。断面形態は逆台形で広く浅い掘方をもつ。埋土は第1層：にぶい黄褐色砂質シルト、第2層：褐色砂質シルト、第3層：にぶい黄橙色砂である。出土遺物は認められない。

SD43 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端、東端とも消失。長さ5.20m、最大幅1.20m、最大深0.24mを測る。断面形態はU字形で、埋土は第1層：褐色砂質シルト、第2層：にぶい黄褐色砂質シルト、第3層：黄褐色砂である。出土遺物は認められない。

SD44 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる小溝。西端はSD45に切られる。長さ2.50m、最大幅0.40m、最大深0.07mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD45 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。SD44・54と重複し両者を切る。長さ3.50m、最大幅0.50m、最大深0.36mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD46・47 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。両者は重複する部分があり、SD47の方が新しい。長さ2.00m、最大幅0.50m、最大深0.12mを測る。断面形態はSD47がレンズ状、SD46が逆台形である。埋土は前者がにぶい黄褐色砂質シルト、後者が褐色砂質シルトでいずれも単層のみである。出土遺物は両者とも認められない。

SD48 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端はSD06を切る。長さ3.50m、最大幅0.40m、最大深0.25mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトの単層となる。出土遺物は認められない。

SD49 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。SD06を切る。長さ4.10m、最大幅0.50m、最大深0.15mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD50 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる小溝。長さ1.60m、最大幅0.40m、最大深0.06mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は第1層：にぶい黄褐色砂質シルト、第2層：黄褐色砂質シルトとなる。出土遺物は認められない。

SD51 (図面30)

平面形態はL字状で、東西にのびて南側に折れる溝。SD06を切り、東西方向部分はSD50と同一の溝の可能性がある。長さ6.00m、最大幅0.60m、最大深0.13mを測る。断面形態は東西部分は逆台形、南北部分はレンズ状となる。埋土はにぶい黄褐色砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD52 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。SD06と重複し、SD06を切る。長さ3.10m、最大幅0.50m、最大深0.12mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD53 (図面30)

平面形態は直線的で、南東から北西にのびる小溝。SD06と重複し、SD06を切る。長さ1.50m、最大幅0.40m、最大深0.04mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD54・55 (図面30)

平面形態はいずれも直線的で、東西にのびる溝であるが、SD55は途中南側へ曲がり、両者は東端で合流する。西端は攪乱によって消失する。SD06とは重複し、SD06を切る。SD55は最大幅0.40m、最大深0.11mを測り、SD54は最大幅0.40m、最大深0.11mを測る。断面形態は共に逆台形の掘方である。埋土はいずれもオリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD56 (図面30)

平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。南東端はSD57と合流し、北西端はSD06と接合し

消失。長さ1.80m、最大幅0.50m、最大深0.06mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層。出土遺物は認められない。

SD57 (図面30)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。東端はSD56と合流し、西端はSD06と接合し消失。長さ0.85m、最大幅0.70m、最大深0.05mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はオリブ褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

(2) 中・近世の遺構

中世包含層(Ⅱ層)を掘削すると上層遺構面となり、中世の遺構が検出されるが、近世・近代の遺構もⅡ層の上面から切り込んでいる。このため両者の遺構は結果的に上層の同一検出面で混在する。上層遺構面では掘立柱建物など集落を構成する遺構は確認されておらず、主に農業用の水利関係の遺構を検出した。このため遺構は溝が中心となる。その他、大小様々な土坑や穴を確認しているものの、明確に掘立柱建物の柱穴配置をもつものは認められない。時期的には中世から近代までの様々な時代の溝および土坑が確認されている。以下これらの遺構について記述していく。

穴

SP21 (図面44)

平面形態は円形で、規模は径0.33m、深さ0.04mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器の甕がある。

SP22 (図面44)

平面形態は円形で、径0.32m、深さ0.09mを測る。U字形を呈し、埋土は灰オリブ色シルト質砂で、出土遺物は認められない。

SP23 (図面44)

平面形態は円形で、径0.23m、深さ0.12mである。断面形態は逆台形を呈し、埋土は第1層：灰オリブ色砂質シルト、第2層：オリブ色砂質シルトである。出土遺物はない。

土坑

SK37 (図面44)

平面形態は円形で、径0.67m、深さ0.18mを測る。断面形態はW字形で、埋土は第1層：黒褐色砂質シルト、第2層：黒褐色砂質シルトと暗褐色砂質シルトの混土となる。第3層：暗褐色砂質シルト、第4層：黒褐色砂質シルトとなる。出土遺物は須恵器の杯がみられた。

SK38 (図面44)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.70m、短径0.45m、深さ0.10mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は暗褐色砂質シルト層となる。出土遺物は土師器の甕がみられた。

SK39 (図面44)

平面形態は楕円形で、規模は長径1.14m、短径0.70m、深さ0.11mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は第1層：暗褐色砂質シルト、第2層：にぶい黄褐色砂質シルトを基調とする。出土遺物は須恵器と土師器がみられる。

SK40 (図面44)

平面形態は楕円形で、長径0.75m、短径0.58m、深さ0.06mを測る。断面形態は逆台形で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器の甕がみられる。

SK41 (図面44)

平面形態は円形で、規模は径0.45m、深さ0.20mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は第1層：黒色砂質シルト、第2層：にぶい黄褐色砂質シルトとなる。出土遺物は、土師器の甕がみられる。

SK42 (図面44)

平面形態は楕円形で、長径0.56m、短径0.28m、深さ0.08mを測る。断面形態は逆台形を呈し、埋土は暗褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

SK43 (図面44)

平面形態は不整形で、規模は径0.50m、深さ0.13mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は黒褐色粘質シルトを基調とする。出土遺物は土師器がみられる。

SK44 (図面44)

平面形態は隅丸方形で、規模は長辺1.02m、短辺0.66m、深さ0.22mを測る。断面形態は逆台形となる。埋土は第1層：灰色砂質シルト、第2層：にぶい褐色シルト質砂、第3層：灰オリーブ色シルト質砂に分層される。出土遺物は認められない。

SK45 (図面44)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.66m、短径0.43m、深さ0.16mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は第1層：褐灰色粗砂、第2層：灰色砂質シルト、第3層：オリーブ色シルト質砂に分層される。出土遺物は認められない。

SK46 (図面44)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.56m、短径0.33m、深さ0.04mを測る。埋土は灰色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK47 (図面44)

平面形態は円形で、規模は径0.88m、深さ0.22mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：黒褐色シルト質砂、第2層：にぶい褐色シルト質砂、第3層：灰オリーブ色シルト質砂、第4層：浅黄色粘質シルトとなる。出土遺物は認められない。

SK48 (図面44)

平面形態は円形で、規模は径0.86m、深さ0.15mを測る。SX03と重複し、SX03を切る。断面形態は逆台形で、埋土は灰オリーブ色シルト質砂を基調とし、灰色砂混じり粘土がブロック状に混じる。出土遺物は認められない。

SK49 (図面44)

平面形態は楕円形で、長径0.91m、短径0.73m、深さ0.20mを測る。SX03と重複し、SX03に切られる。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：灰色砂質シルト、第2層：灰オリーブ色シルト質砂、第3層：浅黄色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SK50 (図面45)

平面形態は楕円形で、長径0.98m、短径0.82m、深さ0.20mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は灰オリーブ色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SK51 (図面45)

平面形態は楕円形で、SD80を切り込む。規模は、長径0.95m、短径0.42m、深さ0.28mを測る。埋土は第1層：オリーブ黒色シルト質砂、第2層：灰オリーブ色粘質シルト、第3層：灰色シルト質粘土に分層される。出土遺物は認められない。

SK52 (図面45)

平面形態は円形で、SD80を切り込む。規模は径0.73m、深さ0.03mと非常に浅く広い土坑である。埋土は第1層：橙色シルト質砂、第2層：にぶい橙色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SK53～55 (図面45)

平面形態はSK53は楕円形、他はいずれも円形である。SK53の規模は長径0.86m、短径0.46m、深さ0.04mを測る。SK53を他の穴が切るが、深さはほぼ同じである。埋土はにぶい橙色シルト質砂、SK54はオリブ黒色シルト質砂、SK55は灰オリブ色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SK56 (図面45)

平面形態は円形で、規模は径0.42m、深さ0.06mを測る。埋土は第1層：オリブ黒色シルト質砂、第2層：灰オリブ色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SK57 (図面45)

平面形態は楕円形で、規模は長径0.71m、短径0.54m、深さ0.05mを測る。埋土は第1層：オリブ黒色シルト質砂、第2層：灰オリブ色シルト質砂となる。出土遺物はなし。

SK58 (図面45)

平面形態は円形で、径0.53m、深さ0.07mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：オリブ黒色シルト質砂、第2層：灰オリブ色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SK59 (図面45)

平面形態は楕円形で、長径0.99m、短径0.42m、深さ0.52mを測る。断面形態はU字形で、埋土は第1層：灰オリブ色砂質シルト、第2層：暗オリブ灰色シルト質粘土となる。出土遺物は認められない。

SK60 (図面45)

平面形態は円形で、規模は径0.54m、深さ0.12mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はオリブ黒色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK61 (図面45)

SD60・61の間に位置する大型の土坑である。平面形態は不整形で、規模は長辺3.51m、短辺0.85m、深さ0.05mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器の甕がみられる。

SK62 (図面45)

SD61の左岸に位置する大型の土坑である。平面形態は不整形で、規模は長辺5.20m、短辺1.25m、深さ0.20mを測る。断面形態は不整形で、埋土は第1層：黒褐色砂質シルト、第2層：にぶい黄褐色砂、第3層：にぶい黄褐色砂質シルト、第4層：灰黄褐色砂質シルトとなる。出土遺物は土師器の甕がみられる。

SX01 (図面36)

平面形態は不整形で、規模は長径2.01m以上、短径1.72m、深さ0.12mを測る。埋土は第1層：灰色砂質シルト、第2層：褐灰色砂質シルトに分類される。出土遺物は認められない。

SX02 (図面36)

調査区北西端に位置する大規模な落ち込みである。検出範囲の規模は、幅約20.0m、深さ約2.0mを測る。出土遺物には瀬戸および近代の遺物が認められる。

溝

SD60 (図面47)

調査地中央の微高地部分を南北にのびる溝である。ほ場整備時の削平のために残りが悪く、調査区内で一旦途切れるが、残存幅5～6mと比較的規模の大きな溝であり、左岸の一部に護岸のためと考えられる石列の一部が残存していた。埋土はレンズ状の堆積を基調とし、シルトおよび砂を中心に土層が複雑に形成される。出土遺物は土師器・珠洲・明染付・越中瀬戸・唐津・内野山・伊万里・瀬戸美濃・近代磁器・金属製品（灰カキ）がみられる。また近世の遺物は細片が大半であり、ローリングを受けているものが多い。近代の遺物は明治期のものが顕著であるが、下限は昭和初期から戦中におよぶ。出土状況から農業用の用水と考えられる。

SD61 (図面47)

SD61は南北にのびる溝である。調査地南側ではSD60の西側10mに位置し、北側ではSD60と重複する。SD60よりも埋没時期は古く、底のレベルは標高32.52～33.22mとSD60に比べ約0.8mの差があり、SD61の方が低い。溝の規模は幅7.5m、深さ0.8mにおよび、断面形態は逆合形となる。埋土は黄褐色砂質シルト層を基調とし、砂およびシルトを主に堆積する。出土遺物は土師器、須恵器、中世土師皿・珠洲・八尾・越中瀬戸・唐津・内野山・伊万里・近代磁器・銅銭があるが遺構規模の割には出土量が少ない。開削時期は近世と考えられるが、溝の左岸部の一部で、中世包含層（黒褐色砂質シルト）と同一の埋土を有する部分があり、中世に遡る可能性がある。

SD62 (図面47)

SD60の東側に位置し、南北にのびる比較規模の大きな溝である。SD63と重複しSD63に切られる。南端は攪乱によって消失し、北端はSD60と接合する。規模は幅2.30m、深さ0.45mを測る。断面形態は逆合形で、埋土は中世包含層と同じ褐色砂質シルトを基調とする。出土遺物は須恵器、珠洲、越中瀬戸、唐津、伊万里があり、中世の溝と考えられる。

SD63 (図面48)

SD60は南北方向を基調としてのびる溝である。この溝は途中で一端東側に屈曲し、更に北側に大きく曲がり北へとびる。この屈曲部は幅も広くなり、一段深く掘削され、一見池状を呈する。この屈曲部からは、多量の礫が出土しており、これら多量に混入した礫は、溝廃絶後の整地に伴う地盤強化のためと考えられる。また屈曲部には更に東側調査区外へとびる溝との合流部が確認されている。この合流部には溝と直行する方向に石列が認められ、水流を調節する導入口と考えられる。遺構埋土は第1層：灰色シルト質砂、第2層：明褐色砂質シルト、第3層：オリブ黄色シルト質砂、第4層：オリブ色砂質シルト、第5層：暗褐色砂質シルト、第6層：灰色粗砂に分層できる。出土遺物は土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃・越中瀬戸・唐津・内野山・在地系・伊万里がある。なおSD63の下層から17・18世紀代の陶磁器類が出土していることから、溝の開削時期は近世と考えられる。

SD64 (図面46)

平面形態は直線を基調とし、南北方向にのび、途中北側で西へ折れ、SX02と接合し切られる。南側の延長にはSD82があり、同一の溝の可能性が高い。途中、SD77と重複し、それを切る。長さ20.9m、最大幅2.40m、最大深0.39mを測る。断面形態はレンズ状で、第1層：灰オリブ色シルト質粘土、第2層：灰色粗砂、第3層：灰色粘質シルト、第4層：明黄褐色粘質シルトに分層できる。出土遺物には伊万里、瀬戸、近代磁器が認められる。

SD65 (図面46)

平面形態は不整形で、U字形を基調とする。不整形な溝群が集中する調査区西側に位置し、両端は調査区外へとびる。長さ10.5m、最大幅2.40m、最大深0.17mを測る。SD82・92と重複し切られる。断面形態は逆台形で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトで、底面にマンガングラ状に沈着する。出土遺物には土師器がみられる。

SD66 (図面46)

平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。東端、西端とも消失する。長さ48.0m、最大幅2.40m、最大深0.25mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は褐色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

SD67 (図面46)

平面形態は直線的で、南東から北西にのびる溝。南端は消失し、北端はSD63に接合する。長さ10.0m、最大幅1.20m、最大深0.19mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はにぶい黄褐色砂質シルトに酸化鉄粒が混入する単層である。出土遺物には須恵器、土師器、越中瀬戸がみられる。

SD68 (図面46)

平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。北端は調査区外へとびる。規模は長さ5.40m、最大幅0.65m、最大深0.19mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：オリブ黒色シルト質砂、第2層：灰色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SD69 (図面46)

平面形態は不整形で、南西から北東にのびる溝。東端は調査区外へとび、西端は消失する。長さ5.95m、最大幅0.80m、最大深0.14mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は第1層：オリブ黒色シルト質砂、第2層：橙色砂礫となる。出土遺物は土師器の皿、青磁、珠洲、金属製品の釘がみられる。

SD70 (図面46)

平面形態は直線で、南北にのびる小溝。両端とも消失する。長さ3.40m、最大幅0.50m、最大深0.18mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は灰黄色粘質シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD71 (図面46)

平面形態は直線的で、南北にのびる溝。両端とも消失する。長さ4.15m、最大幅0.80m、最大深0.18mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は灰黄色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD72・73 (図面46)

SD72・73は南東から北東へのびる直線的な溝で、南東端はSD60に接合し切られ、北東端はSX01と接合し切られる。両者は重複し、SD73の方が新しい。SD73は長さ4.50m、最大幅0.50m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形で、埋土は第1層：浅黄色粘質シルト、第2層：オリブ黄色砂質シルトである。SD72は長さ7.20m、最大幅1.00m、最大深0.18mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：褐灰色粗砂、第2層：にぶい褐色シルト質砂、第3層：灰オリブ色粗砂である。両者とも出土遺物は認められない。

SD74 (図面46)

平面形態は直線的で、南北にのびる溝。北端は調査区外へとび、南端は消失。長さ1.20m、最大幅

0.30m、最大深0.16mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は灰色砂質シルトのみの単層。出土遺物は認められない。

SD75 (図面46)

平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。南端は消失し、北端はSX03と接合し切られる。長さ19.7m、最大幅1.10m、最大深0.29mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：浅黄色シルト質粘土、第2層：灰オリーブ色シルト質粘土、第3層：黄褐色砂質シルトとなる。出土遺物は認められない。

SD76 (図面46)

平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南北端とも消失、長さ1.80m、最大幅0.40m、最大深0.10mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土は灰色砂質シルトのみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD77 (図面46)

平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。北東端は消失、南西端はSD82に切れ、途切れる。長さ17.0m、最大幅1.30m、最大深0.29mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：明褐色砂、第2層：褐色粗砂、第3層：にぶい褐色粗砂を基調とする。出土遺物は須恵器と中世土師器の皿がみられる。

SD78 (図面46)

平面形態は直線的で、南西から北東にのびる溝。北端は調査区外へのび、南端は消失。長さ15.6m、最大幅0.60m、最大深0.26mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は、第1層：灰黄色シルト質砂、第2層：黄灰色砂となる。出土遺物は認められない。

SD79 (図面46)

平面形態は三日月形に円弧を描く。両端共に消失する。長さ4.40m、最大幅0.45m、最大深0.10mを測る。断面形態は逆台形で、埋土は第1層：橙色シルト質砂、第2層：にぶい橙色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

SD80・84 (図面46)

SD61の右岸に沿って配された長楕円形に巡る溝群である。一単位が長径12～13m、短径8m前後の規模で、2～3m間隔で長軸にそって並ぶ。何らかの区画を意識した溝と考えられる。これらの楕円形区画の内側および周辺で、幅0.1～0.2mの小穴が多数検出されているが、両者の関連は不明である。類似は確認されていないが、恐らくある種の耕作関連遺構と考えておくのが妥当であろう。SD80は最大幅0.30m、断面形態がレンズ状で、埋土は橙色シルト質砂のみの単層である。SD84は最大幅0.50m、断面形態がレンズ状で、埋土は第1層：橙色シルト質砂、第2層：にぶい橙色シルト質砂である。出土遺物は認められない。

SD81 (図面46)

平面形態は直線的で、南北にのびる溝。SD84と重複し、SD84よりも新しい。東・西端とも消失する。長さ1.00m、最大幅0.15m、最大深0.06mを測る。断面形態はレンズ状で、埋土はオリーブ黒色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD82 (図面46)

平面形態はL字状で、南北に長くのびる溝である。南端は調査区外へのび、北端は消失。更に北側にSD64があり、同一の溝の可能性が高い。多くの遺構と重複し、SX02以外の遺構を切る。SX02

以外では埋没時期が最も新しい。長さ14.0m、最大幅2.00m、最大深0.28mを測る。断面形態はU字形で、埋土は第1層：褐灰色粘土、第2層：褐色砂となる。出土遺物は土師器、中世土師器、越中瀬戸、唐津、伊万里がみられる。

SD83 (図面46)

平面形態は直線的で、東西にのびる溝。西端はSD61と接合し切られる。東端は消失する。途中SD80と重複し、SD80よりも古い。長さ13.9m、最大幅0.90m、最大深0.18mを測る。断面形態は逆台形形で、埋土は第1層：オリブ黒色シルト質砂、第2層：灰オリブ色シルト質砂となる。出土遺物には中世土師器がみられる。

SD85 (図面46)

平面形態は直線的で、南北にのびる溝。南端は消失、北端は開放。SD80・84と重複し、両者よりも古い。長さ16.9m、最大幅1.80m、最大深0.14mを測る。断面形態は逆台形形で、埋土は灰オリブ色シルト質砂のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SD86 (図面46)

平面形態は直線的で、南西から北東へのびる溝である。西端は調査区外へのび、東端は消失する。長さ8.30m、最大幅1.25m、最大深0.24mを測り、断面形態は逆台形を呈す。埋土は第1層：明赤褐色粗砂、第2層：灰オリブ色シルト質砂、第3層：灰色粗砂、第4層：オリブ黒色シルト質砂となる。出土遺物は認められない。

3 遺物

出土遺物の主体をなすのは、古代集落に伴う出土遺物である。古代の遺物は8世紀から10世紀代のものが出土しており、特に集落関連の遺構からの出土遺物は8世紀代のものが主体である。中世以降では農業用水と考えられる溝から出土した近世・近代の遺物が顕著であり、中世の遺物は少量であった。内訳は珠洲・瀬戸美濃・青磁・越中瀬戸・越中丸山・内野山・唐津・伊万里などの施釉陶磁器である。調査地地山が砂および砂礫層であったため木製品は出土しておらず、陶磁器以外の遺物では金属製品が数点出土したにすぎない。報告にあたっては記述の便を図るため、古代と中・近世に章をわけける。近代の遺物は一定量出土したが、遺跡の性格上主題が薄れることを避けるため、ごく一部を図示するに留めた。高台内に生産地と番号が記載されているものについては写真および表で一括してまとめた。個々の遺物については、出土遺構単位で実測図を掲載・記述した。

(1) 土器・陶磁器 (図面49～54)

《古代》

出土遺物は須恵器、土師器が大半を占める。これ以外には土鍾がある。須恵器では杯類が最も多くみられる。杯・皿については、無高台のものを杯A・皿A、有高台のものを杯B・皿Bとする。土師器については、内田亜紀子(1997)の分類に従い、平底無高台のものは杯、有高台のものを碗とする。赤彩土器や黒色土器は記述の中で言及し、実測図ではスクリーン・トーンなどで特に表示していない。

《竪穴住居》

SI01 (図面49-001・002)

001・002は須恵器である。001は杯Aで、口径12.2cm、器高3.1cmある。底部が平坦で体部との境が角張る。底部は回転ヘラ切り痕が残る。002は杯蓋で、口径14.2cm、器高3.4cmである。口縁端部が下

方へのび、頂部外面にロクロ削りを施す。つまみは扁平な疑宝珠形を呈す。

SI02 (図面49-003~011)

003~006、010・011は須恵器、007~009は土師器である。003は杯Aで、口径12.1cm、器高3.5cmである。底部が平坦で、体部との境が角張る。底部に回転ヘラ切り痕が残る。004は杯Bの体部破片である。口径18.8cm、器高(4.5cm)を測る。005は杯蓋で、口径14.2cm、器高3.5cmである。宝珠状つまみをもち、器形は山笠状でスムーズに端部に至る。端部は三角形を呈しやや鋭さに欠ける。006は短径壺の蓋で、口径15.1cm、器高4.6cmである。宝珠状つまみをもち、上端は磨滅する。頂部回転ヘラ切りの後ヨコナデし、屈曲部のみ回転ヘラ削りする。007・008は甕である。007は口径14cm、器高13.2cmで、外面下半を手持ちのヘラ削りで仕上げる。008は口縁部の小片で、口径21cmと考えられる。口縁端部は上に軽くつまみ上げる。009は長胴甕で、口径21.6cmを測る。内外面にカキメを施し、口縁端部を上に軽くつまみ上げる。010は鉢で、口径33.7cmを測る。口縁端部は頂部に面をもつ。011は横瓶である。体部内面に同心円状の当て具痕、体部外面にタカキメとカキメがある。

SI03 (図面49-012~018)

012~014は須恵器、015~018は土師器である。012は杯Aで、底部に回転ヘラ切り痕が残る。013は杯Bである。高台は内傾し、底体部の境のやや内側に付き、境は角張る。高台内には回転ヘラ切り痕が残る。014は杯蓋である。口径14.4cm、器高4.0cmである。器形は山笠状でスムーズに端部に至る。端部は短く尖り気味に収める。015は蓋で器高の低いもので口縁部はスムーズに屈曲し、端部の作りが鋭さに欠けるものである。016~018は小型甕である。016は口径13cmで、口縁端部を丸く収める。018は平底の底部をもち、底部外面を手持ちヘラ削りを施す。17は口径14.8cm、器高12.4cmで体部上半が張る短筒形で、口縁端部を丸く収める。平底の底部をもち底部外面は手持ちヘラ削りされる。

SI05 (図面49-019~024)

019~023は須恵器、024は土師器である。019~021は杯である。020は杯Aで、口径13cm、器高4.3cmである。底部は湾曲し体部との境に丸みをもつ。体部の外傾度は弱い。022・023は杯Bである。022の高台は内傾し、底体部の境に付き、境は丸みをもつ。023は口径14cm、器高3.4cmである。平坦な底部から体部が直線的に外傾し、口縁端部がわずかに外反する。底端部のやや内側にハ字状に外方へ踏ん張る高台を有する。底部は回転ヘラ切り無調整である。8世紀後半頃のもので、他の資料に比べ後出的である。024は長胴甕である。口径20cmで、内外面にカキメを施し、口縁端部を上に軽くつまみ上げる。

SI06 (図面49-025~027)

025~027は須恵器である。026は杯Bで、口径14cm、器高3.4cmである。高台底端は平行で、底体部の境部分に付く。底部は回転ヘラ切り無調整である。027は大型の杯である。形態から杯Bと考えられる。

SI07 (図面50-031~035)

031~033は須恵器、034・035は土師器である。031は口径14cmの杯Aと考えられる。体部は直線的に外傾し、端部がやや外反する。032は杯蓋で宝珠状つまみをもつ。口径15.6cm、器高2.4cmで、器形は平坦な頂部から口縁部が強屈曲し、内端面に稜をもつ。端部は下方へのび、やや内傾する。頂部ヘラ切り後ナデ調整。033は大型の杯Bである。口径16.4cm、器高6.2cmで、高台は底体部の境よりもやや内側に付き、境は丸みをもつ。底部は回転ヘラ切りで、内外面ヨコナデを施す。034は把手付きの小型甕で、口径9cm、器高7.4cmである。体部外面にハケメを施した後、把手を付け更に把手に

沿ってハケメを施す。外底面にもハケメがあり、内面のハケメは把手部分のみに認められる。口縁と底部内面にはヨコナデを施す。035は甕の口縁部の小片である。口縁端部を丸く仕上げる。

SI08 (図面49-028~030)

028・029は須恵器、030は土師器である。028・029は杯Aと考えられ、体部は直線的で外傾度は弱く、口縁端部を丸く収める。030は小型甕の口縁部の小片である。口縁端部が肥厚し拡張する。

SI09 (図面50-036~040)

036~040は須恵器である。036~038は杯で、口径14.4~18cmである。体部は直線的に外傾するもので、038の外傾度がやや緩い。039は杯蓋の口縁部小片である。口縁部が屈曲し、内端面に稜をもつ。端部は三角形を呈しやや鋭さに欠ける。040は無高台壺の底体部の小片である。平底の底部にやや内湾する体部をもつ。底部内外面ヨコナデ、体部内面に当て具、外面にタタキメが残る。

SI10 (図面50-041・042)

041は須恵器の杯Aである。口径12cmで、体部が外反気味に開く。042は須恵器の杯蓋である。宝珠状つまみをもち、頂部は平坦である。口縁端部が欠損しているため詳細は不明だが、頂部回転へら削り、口縁部は回転ナデで仕上げる。

SI11 (図面50-043・044)

043は須恵器の杯Aで、口径14cm、器高3.2cmである。平坦な底部から体部は直線的に外傾する。底部に回転へら切り痕を残す。044は土師器の長胴甕で、口径27cmである。体部内外面にカキメが施され、口縁端部を上方に軽くつまみ上げる。

〈土坑〉

SK09 (図面50-045)

045は須恵器の杯Bである。高台は底体部の境に付き、底部回転へら切り後無調整で、内外面ヨコナデ。

〈溝〉

SD19 (図面50-072)

072は土師器の把手付き鍋の把手部分である。

SD20 (図面050-071)

071は土師器の椀Aである。体部は直線的にのび、端部を丸く仕上げる。

SD58 (図面50-046~068)

046~059・064は須恵器、060~063、065~068は土師器である。046・047は杯Aである。046は口径12.7cm、器高3.4cmである。底部回転へら切り無調整で、内外面ヨコナデし、底部がやや尖る。047は口径11.6cm、器高3.1cmである。底部回転へら切りで一部ヨコナデ、内外面をヨコナデし、平坦な底部をもつ。048~056は杯Bである。048~050の高台は底体部の境よりもやや内側に付く、体部の外傾度はほぼ同じと考えられる。051~056の高台は底体部の境目に付く。056以外の体部外傾度はほぼ同じで開が弱い。056は他のものよりも若干外側へ開く。057~059は杯蓋の小片である。057・058は口縁部が屈曲し、端部が下方へ折れまがる。器形は057は山笠形、058は扁平である。059の器形は平坦な頂部から口縁部が強く屈曲し、内端面に稜をもつ。端部は半円状に肥厚し丸く仕上げる。060~063は椀Aである。底部が残存するものには回転糸切り痕が残る。062は口縁部が外反し、063は内湾する。いずれも9世紀第4四半期のものと考えられる。064は須恵器の双耳瓶の体部小片である。065・066は甕である。口径20.6cmで、口縁端部が肥厚し上下に拡張する。066は口径25.4cmに復元した甕の

口縁の小片である。口縁端部を面取りし、方形に仕上げる。067は鍋で、口径は23.8cmである。体部上半が張る器形で、体部外面カキメ、内面ヨコナデで一部カキメ残る。口縁端部が肥厚し上下に拡張する。

SD59 (図面51・52-073~099・155)

073~094は須恵器、095~099・155は土師器である。073~075は須恵器の杯Aである。口径は12.3~13.8cm、器高3.05~3.6cmである。073の体部外傾度は弱く、074・075はやや外側に開くものである。076・077は杯Bで、高台は底体部の境よりもやや内側に付き、境目は丸みをもつ。078~082は杯蓋である。078・079はスムーズにのびる体部をもち、口縁端部が折れ曲がって下方へのびるもの。080~082は口縁部が屈曲し内端部に稜をもつものである。080・082は端部を半円状に丸く仕上げるものである。083は横瓶である。内面に同心円状の当て具痕があり、外面にタタキメとカキメがある。084~086は壺の口縁破片である。087~089は壺の口縁破片である。端部を上方に軽くつまみ上げている。090・091は壺の蓋である。両者とも口縁端部の内側を下方へ鋭く突出させたものである。092は短頸壺で、口径12.1cm、器高15.15cmである。底部から体部下半は回転ヘラ削り、体部上半・内面はヨコナデする。肩部には数条の沈線を巡らす。093・094は鍋である。体部上半に張りのある器形で、内面に同心円上の当て具痕、外面にタタキメが残る。屈曲するものである。095は有高台の椀である。096は黒色土器椀で、内面を黒色処理したものである。底部は平底で、ヘラ切り後粗いナデを施す。097は椀Bで、底に「□長」と墨書されている。098は把手付き鍋の把手部で、外面をハケメで調整している。099は鍋で、口径34cmである。体部上半に張りがあり、口縁端部が肥厚し、上下に拡張する。体部内外面にカキメ、外面下半にケズリが施される。155は把手付きの鍋である。体部下半の内面に同心円状の当て具痕、外面にタタキメが付く。体部上半は内面に斜め方向のハケメで調整した後、間隔を空けてロクロナデを施す。外面上半はカキメである。

包含層 (図面50・52・53-069・070・100~140・142~154・156~161)

069・070・100~138は須恵器、139~161は土師器である。069は須恵器の杯蓋で宝珠状つまみをもち、口径12.9cm、器高1.65cmである。器形は扁平で、平坦な頂部から口縁へスムーズにのび、端部は鋭さのない三角形が下方へのびる。頂部はヘラ切り無調整で、口縁ヨコナデ。070は須恵器の瓶の底部である。平底の底部を有し、外底面ヨコナデ、内底面ヘラ削りを施す。100~107は杯Aである。100はやや尖り気味の底部をもち底部ヘラ削りのもの、101~107は平坦な底部のもので、底部を確認できるものはヘラ切り後無調整である。また100~103は外傾度が緩く、104~107は外傾度がやや強い。108~120は杯Bである。108~116は高台が外へ踏ん張るもので、端部が内傾する。117~120は高台が下方へのび端部が水平のものである。121~131は杯蓋である。121・122は山笠形の器形で、体部から口縁へスムーズにのび、端部が下方へ鋭くのびるもの、123~126は器高の低いもので、口縁部はスムーズに屈曲し、端部の作りが鋭さに欠けるもの、126~129は口縁部が屈曲し内端面に稜をもつもの。130・131は口縁部が屈曲し、口縁端部を半円状に丸く仕上げるものである。132は無高台の平坦な底部をもつ壺である。底部は静止糸切りで、内面の一部に当て具、外面にタタキメの一部が残る。133は横瓶である。体部内面に当て具痕、外面にタタキメが残る。134は壺蓋の口縁部小片である。口径14.8cmで、口縁部をロクロナデし、端部は内側を薄く挽き出す。136は有高台壺の底部である。139~143は椀Aである。いずれも底部回転糸切り無調整のもので、143は黒書土器で、体部下半に「城長」と墨書されている。142は他のものよりも底径が広く、新しい要素をもつ。144~153は長胴壺の口縁部小片である。144~146は口縁端部を丸く仕上げるもの。147・148は端部に面を取り断面が方形になるも

の、149・150は端部を上方に軽くつまみ上げるもの、151・152は端部が肥厚し上下に拡張するもの、153は端部が内側に折り返され、内側に段の付くものである。144・145・147・148は内面上半ハケメ、145以外は外面上半ハケメ、145はカキメで調整される。149～152は内外面上半カキメで、153は内外面上半クロナデである。154は小型甕で口縁端部は外傾し、端部を丸く仕上げる。156・157は鍋で、口径38cmである。156は口縁端部を軽く上方へつまみ上げるもの、157は端部が肥厚し上下に拡張するものである。158は鉢で、口径26cmである。159は手づくねの土師器で、内外面に指頭瓦痕が多くみられ、体部中程に粘土の継目がみられる。160・161は土鍾である。両者とも樽形c類のもので、口径は160が10mm、161が11mmである。

《中・近世・近代》

出土遺物の主体となるものは近世・近代のものである。内訳は越中瀬戸・伊万里・内野山・唐津・近代磁器などの施釉陶磁器、極少量の銅銭などの金属製品などである。中世の遺物は極少量出土しており、中世土師器・中国陶磁器・瀬戸美濃施釉陶器・珠洲などがある。特に近代のものは、包含層およびSD60から多量に出土したが、報告書の趣旨にそぐわないため近代のものはごく一部を図示するに留めた。

SD61 (図面53-162~166)

162は越中瀬戸の灰釉小皿で、底部に三角形の輪高台をもつ。163は唐津の陶胎染付の碗で、鉄釉で絵付けした後に透明釉を掛けただけのものである。164は越中瀬戸の天目茶碗である。内面および外面過半を鉄釉で施釉されており、高台部分は露胎となる。165は内野山の底部小片で、内面に蛇の目軸剥ぎのみみられる銅緑釉の皿である。166は伊万里の白磁染付けの胴丸形髪油壺で、内面無釉、底体部の外面には透明釉を施釉する。

SD62 (図面53-167・168)

167は珠洲の甕の口縁部で、口縁は斜め下方にのびる。168は伊万里の小皿である。

SD64 (図面53-141・169~171)

141は墨書土器である。判読は不明。169は伊万里の色絵染付けの胴丸形髪油壺で、内面無釉で、底体部に透明釉が掛かる。170・171は伊万里の小皿である。170は内面に崩し唐草が描かれる。

SD63 (図面54-172~188)

172～178は越中瀬戸で、172・175・176は鉄釉小皿、173・174は灰釉小皿で見込みに軸止めの段が付く。断面三角形の輪高台をもち、176は見込みに菊花を施す。177は鉄釉の火入れ、178は鉄釉向付である。179は伊万里の染付けの皿である。内面が蛇の目軸剥ぎされている。180・184は陶胎染付けの碗である。181は唐津の鉢で、内面が蛇の目軸剥ぎされている。182は珠洲の甕の口縁部である。口縁外端が嘴状に側方短く突き出るものである。183は伊万里の皿、185は唐津三島手の碗である。186は筒型の湯飲み碗で外面に菊花文を散らし、口縁内部に四方禪文が巡る。187は陶器の甕、188は唐津の搦鉢である。

包含層およびSD60 (図面54-189~218)

189は中世土師器の皿の口縁である。190は瀬戸美濃の皿である。191は越中瀬戸の皿で鉄釉を施釉する。192～197は越中瀬戸で、192・197が鉄釉小皿、194・195が灰釉小皿である。192は底部切り離しのみの高台となる。193・194は三角形の輪高台のものである。196は見込みに菊花を施す。197は高台の内側に「十」の記号が墨書される。198は唐津の灰釉皿である。底部には砂目積みの砂粒が付着する。199は珠洲の甕の口縁部である。短く外反した口縁部の先端が方頭となるものである。200～

202は唐津の陶胎染付けの碗である。203・204は伊万里の蛇の目凹形高台のそば猪口で、ともに外面上半に唐草文、外面下半に連弁文が描かれる。205は湯飲み茶碗で、修復のための焼継跡が認められる。206～208は伊万里の染付けの碗である。206は外面に松の絵柄がコンニャク印判されている。209は瀬戸の端反り碗、210は唐津の碗である。211は瀬戸美濃の妬器染付の広東碗である。212は口縁に口錆を施す紅皿である。213～215は湯飲み茶碗で、215は銅板印刷されたものである。216中国陶磁の青花小皿の破片である。217は内野山の底部小片で、内面に蛇の目軸剥ぎのみられる銅緑釉の皿である。218～220は伊万里の小皿である。218は交叉線文の小皿である。見込みには重ね焼きよりの蛇の目軸剥ぎがされている。219外面に唐草文、口縁部内面には雷文が描かれ、220は外面に崩れ唐草文、内面にたこ唐草文が描かれる。221は磁器碗で太平洋戦争中の戦時統制下に生産されたものである。高台内には「岐113」と陽刻されている。222は瓦質土器の土鍋である。

※なお上記以外のその他の遺物として、金属製品の灰カキ・銅銭・棒状鉄製品が挙げられる。灰カキおよび棒状鉄製品はSD60から出土しており、近代のものと考えている。銅銭はSD61で1枚、SD63で2枚出土しており、いずれも寛永通宝である。本報告書では金属製品については写真のみを提示している。

第IV章 総括

以上吉倉B遺跡の調査成果について概述してきた。最後に今回の調査で検出された古代集落遺構とその出土遺物の二点から簡単なまとめを試み、本調査の一応の総括としたい。

(1) 遺構の変遷

今回の調査では古代から近代にかけての各時代の遺構・遺物が検出されたが、中心となるのはやはり古代であろう。古代の遺構は大きく分けて二つの性格をもつ。ひとつは奈良時代前半にあたる時期の建物群であり、もう一方は建物群廃絶後の畑地である。吉倉B遺跡は扇状地に位置し、この周辺一帯は利水に不便な地域であったためか7世紀以前は非常に遺跡の希薄な地域である。しかし8世紀以降になると急激に遺跡数が増加する地域である。拙稿では、吉倉B遺跡の立地する古代の富山平野には遺跡群がA～Fの6群あり、更に14小群に分けることが可能で(図1)、吉倉B遺跡はそれらの内のE1群に属す。E1群は常願寺川と神通川によって形成された広大な扇状地に立地する遺跡群である。古墳時代中期の福居古墳や後期の伊豆宮古墳が背後の台地上に認められ、集落の出現が古墳時代に遡る可能性のある地域だが、現時点では任海宮田遺跡の7世紀後半の堅穴住居が弥生時代以降の住居では初現である。本格的に堅穴住居や掘立柱建物が増加するのは8世紀以降とされる。吉倉B遺跡の周辺では任海宮田遺跡や南中田D遺跡などの集落が奈良・平安時代に形成され10世紀前半まで存続するものが多く、この地域周辺が古代に活発に開発されたことが窺える。この様な動きのなかで当遺跡の建物群の出現も把握することができる。なお本書ではこの周辺一帯の遺跡群を示す場合は任海遺跡群と仮称し、以下記述する。調査地の南200mには富山県埋蔵文化財センターによって調査された同遺跡の調査地があり、古代の集落が確認されている。8世紀後半には形成されていた集落で、10世紀前半まで存続する。

今回の調査地で検出された古代の建物は、堅穴住居10棟、堅穴遺構2棟、土坑、穴、溝多数などがある。これらの遺構群の広がりを見ると、SD59の東側は建物や畑などが中心で、西側は溝を中心とする遺構が検出されておりSD59の東西で様相が異なる。このことから集落域の西端はSD59であり、SD59の東側に住居群が広がっていた様相が窺える。確認された建物群は8世紀前半に帰属し、2時期の変遷が想定できる。調査地南半が広く攪乱を受けていたためかもしれないが、調査地東側の一部で集中して建物群が確認されており、建物群は相互に密集した配置をもつ。但し建物集中区の東側は調査区外の未調査地であるが、本調査に先行する周辺部の試掘調査では奈良時代末～平安時代前期の堅穴建物が1棟検出されており、更に建物群が東へ延びるものと考えられる。また建物群の上位には概ね東西方向に並列する溝群を確認しており、建物群廃絶後には畑地に利用されたものと考えている。建物群の上面以外では、SD59の東岸際でも同様の溝群を確認している。出土遺物の傾向から両溝群の帰属時期は9世紀代である。中近世以降は溝や穴、土坑を多数確認したものの、明確な建物配置をとる遺構がなく、主に農業用の水利関係の遺構を検出した。このため遺構は溝が中心となる。つまり奈良時代の集落以降、これら溝を中心とする水利関係の遺構が近代まで続き、農耕用の生産基盤として土地利用されたものと考えられる。

(集落の変遷)

本集落の変遷は、8世紀初頭～前半を中心とした短時期のものであり、A～Cの3群に大別できる。

検出された竪穴住居と竪穴遺構は合計12棟で、各群の建物は竪穴住居のみで構成され、掘立柱建物は確認していない。各竪穴住居には明確な時期差はみられないが、重複関係から2時期の変遷が窺える。建物群の内訳は、A群がSI:01・02・03・04の4棟からなり、建物集中区の東側に位置する。B群はSI:05・06・07の3棟からなり、集中区の南に位置する。C群はSI:08・09・10・11・12からなり、集中区では最もSD176よりの西側に位置する。先行する時期のものとしてはA群:SI:04・02の2棟、B群:SI:07の1棟、C群:SI:10・11の2棟で、合計5棟が挙げられる。後続するものとしてはA群:SI:01・03、B群:SI:05・06の2棟、C群:SI:08・09の2棟で、合計6棟がある。SI12に関しては、単独に近い配置であり他の建物との重複もなく、出土遺物もないことから時期不明である。但し、集落の構成から見て集中区の他の建物とほぼ同時期の8世紀初頭から前半のものであろう。このうちA群のSI01がSI02の、SI03がSI04の建て替え、B群のSI06がSI07の建て替え、C群のSI08がSI11の、SI09がSI10の建て替えと考えられる。概ね一辺3～4m前後を測る小型の掘方を呈するもので、カマドはA群のSI03、B群のSI:05・06・07、C群のSI:09・10で計6棟が確認されており、他の竪穴住居でも他の遺構および調査区境界部との重複のために未確認の可能性がある。貼り床はSI04のみで確認された。竪穴住居集中区の上面では耕作関連と考えられる溝群を検出した。出土遺物から9世紀代の溝と考えられ、集落廃絶後は畑として利用されたようである。なお畑遺構の時期には当調査区からは集落が確認されていないが、富山市によって試掘調査された竪穴住居が本調査地東側の隣接田面に位置することや、調査区から南へ約200mの地点に泉埋分センターの調査地があり、概期の集落が確認されていることから、東へ移動したかあるいは南側の集団に吸収され、当調査地自体は生産基盤として利用されるようになる。

〔「城長」墨書土器について〕

吉倉B遺跡からは「城長」(33)・「□長」(47)の2点の墨書土器が出土した。33は土師器の椀Aで、体部下半に横位で墨書される。47は土師器の椀Bで、高台内部の外底面中央に墨書される。任海遺跡群では「小林」「縄足」「平」「成」など多数の墨書土器が各地点に同一の文字で集中して出土する傾向が指摘されている。「城長」墨書土器はそれらの文字と異なり、それらの文字群間で広く出土する傾向があると考えられてきた。今回吉倉B遺跡で出土した「城長」を契機に、任海遺跡群でどの様に「城長」墨書土器が出土しているのかをまとめた。表は任海遺跡群で調査された9遺跡のうち官見にのぼる調査の墨書土器総数と城長墨書の数を数えたものであり、図は城長墨書土器の出土地点を調査区毎にまとめたものである。また「城長」墨書については「城」「長」などの一文字しか判読できなかったものについても含めている。それに従えば、城長墨書土器は吉倉B遺跡および任海宮田遺跡からの出土に限られることが分かる。大きくはA～Cの3群からの出土で、A群5点、C群1点で、大半の城長墨書土器がB群からの出土である。ただしB群でも富山市教育委員会が行なった試掘調査の56トレンチから計53点の「城長」墨書が1地点で集中して出土しており、全体出土量73点の7割を占めるためそのような傾向を示す可能性もある。

墨書された土器は1～12が須恵器(杯A・杯B・杯B蓋)、13～52は土師器(椀A・B・ⅢB)53～62は黒色土器(椀A)である。9世紀～10世紀前半のもので、特に9世紀後半のものが大半であった。

「城長」の字体は一律ではなく、字体を分類することが可能である。分類については堀沢祐一氏が分類したもの(1998)を基本に報告したい。「城」の字には4パターンが窺える。1類は「成」の字体を崩さないもの。2類は「成」の字体を崩し、5画目から6画目にかけて続けて書くもの。3類は

2類の続けて書く部分を、3本の線で表現しているもの。4類は6画目を省略するものである。「長」については上半分を行書風に書くものと草書風に書くものがある。「城」の字を観察できた51個体中、1類は4点(7・13など)、2類は39点(1・28など)、3類は4点(10・34など)、4類は4点(36・37など)出土しており、2類が全体の76%を占める。「長」については、53点中、行書風のが30点、草書風のが23点で余り偏った傾向は窺えない。更に堀沢氏は長の下半部分の違いから9類に細分されている。

これらの字体が書き手の個人差、あるいは時間的な変遷過程での変化や丁寧さの違いなのか判然としませんが、個人差の場合は9分類以上の書き手の存在が窺える。また「城」の字体では変遷過程や丁寧さで考えた場合1類から4類への流れが想定でき、1類よりも4類の方が新相、あるいは簡略化を示す傾向にあると考えられる。

出土遺物は殆ど9世紀後半～10世紀前半のものであるが、1の杯蓋や11の杯Aのように9世紀後半よりも古相を示す遺物には「城」の1・2類の字体が認められる。但し1・2類は9世紀後半以降のものにも多数認められ、単純に時期的変遷で字体が変化したとは考えにくい。器種的には須恵器・土師器では1・2類以外に3・4類も含むが、黒色土器では1・2類だけが認められる。字体と出土地点との関係ではB群以外の出土地点のものがA群5点、C群1点と少数なため傾向は窺えなかった。B群は出土量が多いためあらゆる字体のものが認められる。このような出土傾向を示すことから、「城長」墨書の中心は任海宮田遺跡の東側であるB群域であり、他の地点での出土傾向は客体的なものとなる。

また、任海遺跡群では城長墨書と同時期の掘立柱建物を中心とする建物群が吉倉B遺跡と任海宮田遺跡で確認されており、その内の4棟は建物専有面積が50㎡を越える大型の建物である。その周囲では緑・灰釉陶器なども確認されており、任海遺跡群の中心建物と考えている。B群はそれらの建物群域には含まれず、約一辺3mの規模をもつ堅穴住居を中心とした建物群であり、帰属する集団が任海遺跡群の中で優位に立っていた傾向は窺えず、従来考えられていたような「城長」墨書を象徴とする集団が他の文字を象徴とする集団の更に上位に位置づけられていたとは考えにくい。

次に墨書された文字の位置だが、出土した墨書土器には、蓋の頂部内外面と身の底部外面および体部外面に認められ、体部外面のものには横位・逆位のものも認められ正位のものも認められない。墨書土器については、吉祥句や方位を書いて祭祀に利用された可能性や、墨書土器が土器所有者の帰属、あるいは発注者の識別に利用された可能性などが考えられる。吉倉B遺跡や任海宮田遺跡の「城長」の場合、文字が吉祥句に該当しないことや、身の内面に墨書されないこと、56トレンチ以外は一括性に乏しいこと、56トレンチの出土状況から祭祀的な性格が窺えないことから、墨書の意味が帰属を示す可能性が高い。そのように想定するならば、施文字の部位の違いは、収納形態や識別者の視線の位置、あるいは墨書の書き手の書きやすい持ち方に関係すると考えられる。墨書が土器所有者の帰属を示す立場をとるなら、墨書は識別者に認識されなければならない、認識されるように施されたと仮定するなら、前者の関係が想定できる。つまり箱などに収納される場合は上から見下ろす状態になり、棚などに置く場合は横に見る状態になるであろう。この様な視点から観察すると、蓋では2の蓋外面体部横位や3の蓋中央のものは正位で置かれ、5・6の内面に書かれるものは上下逆に置かれた可能性が高く両者とも上から見るのに適す。1の蓋外面中央に正位で墨書された杯蓋については上および正面どちらでも読むことが容易であり判断しがたい。また紐が頂部に付くことから、蓋が重ねて置かれていたとは考えにくく、身とセットで収められていたものと考えたい。身では底部外面のものや体

部横位に墨書されたものは上下逆に置かれた可能性が高く上から読むのに適す。底部外面34点、体部横位18点が確認されており、量的に最も多い。55・56の黒色土器は体部外面に逆位で墨書されており、上下逆に置かれた可能性が高く、正面から読むのに適すことから目線より高い棚などの上に置かれていた可能性が考えられる。これらの墨書土器が、墨書されていない土器の上に重ねて置かれたものか、あるいは墨書だけで収納されたものか判然としないが、墨書されていない遺物の方が出土量で大幅に上回ることから、重ねて置かれたものの最上位に墨書土器が置かれた可能性が考えられる。そして置き方については上から読むのに適するものが大半であることから、箱や穴などに重ねて収納されていたものと考えられる。

(引用参考文献)

- 富山県埋蔵文化財センター 1991『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告』
- 富山県埋蔵文化財センター 1993『富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査報告(3)』
任海遺跡・吉倉A遺跡・吉倉B遺跡
- 富山県埋蔵文化財センター 1994『富山県総合運動公園内遺跡群発掘調査報告(4)吉倉B遺跡』
- 富山県埋蔵文化財センター 1996『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書』
- 富山県埋蔵文化財センター 1997『富山県富山市任海宮田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 富山市教育委員会 1989『富山県総合運動公園内遺跡群試掘調査概要』
- 朝田要 2004『惣領浦之前遺跡出土の漆関連遺物について—コップ形須恵器を中心に—』『富山考古学研究—紀要第7号』富山県文振財団
- 池野正男 2002『古代の遺物』『石名田木舟遺跡発掘調査報告』富山県文振財団
- 井上尚明 1994『コップ形須恵器の考察—奈良時代の計量器について』『考古学雑誌』第79巻第4号
- 内田亜紀子 2000『越中婦負郡の古代土器器煮炊具—婦中町中名Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ遺跡の壑穴住居出土資料を中心に—』『富山考古学研究—紀要第3号』富山県文振財団
- 岡本淳一郎 1991『古代土器について』『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告』富山県埋蔵文化財センター
- 田島明人 1988『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題報告編』北陸古代土器研究会・石川考古学研究会
- 中野由紀子 2001『任海宮田遺跡の墨書土器について—B1地区出土資料の紹介—』『富山考古学研究第4号』
- 中野由紀子 2002『任海宮田遺跡の墨書土器(2)—平成13年度調査出土資料の紹介—』『富山考古学研究第5号』
- 堀沢祐一 1998『城長墨書土器について』『富山市任海宮田遺跡試掘調査概要』富山市教育委員会
- 森 隆 1999『任海遺群の古代建物群構成(2)—吉倉B遺跡・任海宮田遺跡の事例より—』『富山考古学研究—紀要第2号』富山県文振財団
- 森田利枝 2003『任海宮田遺跡出土の墨書土器—平成14年度出土資料の紹介—』『富山考古学研究第6号』
- 吉岡康暢 1983『奈良平安時代の土器編年』『東大寺額横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会



図1 富山平野の遺跡群（古代）

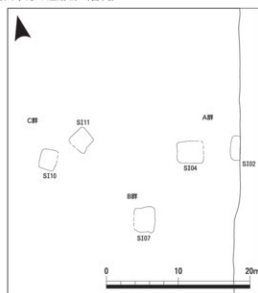


図2 竪穴住居変遷図（I期）

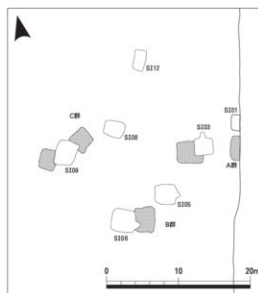


図3 竪穴住居変遷図（II期）

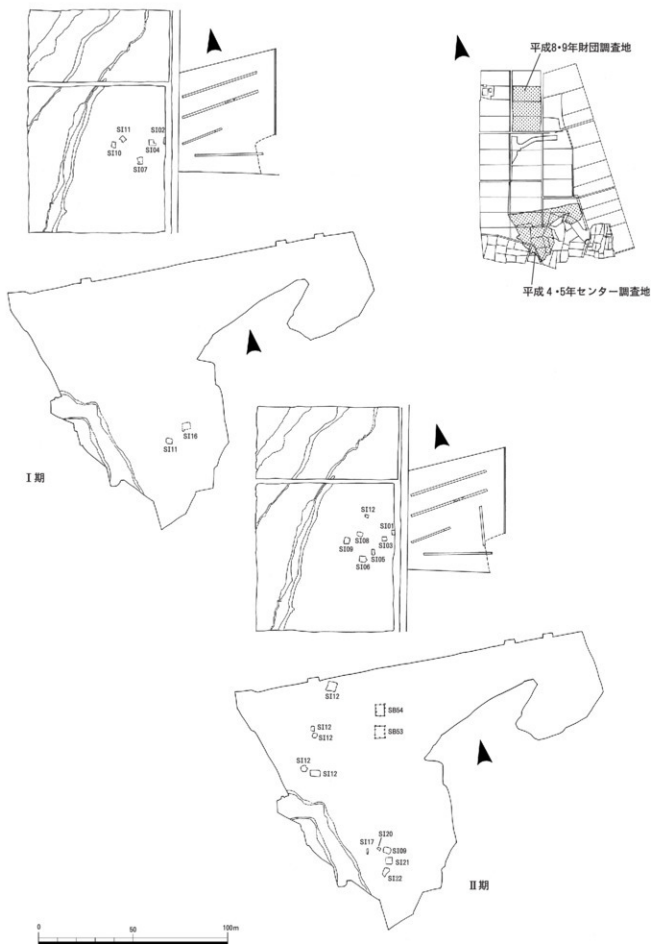


図4 吉倉B遺跡建物変遷図①

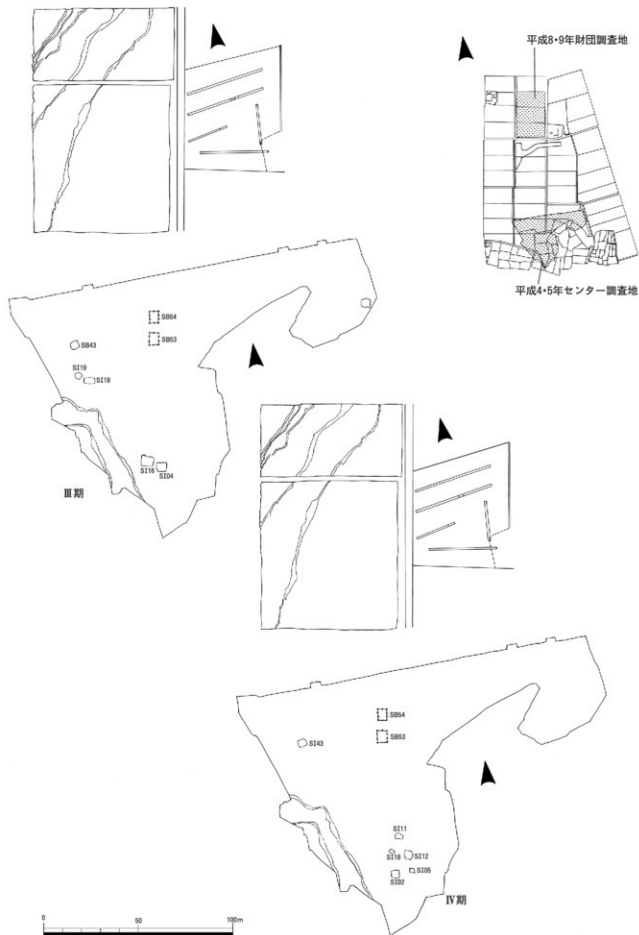


図5 吉倉B遺跡建物変遷図②

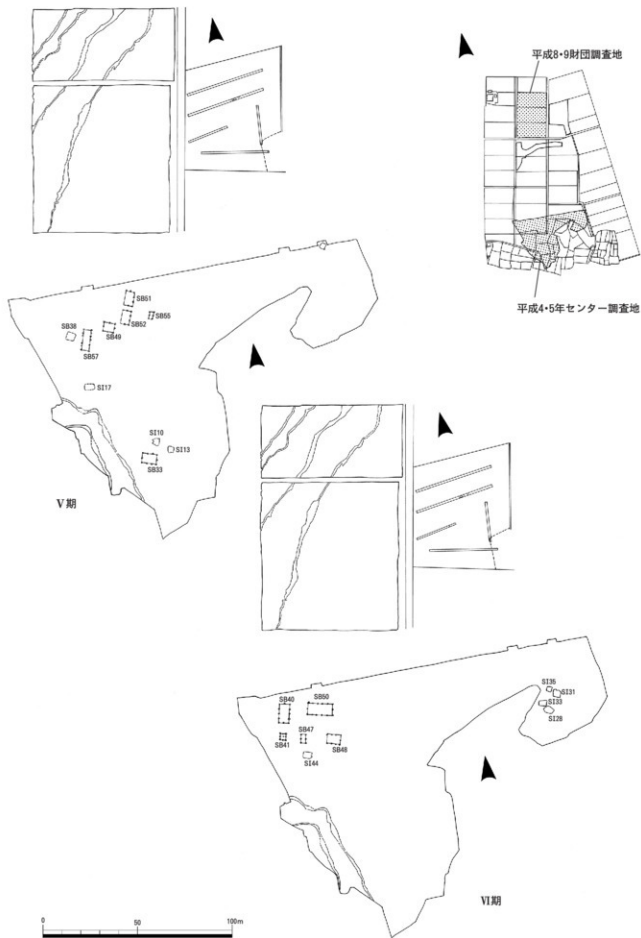


図6 吉倉B遺跡建物変遷図③



表1 遺跡別「城長」墨書土器出土数

No.	遺跡名	調査主体	墨書	城長
1	吉倉A遺跡	センター	0	0
2	吉倉B遺跡	センター	53	3
3	吉倉B遺跡	財団	3	2
4	吉倉B遺跡	富山市	4	0
5	栗山権原遺跡	センター	15	0
6	南中田A遺跡	センター	0	0
7	南中田C遺跡	センター	0	0
8	南中田D遺跡	センター	16	0
9	任海鎌倉遺跡	センター	0	0
10	任海宮田遺跡	センター	98	6
11	任海宮田遺跡	財団	507	10
12	任海宮田遺跡	富山市	195	52
13	友杉遺跡	財団	8	0
14	友杉遺跡	富山市	0	0
	合 計		899	73

図7 「城長」墨書土器出土地点

表2 「城長」墨書土器一覧

遺物番号	種類・器種	部位・位置	文字	文字位置	時期	遺跡	地区	調査主体	出土地点	備考
1	須恵器・蓋	頂部外面	城長		9c前~中頃	任海宮田遺跡	B14	財団	包含層	
2	須恵器・蓋	外面	城長		9c末~10c前	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	
3	須恵器・蓋	頂部外面	城長		9c後半	任海宮田遺跡	O	センター	S I10	
4	須恵器・蓋	外面	長か		9c末~10c前	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	
5	須恵器・杯蓋	内面	□		9c中頃か	吉倉B遺跡		センター	包含層	
6	須恵器・杯	底部外面	城か		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	
7	須恵器・杯	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	へら切り
8	土師器・皿	底部外面	城か			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	赤彩
9	須恵器・杯A	底部外面	城長		9c代	任海宮田遺跡	B14	財団	S K21	
10	須恵器・杯A	底部外面	城長		9c後半	任海宮田遺跡	O	センター	S I10	
11	須恵器・杯A	底部外面	城□		8c後半	任海宮田遺跡	C20	財団	包含層	
12	須恵器・杯	底部外面	(城)長			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	へら切り
13	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
14	土師器・椀	底部外面	城長		—	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
15	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
16	土師器・椀	底部外面	城長			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
17	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
18	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
19	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	C20	財団	包含層	
20	土師器・椀	底部外面	城長		9c後半	吉倉B遺跡		センター	S K72	
21	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	C19	財団	包含層	
22	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
23	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
24	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
25	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
26	土師器・椀	底部外面	城長			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
27	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
28	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
29	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
30	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
31	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
32	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
33	土師器・椀A	底部外面	城長	横位	9c後半	吉倉B遺跡	A	財団	包含層	糸切り
34	土師器・椀A	底部外面	城長		9c後半	任海宮田遺跡	A1	財団	S D196	
35	土師器・椀	底部外面	城長	横位	9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
36	土師器・椀A	底部外面	城長		9c後半	任海宮田遺跡	B14	財団	S K182	赤彩
37	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
38	土師器・椀	底部外面	城長			任海宮田遺跡	L1	センター	包含層	
39	土師器・椀A	底部外面	城長?		9c後半	任海宮田遺跡	B6	財団	S K938a1	
40	土師器・椀	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
41	土師器・椀	底部外面	城□		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
42	土師器・椀	底部外面	長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
43	土師器・椀	底部外面	長	横位		吉倉B遺跡		センター	S I27	
44	土師器・椀	底部外面	□長		—	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
45	土師器・椀	底部外面	長			任海宮田遺跡	C20	財団	S I04	
46	土師器・皿	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り・赤彩
47	土師器・椀B	底部外面	□長		9c末~10c前	吉倉B遺跡	A	財団	S D176	
48	土師器・椀B	底部外面	□長			任海宮田遺跡	C20	財団	包含層	
49	土師器・椀B	底部外面	城長		9c末~10c前	任海宮田遺跡	C	センター	包含層	
50	土師器・椀B	底部外面	城		9c末~10c前	任海宮田遺跡	C	センター	包含層	
51	土師器・皿	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
52	土師器・皿	底部外面	城長		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り・赤彩
53	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	I	センター	包含層	
54	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	—	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
55	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
56	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
57	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
58	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
59	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
60	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
61	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
62	内黒土器・椀	底部外面	城長	横位	9c後半	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
63	須恵器・蓋	内面	長か			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	
64	土師器・椀	底部外面	城	横位	9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
65	須恵器・杯	底部外面	城か			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	へら切り
66	土師器・椀	底部外面	長か			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
67	土師器・椀	底部外面	城か			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
68	土師器・椀	底部外面	城か			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
69	土師器・椀	底部外面	城長		—	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
70	内黒土器・椀	底部外面	城か			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
71	内黒土器・椀	底部外面	□長			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
72	土師器・椀	底部外面	城長			任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	糸切り
73	須恵器・杯	底部外面	城		9c後	任海宮田遺跡	試掘	富山市	56T	へら切り

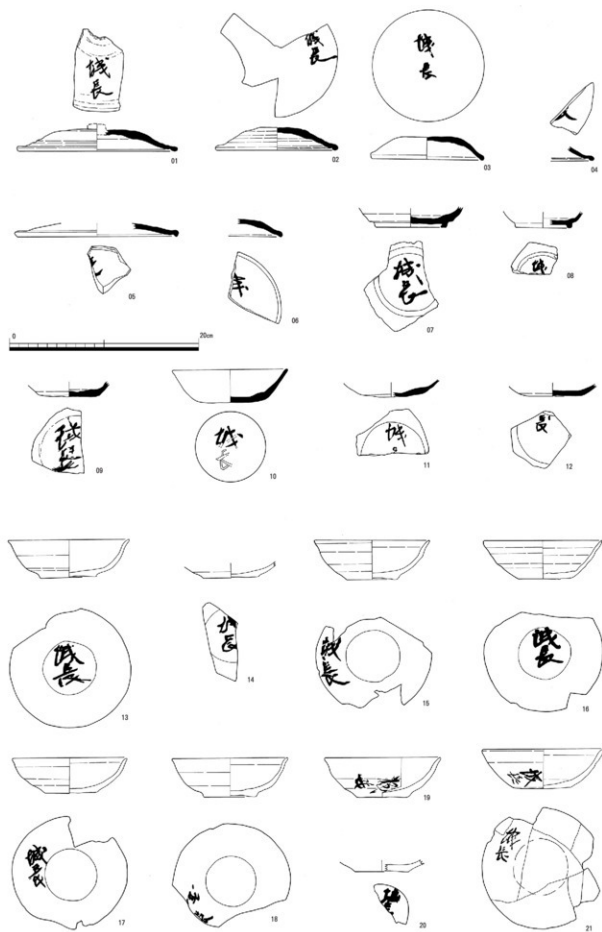


図8 「城長」墨書土器一覽①



図9 「城長」墨書土器一覽(2)

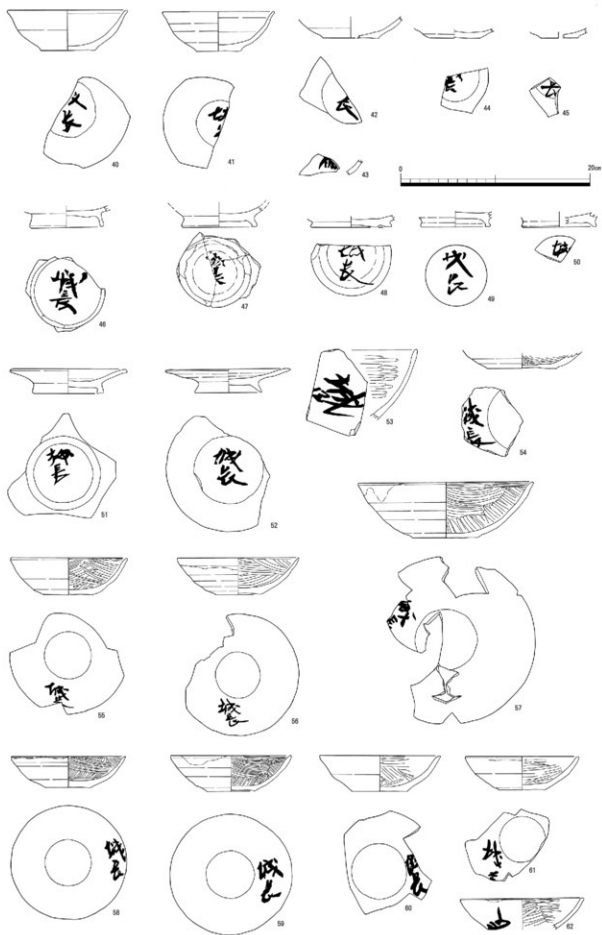


图10 「城長」墨書土器一覽③

堅穴住居一覧

遺構番号	区画番号	写真番号	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	面積(㎡)	平面形	方位	カマド	出土遺物	備考
S 1 01	12	5-2	2.46	(1.28)	0.26	(3.14)	方形	N15° E		土師器、須恵器	重複なし
S 1 02	12	5-3~5	3.50	(1.41)	0.31	(4.94)	方形	N15° E		土師器、須恵器	重複なし
S 1 03	13	6-1,2	2.78	2.36	0.35	6.56	方形	N 9° E	北壁	土師器、須恵器	SI04と重複し、SI04を切る。カマドを確認
S 1 04	13	6-3,4	3.76	3.20	0.26	(12.03)	方形	N 9° E		土師器	SI03と重複。カマド、貼り床を確認
S 1 05	14	6-5, 6	3.20	3.05	0.26	9.76	隅丸方形	N13° E	東壁	土師器、須恵器	SD22と重複し、切られる。カマドを確認
S 1 06	15	7-1, 2	3.50	3.41	0.17	11.93	隅丸方形	N28° E	東壁	土師器、須恵器	SI07と重複し、SI07を切る。柱穴とカマドを確認
S 1 07	15	7-3, 4	3.74	(3.46)	0.24	(12.94)	方形	N81° W	南壁	土師器、須恵器、青磁(近世)	SI06と重複し、切られる。カマドを確認
S 1 08	14	6-7	3.01	2.66	0.14	8.01	隅丸方形	N25° E		土師器、須恵器	重複なし
S 1 09	16	7-6~8	3.88	3.25	0.24	12.61	隅丸方形	N29° E	東壁	土師器、須恵器	SD22・SI10・SI11と重複し、SD22に切られ、SI10・SI11を切る。カマドを確認
S 1 10	16	7-6	3.35	2.49	0.26	8.34	長方形	N26° E	南壁	土師器、須恵器	SI09と重複し、切られる。カマドと考えられる炭化層を確認
S 1 11	17	7-6	2.92	(2.32)	0.16	(8.40)	方形	N54° E		土師器、須恵器	SI09と重複し、切られる。カマドと考えられる炭化層を確認
S 1 12	17	6-8	3.02	1.70	0.22	5.134	長方形	N24° E		土師器、須恵器	重複なし

柱穴一覧

遺構番号	区画番号	写真番号	新方平面形	断面形態	長さ(長辺)・m	幅(短辺)・m	深さ・m	時期	出土遺物
S P 01	18		長橋円形	逆台形	0.27	0.20	0.08	古代下層	須恵器
S P 02	18		円形	レンズ状	0.20		0.03	古代下層	須恵器・土師器
S P 03	18		円形	レンズ状	0.35		0.10	古代下層	
S P 04	18		円形	レンズ状	0.32		0.04	古代下層	
S P 05	18		円形	U字形	0.27		0.11	古代下層	
S P 06	18		円形	レンズ状	0.29		0.05	古代下層	
S P 07	18		円形	レンズ状	0.23		0.07	古代下層	
S P 08	18		円形	レンズ状	0.31		0.06	古代下層	
S P 09	18		円形	レンズ状	0.24		0.03	古代下層	
S P 10	18		円形	U字形	0.21		0.07	古代下層	
S P 11	18		円形	逆台形	0.34		0.04	古代下層	
S P 12	18		円形	レンズ状	0.32		0.03	古代下層	
S P 13	18		円形	逆台形	0.40		0.07	古代下層	
S P 14	18		円形	逆台形	0.36		0.07	古代下層	
S P 15	18		円形	逆台形	0.27		0.05	古代下層	
S P 16	18		橋円形	逆台形	0.25	0.15	0.07	古代下層	土師器
S P 17	18		円形	レンズ状	0.47		0.11	古代下層	
S P 18	18		円形	レンズ状	0.30		0.05	古代下層	土師器
S P 19	18		円形	レンズ状	0.30		0.10	古代下層	
S P 20	18		円形	レンズ状	0.35		0.10	古代下層	
S P 21	44		円形	レンズ状	0.33		0.04	中・古世	土師器
S P 22	44		円形	U字形	0.32		0.09	中・古世	
S P 23	44		円形	逆台形	0.23		0.12	中・古世	
S P 24	15		円形	レンズ状	0.46		0.11	古代下層	
S P 25	15		円形	レンズ状	0.37		0.03	古代下層	

土坑一覧(1)

遺構番号	区画番号	写真番号	新方平面形	断面形態	長さ(長辺)・m	幅(短辺)・m	深さ・m	時期	出土遺物
S K 01	19		橋円形	レンズ状	0.55	0.35	0.03	古代下層	
S K 02	19		円形	レンズ状	0.40		0.06	古代下層	
S K 03	19		不整形	逆台形	0.45	0.27	0.07	古代下層	土師器
S K 04	19		橋円形	逆台形	0.40	0.30	0.10	古代下層	須恵器
S K 05	19		橋円形	レンズ状	0.40	0.30	0.05	古代下層	
S K 06	19		橋円形	逆台形	0.65	0.56	0.11	古代下層	
S K 07	19		橋円形	レンズ状	0.37	0.34	0.07	古代下層	
S K 08	19		橋円形	レンズ状	0.54	(0.36)	0.04	古代下層	
S K 09	19		橋円形	逆台形	0.80	0.55	0.06	古代下層	須恵器・土師器
S K 10	19		橋円形	U字形	0.38	0.32	0.14	古代下層	須恵器
S K 11	19		円形	レンズ状	0.40		0.10	古代下層	
S K 12	19		橋円形	U字形	0.40	0.34	0.14	古代下層	
S K 13	19		円形	レンズ状	0.45		0.15	古代下層	
S K 14	19		橋円形	逆台形	0.55	0.43	0.15	古代下層	
S K 15	19		円形	レンズ状	0.45		0.07	古代下層	
S K 16	19		円形	U字形	0.40		0.18	古代下層	
S K 17	19		円形	レンズ状	0.45		0.15	古代下層	
S K 18	19		円形	不整形	0.65		0.10	古代下層	
S K 19	20		橋円形	不整形	1.00	0.74	0.12	古代下層	
S K 20	20		円形	不整形	0.44		0.05	古代下層	
S K 21	20		不整形	逆台形	1.25	0.50	0.10	古代下層	土師器
S K 22	20		橋円形	不整形	0.46	0.28	0.04	古代下層	
S K 23	20		橋円形	U字形	0.78	0.35	0.10	古代下層	
S K 24	20		橋円形	レンズ状	0.89	0.59	0.09	古代下層	
S K 25	20		橋円形	不整形	0.47	0.31	0.04	古代下層	
S K 26	20		橋円形	レンズ状	3.15	1.94	0.22	古代下層	
S K 27	20		橋円形	不整形	0.91	0.50	0.09	古代下層	
S K 28	20		円形	U字形	0.42		0.20	古代下層	
S K 29	20		橋円形	逆台形	0.52	0.36	0.07	古代下層	
S K 30	21		円形	レンズ状	0.94		0.05	古代下層	須恵器・土師器
S K 31	21		橋円形	逆台形	0.94	0.70	0.07	古代下層	須恵器・土師器

土坑一覽(2)

遺構番号	図面番号	写真番号	掘方平面形態	断面形態	長径(長辺)・m	短径(短辺)・m	深さ・m	時期	出土遺物
S K 32	21		楕円形	レンズ状	0.70	0.44	0.10	古代上層	土師器
S K 33	21		楕円形	レンズ状	0.50	0.30	0.10	古代上層	
S K 34	21		不整形	不整形	0.97	0.50	0.08	古代上層	
S K 35	21		連巻形	レンズ状	0.75	0.45	0.06	古代上層	
S K 36	21	8-2	楕円形	レンズ状	1.70	0.80	0.17	古代上層	土師器
S K 37	44		円形	W字形	0.67		0.18	中・古世	須恵器
S K 38	44		楕円形	連台形	0.70	0.45	0.10	中・古世	土師器
S K 39	44		楕円形	レンズ状	1.14	0.70	0.11	中・古世	須恵器・土師器
S K 40	44		楕円形	連台形	0.75	0.58	0.06	中・古世	土師器
S K 41	44		円形	レンズ状	0.45		0.20	中・古世	土師器
S K 42	44		楕円形	連台形	0.56	0.28	0.08	中・古世	土師器
S K 43	44		不整形	連台形	0.50	0.30	0.13	中・古世	土師器
S K 44	44		隅丸方形	連台形	1.02	0.66	0.22	中・古世	
S K 45	44		楕円形	レンズ状	0.66	0.43	0.16	中・古世	
S K 46	44		楕円形	レンズ状	0.56	0.33	0.04	中・古世	
S K 47	44		円形	連台形	0.88		0.22	中・古世	
S K 48	44		円形	連台形	0.86		0.15	中・古世	
S K 49	44		楕円形	連台形	0.91	0.73	0.20	中・古世	
S K 50	45		楕円形	連台形	0.98	0.82	0.20	中・古世	
S K 51	45		楕円形	U字形	0.95	0.42	0.28	中・古世	
S K 52	45		円形	レンズ状	0.73		0.03	中・古世	
S K 53	45		楕円形	レンズ状	0.86	0.46	0.04	中・古世	
S K 54	45		円形	レンズ状(0.26)			0.03	中・古世	
S K 55	45		円形	レンズ状(0.27)			0.04	中・古世	
S K 56	45		円形	レンズ状	0.42		0.06	中・古世	
S K 57	45		楕円形	レンズ状	0.71	0.54	0.05	中・古世	
S K 58	45		円形	連台形	0.53		0.07	中・古世	
S K 59	45		楕円形	U字形	0.99	0.42	0.52	中・古世	
S K 60	45		不整形	レンズ状	0.54		0.12	中・古世	
S K 61	45		不整形	レンズ状	3.51	0.85	0.05	中・古世	土師器
S K 62	45		不整形	不整形	5.20	1.25	0.20	中・古世	土師器
S K 63	20		楕円形	不整形	0.56	0.46	0.15	古代下層	土師器
S K 64	08		不整形	連台形	0.53	0.40	0.12	古代下層	須恵器
S K 65	08		楕円形	レンズ状	0.60	0.49	0.04	古代下層	
S K 66	27		円形	レンズ状	0.42		0.06	古代下層	
S K 67	15		楕円形	U字形	0.51	0.31	0.14	古代上層	炭化物多量に混入

その他の遺構

構番号	図面番号	写真番号	掘方平面形態	断面形態	長径(長辺)・m	短径(短辺)・m	深さ・m	時期	出土遺物
S X 01	36		不整形		(2.01)	1.72	0.12	中・古世	
S X 02	35		不整形		20.00		2.00	中・古世	須恵器・瀬戸・古代
S X 03	36		不整形						

溝一覽(1)

遺構番号	図面番号	写真番号	時期	平面形態	断面形態	長さ(m)	最大幅(m)	最大深(m)	出土遺物
S D 01	21		古代下層	直線	U字形	(16.7)	0.55	0.21	土師器
S D 02	21		古代下層	三日月状	U字形	7.30	0.60	0.12	
S D 03	21		古代下層	直線	連台形	8.30	0.65	0.12	須恵器
S D 04	21		古代下層	直線	U字形	1.10	0.20	0.05	
S D 05	21		古代下層	直線	U字形	5.20	0.30	0.06	
S D 06	21	10-8	古代下層	蛇行	連台形	83.1	3.00	0.64	
S D 07 a	29		古代上層	L字形	連台形	(16.8)	0.60	0.18	土師器、須恵器
S D 07 b	29		古代上層	L字形	連台形	(16.8)	0.60	0.18	土師器、須恵器
S D 08	29		古代上層	直線	連台形	(2.20)	0.40	0.17	
S D 09	29		古代上層	直線	連台形	(9.20)	0.50	0.13	土師器、
S D 10	29		古代上層	直線	連台形	(5.80)	0.40	0.09	土師器、須恵器
S D 11	29		古代上層	直線	レンズ状	(4.70)	0.50	0.15	土師器、
S D 12	29		古代上層	直線	連台形	(9.50)	0.60	0.18	土師器、須恵器
S D 13	29		古代上層	直線	レンズ状	(9.50)	0.60	0.14	土師器、
S D 14	29		古代上層	直線	レンズ状	(8.00)	0.40	0.17	土師器、須恵器
S D 15	29		古代上層	直線	レンズ状	(6.50)	0.50	0.13	土師器、
S D 16 a	29		古代上層	U字形	連台形	(26.5)	1.00	0.25	土師器、須恵器
S D 16 b	29		古代上層	U字形	連台形	(26.5)	1.00	0.25	土師器、須恵器
S D 17 a	29		古代上層	直線	連台形	14.5	1.10	0.32	土師器、須恵器
S D 17 b	29		古代上層	直線	連台形	14.5	1.10	0.32	土師器、須恵器
S D 18 a	29		古代上層	リング状	連台形	(11.0)	(1.40)	0.33	須恵器
S D 18 b	29		古代上層	リング状	連台形	(11.0)	(1.40)	0.24	須恵器
S D 19	29		古代上層	直線	連台形	10.8	1.10	0.15	土師器、須恵器
S D 20 a	29		古代上層	直線	レンズ状	(7.70)	1.60	0.13	土師器、須恵器
S D 20 b	29		古代上層	直線	レンズ状	7.70	1.60	0.13	土師器、須恵器
S D 21	29		古代上層	直線	連台形	4.20	0.60	0.16	土師器
S D 22 a	29		古代上層	不整形	連台形	(28.0)	1.00	0.33	土師器、須恵器
S D 22 b	29		古代上層	不整形	連台形	(28.0)	1.00	0.33	土師器、須恵器
S D 22 c	29		古代上層	不整形	連台形	(28.0)	1.00	0.33	土師器、須恵器
S D 23	29		古代上層	直線	レンズ状	2.90	0.40	0.23	
S D 24	29		古代上層	直線	レンズ状	12.7	0.50	0.18	土師器
S D 25	29		古代上層	直線	連台形	4.60	0.50	0.15	土師器、須恵器
S D 26	29		古代上層	直線	連台形	3.46	0.44	0.09	土師器
S D 27	29		古代上層	不整形	連台形	(2.30)	0.50	0.15	土師器
S D 28	29		古代上層	直線	レンズ状	3.20	0.80	0.10	土師器
S D 29	29		古代上層	直線	レンズ状	3.20	0.60	0.13	土師器

溝一覽(2)

遺構番号	図面番号	写真番号	種別	平面形態	断面形態	長S(m)	最大幅(m)	最大深(m)	出土遺物
S D 30	29		古代上層	直線	逆台形	(3.20)	1.00	0.10	土師器
S D 31	29		古代上層	直線	逆台形	2.30	0.50	0.29	
S D 32a	29		古代上層	U字状	レンズ状	(8.50)	0.50	0.06	
S D 32b	29		古代上層	U字状	レンズ状	8.50	0.50	0.06	
S D 33	29		古代上層	直線	レンズ状	(8.20)	0.70	0.21	
S D 34	30		古代上層	直線	レンズ状	2.90	0.60	0.09	
S D 35	30		古代上層	楕円形	レンズ状	0.67	0.25	0.08	
S D 36	30		古代上層	直線	逆台形	5.80	0.80	0.11	
S D 37	30		古代上層	直線	逆台形	3.00	0.50	0.13	
S D 38	30		古代上層	直線	レンズ状	(2.40)	0.50	0.05	
S D 39	30		古代上層	直線	レンズ状	2.80	0.40	0.08	
S D 40a	30		古代上層	U字状	レンズ状	(8.00)	0.60	0.20	
S D 40b	30		古代上層	U字状	レンズ状	(8.00)	0.60	0.20	
S D 41	30		古代上層	直線	U字形	1.75	0.50	0.19	
S D 42	30		古代上層	直線	逆台形	3.80	0.70	0.18	
S D 43	30		古代上層	直線	U字形	5.20	1.20	0.24	
S D 44	30		古代上層	直線	逆台形	(2.50)	0.40	0.07	
S D 45	30		古代上層	直線	逆台形	3.50	0.50	0.36	
S D 46	30		古代上層	直線	逆台形	4.50	0.50	0.15	
S D 47	30		古代上層	直線	レンズ状	2.00	0.50	0.12	
S D 48	30		古代上層	直線	逆台形	3.50	0.40	0.25	
S D 49	30		古代上層	直線	レンズ状	4.10	0.50	0.15	
S D 50	30		古代上層	直線	レンズ状	1.60	0.40	0.06	
S D 51a	30		古代上層	L字状	レンズ状	6.00	0.60	0.13	
S D 51b	30		古代上層	L字状	逆台形	6.00	0.60	0.13	
S D 52	30		古代上層	直線	レンズ状	3.10	0.50	0.12	
S D 53	30		古代上層	直線	レンズ状	1.50	0.40	0.04	
S D 54	30		古代上層	直線	逆台形	3.00	0.40	0.11	
S D 55	30		古代上層	直線	逆台形	3.50	0.40	0.11	
S D 56	30		古代上層	直線	レンズ状	(1.80)	0.50	0.06	
S D 57	30		古代上層	直線	レンズ状	(0.85)	0.70	0.05	
S D 58	31	10-1, 2	古代下層	直線		(37.6)	7.10	0.65	土師器、須恵器
S D 59a	32	10-3, 5, 6, 7	古代下層	直線		(42.4)	21.9	0.66	土師器、須恵器
S D 59b	33	10-3, 5, 6, 7	古代下層	直線		(42.4)	21.9	0.66	
S D 60a	47	13-1~5	中・近世	直線	レンズ状	(31.8)	6.20	0.51	土師器、珠洲、染付、越中瀬戸、唐津、伊万里、近代磁器、瀬戸美濃、内野山、金銅製品
S D 60b	47	13-1~5	中・近世	直線	レンズ状	(44.0)	8.00	0.54	
S D 61a	47	14-4, 5 15-1, 2, 5	中・近世	直線	逆台形	(74.0)	25.0	0.19	土師器、須恵器、珠洲、八尾、越中瀬戸、伊万里、近代磁器、瀬戸美濃、内野山、陶瓦
S D 61b	47	14-4, 5 15-1, 2, 5	中・近世	直線	逆台形	(47.6)	8.30	0.29	
S D 62a	47	14-2	中・近世	直線	逆台形	(19.0)	2.80	0.23	須恵器、珠洲、越中瀬戸、唐津、伊万里
S D 62b	47	14-2	中・近世	直線	逆台形	(41.4)	2.30	0.45	
S D 63a	48	13-4, 5 14-1~3	中・近世	直線	U字形	(40.5)	7.20	0.64	土師器、須恵器、中世土師器、珠洲、越前、越中瀬戸、唐津、内野山、伊万里、在地系、近代磁器、陶瓦
S D 63b	48	13-4, 5 14-1~3	中・近世	直線	U字形	(26.7)	5.40	0.39	
S D 63c	48		中・近世	直線	U字形	(40.50)	7.20	0.64	
S D 64	46		中・近世	直線	レンズ状	(20.9)	2.40	0.39	伊万里、瀬戸、近代磁器
S D 65	46		中・近世	不整形	U字形	(10.5)	2.40	0.17	土師器
S D 66	46		中・近世	直線	逆台形	(48.0)	2.40	0.25	土師器
S D 67	46		中・近世	直線	レンズ状	(10.0)	1.20	0.19	土師器、須恵器、越中瀬戸
S D 68	46		中・近世	直線	逆台形	(5.40)	0.65	0.19	
S D 69	46		中・近世	不整形	レンズ状	(5.95)	0.80	0.14	土師器、青磁、珠洲、金銅製品(釘)
S D 70	46		中・近世	直線	逆台形	3.40	0.50	0.18	
S D 71	46		中・近世	直線	逆台形	4.15	0.80	0.18	
S D 72	46		中・近世	直線	逆台形	(7.20)	1.00	0.18	
S D 73	46		中・近世	直線	U字形	(4.50)	0.50	0.07	
S D 74	46		中・近世	直線	レンズ状	1.20	0.30	0.16	
S D 75	46		中・近世	直線	逆台形	19.7	1.10	0.29	
S D 76	46		中・近世	直線	レンズ状	1.80	0.40	0.10	
S D 77	46		中・近世	直線	逆台形	17.0	1.30	0.29	須恵器、中世土師器
S D 78	46		中・近世	直線	逆台形	(15.6)	0.60	0.26	
S D 79	46		中・近世	三日月形	逆台形	(4.40)	0.45	0.10	
S D 80	46	15-3, 4	中・近世	リング状	レンズ状	12.0	0.30	0.18	
S D 81	46		中・近世	直線	レンズ状	1.00	0.15	0.06	
S D 82	46		中・近世	L字状	U字形	(14.0)	2.00	0.28	
S D 83	46	15-3	中・近世	直線	逆台形	(13.9)	0.90	0.18	土師器、中世土師器、越中瀬戸、唐津、伊万里
S D 84	46	15-4	中・近世	リング状	レンズ状	13.0	0.50	0.18	中世土師器
S D 85	46		中・近世	直線	逆台形	16.9	1.80	0.14	
S D 86	46		中・近世	直線	逆台形	(8.30)	1.25	0.24	
S D 87	03	10-4	古代下層	直線	レンズ状	26.2	(1.46)	0.24	
S D 88	03	10-4	古代下層	直線	レンズ状	28.6	(2.34)	0.17	
S D 89	25		古代上層	直線	レンズ状	9.31	0.31	0.08	
S D 90	25		古代上層	不整形	逆台形	9.50	0.50	0.14	
S D 91	25		古代上層	直線	逆台形	4.00	0.50	0.16	土師器
S D 92	30		古代上層	直線	レンズ状	5.5	0.42	0.1	

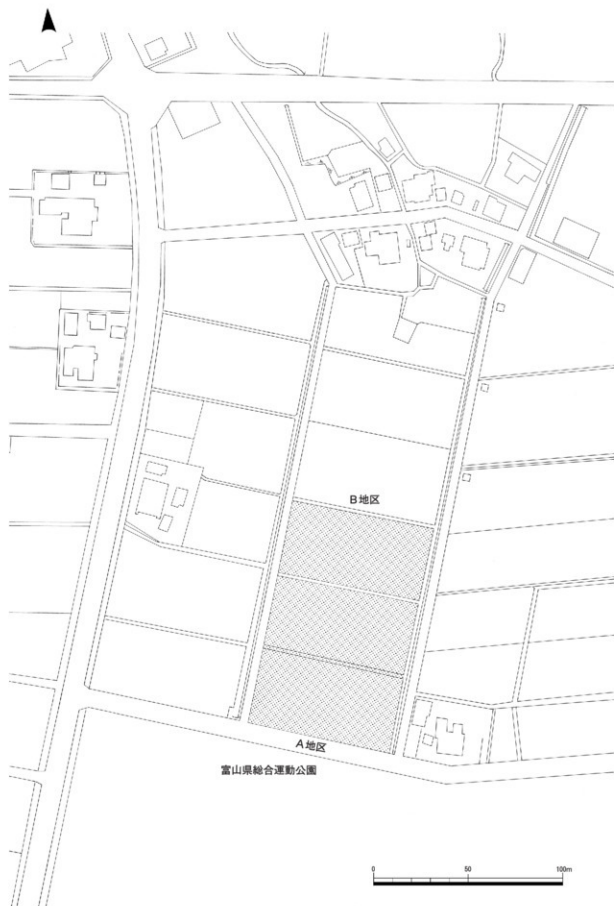
土器・陶磁器一覽1

遺物番号	発掘場所	種類	器種	遺物番号	口徑 cm	底径 cm	高さ cm	容量 (体積単位)	容量 (容量)	残存率	時期	色調	焼成	粘土	備考	
001	49-16	須臾器	杯A	SD10	12.2	3.1	8.1	0.6	0.9	2/3	古代	7.5Y6/7	灰褐色	良	砂粘含・白磁色	
002	49-16	須臾器	杯A	SD11	12.0	3.4	0.8			1/4破	古代	10Y7/4	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
003	49-16	須臾器	杯A	SD12	12.1	3.5	8.0	0.6	0.8	1/2破	古代	7.5Y6/7	灰褐色	良	砂粘含・白磁色	
004	49-16	須臾器	杯B	SD18	14.8	4.5	0.6			1.8割破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
005	49-16	須臾器	杯B	SD12	14.2	3.5	1.0			1/3	古代	2.5Y5/2	暗灰褐色	良	砂粘含・白磁色	
006	49-17	須臾器	壺	SD12	15.1	4.6	0.8			ほぼ完整	古代	5Y6/2	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
007	49-21-2	土師器	壺	SD10	14.0	13.3	6.7	0.6	1/5	古代	5Y R/7.4	灰白褐色	良	砂粘含・白磁色		
008	49-21-2	土師器	壺	SD10	20.0	3.6	0.6	(口縁部)		小片口縁部	古代	10Y R8/3	灰黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
009	49-20-2	土師器	長頸壺	SD12	21.6	12.3	0.5			1/7口縁部 底欠	古代	2.5Y8/2	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
010	49-17	土師器	鉢	SD12	33.7	4.7	0.7	(口縁部)		小片口縁部	古代	2.5Y8/2	灰白色	普通	砂粘含・白磁色	
011	49-20-2	土師器	瓶	SD12	27.7	22.6	1.2			1/6	古代	5Y R/6	明赤褐色	良	明赤色	
012	49-18-1	須臾器	杯A	SD13	11.5	9.0	0.6			1/4破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	不良	砂粘含・白磁色	
013	49-18-1	須臾器	杯A	SD13	3.9	7.7	0.6			1/2破	古代	5Y7/2	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
014	49-18-1	須臾器	杯A	SD13	14.4	4.0	1.0			1.8割破	古代	2.5Y6/4	灰白褐色	良	砂粘含・白磁色	
015	49-18-1	土師器	蓋	SD13	14.0	1.3	0.6	(口縁部)		小片口縁部	古代	5Y R/6	明赤褐色	良	明赤	
016	49-21-2	土師器	小壺	SD13	13.0	3.0	0.5	(口縁部)		1.8割破	古代	10Y R7/4	灰白黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
017	49-21-2	土師器	小壺	SD13	4.0	5.7	0.6	体部下位	0.8	5割破	古代	10Y R7/2	灰白黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
018	49-21-2	土師器	小壺	SD13	18.8	12.4	7.3	0.7	1.0	ほぼ完整	古代	7.5Y R/7.6	褐色	良	砂粘含・白磁色	
019	49-21-1	土師器	鉢	SD15	13.2	2.8	0.6	(口縁部)		1.8割破	古代	10Y R7/4	灰白黄褐色	良	明赤	
020	49-18-1	須臾器	杯A	SD17	13.0	4.3	0.6		0.9	1/4	古代	2.5Y7/2	灰黄色	普通	砂粘含・透明色釉	
021	49-18-1	須臾器	杯A	SD18	13.8	3.8	0.8		0.9	1/4破	古代	2.5Y6/2	灰白黄褐色	普通	砂粘含・白磁色	
022	49-16	須臾器	杯B	SD15	11.8	7.5	0.8	体部下位	0.9	1/4破	古代	2.5Y6/3	灰白黄褐色	普通	砂粘含・白磁色	
023	49-16	須臾器	杯B	SD15	14.0	3.4	8.0	0.6	0.8	1/2	古代	2.5Y5/2	暗灰褐色	良	砂粘含・白磁色	
024	49-21-2	土師器	長頸壺	SD15	20.0	4.1	0.6	(口縁部)		小片口縁部	古代	7.5Y R7/3	灰白褐色	良	砂粘含・白磁色	
025	49-18-1	須臾器	杯A	SD16	12.6	2.9	0.7		0.9	1/4破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
026	49-18-1	須臾器	杯A	SD16	14.0	3.4	10.4	0.5	0.9	1/8	古代	2.5Y8/4	灰黄色	不良	砂粘含・白磁色	
027	49-20-2	須臾器	大型杯	SD16	18.4	9.1	0.7			1/8	古代	2.5Y7/4	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
028	49-18-1	須臾器	杯A	SD16	14.0	3.0	0.6			小片口縁部	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
029	49-18-1	須臾器	杯A	SD16	13.0	3.2	0.6			小片口縁部	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
030	49-21-2	土師器	小壺	SD18	13.9	2.1	0.4	(口縁部)		1.8割破	古代	10Y R8/4	灰黄褐色	普通	砂粘含・白磁色	
031	50-18-1	須臾器	杯A	SD17	14.0	3.2	0.6			1.8割破	古代	10Y R7/3	灰黄色	不良	砂粘含・白磁色	
032	50-16	須臾器	杯蓋	SD17	13.6	2.4	0.9			ほぼ完整	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
033	50-16	須臾器	杯B	SD17	16.4	6.2	12.0	0.6	0.9	1.8割破	古代	2.5Y6/2	灰白色	普通	砂粘含・白磁色	
034	50-17	土師器	小壺	SD17	9.0	7.4	6.8	0.5	0.7	2/3	古代	10Y R7/2	灰白黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
035	50-21-2	土師器	壺	SD17	10.0	0.7	0.7	(口縁部)		小片口縁部	古代	5Y R/7.4	灰白褐色	良	砂粘含・白磁色	
036	50-18-1	須臾器	杯A	SD18	14.4	2.5	0.6	(口縁部)		小片口縁部	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
037	50-18-1	須臾器	杯A	SD18	15.0	4.4	0.5			小片口縁部	古代	2.5Y7/4	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
038	50-18-1	須臾器	大型杯	SD18	18.0	4.2	0.5			小片口縁部	古代	2.5Y6/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
039	50-18-1	須臾器	杯B	SD18	15.0	2.0	0.8			小片口縁部	古代	2.5Y8/5	灰黄色	不良	砂粘含・白磁色	
040	50-20-2	土師器	壺	SD18	12.6	7.0	12.9	1.0	1.0	1.6破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
041	50-19-1	須臾器	杯A	SD18	12.0	3.3	0.6			小片口縁部	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
042	50-19-1	須臾器	杯A	SD19	11.8	1.8	0.8			1/3	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・灰赤色	
043	50-16	須臾器	杯A	SD11	14.0	3.2	9.2	0.6	0.9	1/6	古代	2.5Y7/2	灰黄色	普通	砂粘含・白磁色	
044	50-21-2	土師器	長頸壺	SD19	27.0	6.2	0.6	体部下位	1.0	1.8割破	古代	10Y R8/3	灰黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
045	49-18-1	須臾器	杯A	SD19	11.9	8.2	0.6	体部下位	1.0	1/2破	古代	10Y R8/3	灰黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
046	50-18-1	須臾器	杯A	SD19	12.7	3.4	0.6		0.8	1/3	古代	2.5Y8/2	灰白色	不良	砂粘含・白磁色	
047	50-18-2	須臾器	杯A	SD19	11.6	3.1	0.4		0.6	1/4	古代	5Y7/2	灰白色	良	明赤	
048	50-19-2	須臾器	杯B	SD19	12.0	7.1	0.6	体部下位	0.9	1/2破	古代	2.5Y6/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
049	50-18-1	須臾器	杯B	SD19	13.0	2.9	0.7		0.6	1/4破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
050	50-18-2	須臾器	杯B	SD19	2.2	8.3	0.6		0.6	1/4破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	不良	砂粘含・白磁色	
051	50-19-2	須臾器	杯B	SD19	3.7	7.5	0.6		0.6	1/4破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	明赤	
052	50-18-2	須臾器	杯B	SD19	3.2	8.8	0.5		0.5	1/5	古代	7.5Y6/1	灰褐色	良	砂粘含・白磁色	
053	50-18-2	須臾器	杯B	SD19	3.9	7.5	0.6	体部下位	0.6	1/2破	古代	2.5Y7/2	暗灰褐色	良	明赤	
054	50-18-2	須臾器	杯B	SD19	2.5	8.5	0.5		0.5	1/4	古代	2.5Y8/3	灰白色	不良	明赤	
055	50-18-2	須臾器	杯B	SD19	2.2	6.0	0.5	体部下位	0.5	1/2破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	明赤	
056	50-18-2	須臾器	杯B	SD19	11.5	3.9	6.7	0.3	0.6	1/4	古代	7.5Y6/1	灰褐色	良	明赤	
057	50-18-2	須臾器	杯蓋	SD19	22.6	1.8	0.5			1割破	古代	7.5Y6/1	灰褐色	良	明赤	
058	50-18-1	須臾器	杯蓋	SD19	33.5	1.8	0.4			1割破	古代	5Y5/1	灰色	良	明赤	
059	50-18-2	須臾器	杯蓋	SD19	11.5	2.0	0.5			1.8割破	古代	5Y7/2	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
060	50-22-1	土師器	壺	SD19	11.5	4.9	0.6	体部下位	0.6	1/2破	古代	5Y R/6	褐色	良	砂粘含・赤褐色	
061	50-16	土師器	壺	SD19	13.0	1.3	0.7		0.4	1/4破	古代	7.5Y7/1	灰白色	普通	砂粘含・白磁色	
062	50-16	土師器	壺	SD19	12.0	1.5	0.4	(口縁部)	0.6	1/4破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
063	50-16	土師器	壺	SD19	12.2	4.1	4.9	0.4	(口縁部)	0.7	3/5	古代	7.5Y6/6	褐色	良	砂粘含・透明色釉
064	50-17	須臾器	双耳瓶	SD19	19.9	19.9	0.9			1/2割破	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
065	50-22-1	土師器	壺	SD19	3.6	3.7	0.5	(口縁部)		小片口縁部	古代	10Y R8/2	灰白色	普通	砂粘含・白磁色	
066	50-22-1	土師器	壺	SD19	25.4	2.9	0.6	(口縁部)		小片口縁部	古代	10Y R8/4	灰黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
067	50-22-1	土師器	壺	SD19	25.8	8.3	0.8			1.8割破	古代	2.5Y8/2	灰白色	不良	砂粘含・白磁色	
068	50-22-1	土師器	壺	SD19	24.1	3.5	0.6	(口縁部)		小片口縁部	古代	10Y R8/4	灰黄褐色	普通	砂粘含・赤褐色	
069	50-16	須臾器	壺	SD19	13.9	1.7	0.6			1/8	古代	7.5Y7/1	灰白色	普通	砂粘含・白磁色	
070	50-16	須臾器	壺	SD19	14.0	4.0	8.0	0.6	1.0	1/3	古代	2.5Y5/5	黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
071	50-22-1	土師器	壺	SD19	18.3	2.2	0.6			1.8割破	古代	5Y7/1	灰白色	良	明赤	
072	50-22-1	土師器	壺	SD19	14.3	2.9	0.6	(口縁部)		小片口縁部	古代	10Y R6/3	灰白黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
073	50-22-1	土師器	壺	SD19	14.3	2.9	0.6	(口縁部)		小片口縁部	古代	7.5Y R6/4	灰白黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
074	51-18-2	須臾器	杯A	SD19	12.3	3.6	9.0	0.5	0.7	1/4	古代	5Y6/1	灰褐色	良	明赤	
075	51-19-2	須臾器	杯A	SD19	13.8	3.5	0.7		0.8	1/6	古代	5Y7/1	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
076	51-16	須臾器	杯A	SD19	13.0	3.1	8.0	0.7	0.5	1/4	古代	2.5Y6/1	灰黄色	普通	砂粘含・白磁色	
077	51-18-1	須臾器	杯A	SD19	12.0	1.5	0.4	体部下位	1.0	1/3	古代	2.5Y7/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
078	51-16	須臾器	杯B	SD19	14.0	4.0	8.0	0.6	1.0	1/3	古代	2.5Y5/5	黄褐色	良	砂粘含・白磁色	
079	51-18-2	須臾器	杯蓋	SD19	18.3	2.2	0.6			1.8割破	古代	5Y7/1	灰白色	良	明赤	
078	51-18-2	須臾器	杯蓋	SD19	15.3	1.6	0.7			1.8割破	古代	7.5Y7/1	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
080	51-16	須臾器	杯蓋	SD19	19.2	1.6	0.8			小片口縁部	古代	2.5Y8/2	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
081	51-16	須臾器	杯蓋	SD19	19.2	1.6	0.8			1.8割下	古代	5Y8/1	青灰色	良	砂粘含・白磁色	
082	51-20-1	須臾器	杯蓋	SD19	37.5	2.0	0.5			1/5	古代	2.5Y6/2	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
083	51-19-2	須臾器	瓶	SD19	24.9	1.1	1.8			1/8	古代	10Y7/1	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
084	51-16	須臾器	壺	SD19	29.5	2.5	0.8			1/4割破	古代	7.5Y7/1	灰白色	良	砂粘含・白磁色	
085	51-19-2	須臾器	壺	SD19	35.5	1.6	0.9	(口縁部)		1.8割破	古代	2.5Y6/1	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
086	51-19-2	須臾器	壺	SD19	25.0	4.0	0.8	(口縁部)		小片口縁部	古代	7.5Y6/1	灰黄色	良	砂粘含・白磁色	
087	51-16	須臾器	壺	SD19	14.0	5.4	0.5	(口縁部)		1/4割破	古代	7.5Y6/1	灰褐色	良	砂粘含・白磁色	
088	51-16	須臾器	壺	SD19	13.4	4.8	0.5	(口縁部)		小片口縁部	古代	7.5Y6/1	灰褐色	良	砂粘含・白磁色	

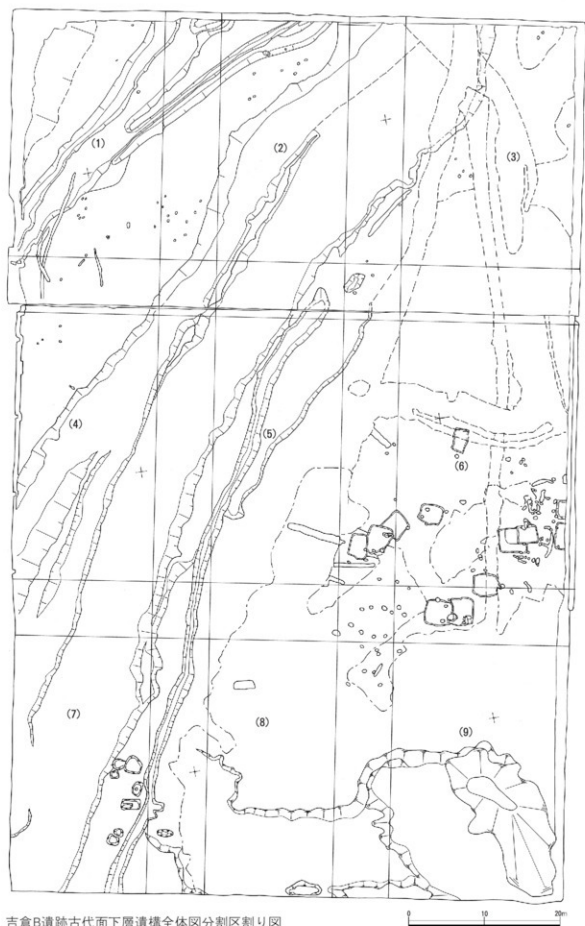
土器・陶磁器一覧3

博物館 番号	図号 番号	通称 番号	種類	器種	通径 cm	口径 cm	高さ cm	底径 cm	器厚 (体部中央)	器底 径	残存率	時期 (50%)	色	調	焼成	胎土	備考	
174	54	23-1	越中瀬戸	小皿	SD63	1.8	5.1	0.5(体部下段)	0.8	1/5底面	近世	7.5Y7/7	灰白色	良	精良	灰輪-7.5Y7/2黄褐色		
175	54	23-1	越中瀬戸	小皿	SD63	2.1	5.4	0.8(体部下段)	1.1	底面磨蝕	近世	7.5Y7/7	灰白色	良	精良	砂粒含-白・灰 砂粒	灰輪-10YR2/2黄褐色	
176	54	23-1	越中瀬戸	小皿	SD63	2.0	5.0	0.5(体部下段)	0.6	2/3底面	近世	2.5Y7/2	灰黄色	良	精良		灰輪-10YR3/3黄褐色 見込み菊花紋	
177	54	23-1	越中瀬戸	大入替	SD63	9.9	3.9	10.0	0.4	1/8割	近世	10Y R/2	灰黄褐色	普通	砂粒含-白底 砂粒	灰輪-10YR2/2黄褐色		
178	54	23-2	越中瀬戸	白付	SD63	1.9	4.6	0.6	0.7	1/3	近世	2.5Y7/2	灰白色	良	精良		灰輪-5Y7/2黄褐色	
179	54	24-1	伊万里	小皿	SD63	2.3	4.2	0.4	1.0	完形底面	近世	10Y7/1	灰白色	良	精良		透明輪-10Y8/1灰白色 見込み蛇の目輪	
180	54	23-2	唐津	碗	SD63	13.0	5.2	0.6	1.8(口縁部)	1/8割	近世	5Y6/1	灰白色	良	精良		透明輪-5Y7/1灰白色	
181	54	23-1	唐津	鉢	SD63	2.5	4.2	0.6 (口縁部)	1.0	小片口縁部	近世	7.5Y7/7	灰白色	良	精良		灰輪-5Y7/2黄褐色	
182	54	23-1	珠洲	盥	SD63				1.1 (口縁部)	小片口縁部	中世	N8/	灰白色	良	精良		砂粒含-白底 明色粒	
183	54	24-1	伊万里	小皿	SD63	2.8	4.7	0.5	0.7	完形底面	近世	5Y8/1	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 見込み蛇ノ目輪	
184	54	23-2	唐津	碗	SD63	5.9	4.6	0.6	0.8	1/2底面	近世	10Y7/1	灰白色	良	精良		透明輪-10Y8/1灰白色 17C末~18C 高台絞輪	
185	54	23-2	唐津三島手	碗	SD63	10.0	3.9	0.5	1.6(口縁部)	近世	2.5Y7/5	灰白色	良	精良		灰輪-5YR3/4黄褐色 外面朝毛模様		
186	54	24-1	伊万里	筒形碗	SD63	8.3	5.3	0.3	1/4	逆形 底面	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 19C 内面口縁部 四方彫文、外面彫文		
187	54	23-1	陶器	盥	SD63	4.9	20.1	1.9(体部下段)	2.1	1/8底面	近世	2.5Y6/1	灰白色	良	精良		灰輪-7.5YR2/2黄褐色 内面自然輪	
188	54	23-1	唐津	スリ鉢	SD63	28.1	7.9	0.9		1/8(口縁部)	近世	2.5Y7/4	灰白色	良	精良		砂粒含-白色粒	
189	54	23-1	中世土師器	皿	包含物	12.0	1.7	0.6 (口縁部)		1/4(口縁部)	中世	10Y R/2	灰黄褐色	良	精良		砂粒含-白色粒	
190	54	23-1	瀬戸式瀬戸	皿	包含物	1.5	5.2		0.5	1/8底面	中世	2.5Y7/3	灰黄色	良	精良		透明輪-10YR6/4黄褐色	
191	54	23-1	越中瀬戸	皿	SD63	11.0	2.9	4.8	0.4	0.6	1/6	近世	7.5Y7/1	灰白色	良	精良		透明輪-5YR3/4黄褐色
192	54	23-1	越中瀬戸	皿	SD60	1.7	3.1	0.4		1.1	底面磨蝕	近世	5Y R/5	灰白色	良	精良		灰輪-5YR2/2黄褐色
193	54	23-1	越中瀬戸	小皿	SD60	1.1	4.2		0.8	1/3底面	近世	10Y R/4	灰黄褐色	良	精良		砂粒含-白色粒	
194	54	23-1	越中瀬戸	小皿	SD60	1.7	3.8	0.4		0.5	底面磨蝕	近世	5Y R/4	灰黄色	良	精良		灰輪-5YR3/4黄褐色
195	54	23-1	越中瀬戸	小皿	SD60	1.4	6.0	0.7		0.5	1/8底面	近世	10Y7/1	灰白色	良	精良		灰輪-5YR3/4黄褐色
196	54	23-1	越中瀬戸	小皿	SD60	1.4	6.0	0.4		0.6	1/4底面	近世	7.5Y7/4	灰白色	良	精良		砂粒含-白色粒
197	54	23-1	越中瀬戸	小皿	包含物	2.2	5.5	0.5	1.0	完形底面	近世	10Y7 R/7	灰白色	良	精良		砂粒含-白色粒	
198	54	23-1	唐津	皿	包含物	10.5	2.6	3.0	0.4	0.7	1/4	近世	5Y R/2	朝赤褐色	良	精良		灰輪-5Y4/3黄褐色
199	54	23-1	珠洲	盥	SD60				1.0(口縁部)	小片口縁部	中世	5Y5/1	灰白色	良	精良		高台砂目付	
200	54	23-2	唐津	碗	SD60	5.0	4.6	1.2	0.6	1/4	近世	10Y6/1	灰白色	良	精良		透明輪-10Y8/1灰白色 17C前半 高台絞輪	
201	54	23-2	唐津	碗	SD60	5.5	4.0	0.6	0.6	1/3	近世	5Y6/1	灰白色	良	精良		透明輪-10Y7/1灰白色 17C末~18C 高台絞輪	
202	54	23-2	唐津	碗	SD60	10.7	5.4	0.7		1/8(口縁部)	近世	7.5Y6/1	灰白色	良	精良		透明輪-7.5Y18/16灰白色 17C末~18C 高台絞輪	
203	54	24-1	伊万里	そば罌口	SD60	2.5	6.9	0.5	0.6	1/6底面	近世	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 18C 蛇ノ目同色 彫文、外面上半彫文、下半赤文	
204	54	24-1	伊万里	そば罌口	SD60	5.2	7.0	0.4	0.5	1/4	近世	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 蛇ノ目同色高台、 外面上半彫文、下半赤文	
205	54	24-1	瀬戸	湯飲み	SD60	8.2	6.2	3.7	0.7	1/3	近世	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 高台内(口上)口 上彫	
206	54	24-1	伊万里	碗	SD60	9.2	5.1	0.4		1/6割	近世	2.5Y8/2	灰白色	良	精良		透明輪-2.5Y8/1灰白色 18C 外面 シムツキ	
207	54	24-1	伊万里	碗	SD60	3.3	5.4	0.6	0.4	1/4	近世	2.5Y8/1	灰白色	良	精良		透明輪-2.5Y8/1灰白色	
208	54	24-1	伊万里	碗	SD60	11.6	4.2	0.4		小片口縁部	近世	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 18C末	
209	54	24-1	瀬戸	湯飲み	SD60	10.7	5.5	0.4		近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 18C末		
210	54	24-1	唐津	碗	SD60	2.3	3.9	0.4	0.8	底面完形	近世	10Y7 R/4	灰白色	良	精良		透明輪-10YR5/4灰白色	
211	54	24-1	瀬戸式瀬戸	生薬罌	SD60	3.5	4.7	0.4	0.8	1/3	近世	2.5Y7/3	灰黄色	良	精良		太白輪-2.5Y7/2灰白色 6割彫文	
212	54	24-1	伊万里	鉢	SD60	5.7	2.4	2.4	0.4	0.2	1/2	近世	5Y8/1	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 口縁部内部に紅 い
213	54	24-1	瀬戸	湯飲み	SD60	17.7	3.3	2.6	0.2	1/3	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色	
214	54	24-1	瀬戸	湯飲み	SD60	8.0	5.8	3.6	0.3	1.4	1/3	近代	10Y7/1	灰白色	良	精良		透明輪-10Y8/1灰白色
215	54	24-1	瀬戸	湯飲み	SD60	7.8	5.8	4.4	0.3	0.4	1/3	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色
216	54	24-1	染付	小皿	SD60	1.4	3.4	0.3(体部下段)	0.7	1/5底面	中世	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 染付 細彫文-5Y8/4黄褐色	
217	54	24-2	内野山	小皿	SD60	2.0	3.5	0.3	0.6	完形底面	近世	2.5Y8/2	灰白色	良	精良		17C 蛇ノ目輪	
218	54	24-1	伊万里	小皿	慶土	13.0	3.9	5.3	0.5	1/6	近世	2.5Y7/1	灰白色	良	精良		透明輪-2.5Y7/1灰白色 内面支文 文、見込彫文の輪	
219	54	24-1	伊万里	小皿	SD60	16.7	3.6	0.4		小片口縁部	近世	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 18C 7 内面口縁部彫文、外面彫文	
220	54	24-1	伊万里	小皿	SD60	14.4	3.3	0.5		小片口縁部	近世	2.5Y8/2	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 18C 7 内面口縁部	
221	54	25-1	磁器	碗	SD60	11.7	6.1	4.0	0.4	0.5	1/2	近代	10Y7/1	灰白色	良	精良		透明輪-10Y7/1灰白色
222	54	25-1	瓦葺土器	小皿	包含物	18.0	4.5	0.8 (口縁部)		1/8(口縁部)	中世	10Y7 R/7	灰白色	良	精良		透明輪-7.5Y7/1灰白色	
223	25-1	磁器	碗	SD60	11.3	5.7	4.0	0.3	0.5	1/3	近代	7.5Y8/1	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色	
224	25-1	磁器	碗	SD60	12.8	4.7	4.0	0.3	0.5	1/2	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色	
225	25-1	磁器	碗	SD60	11.6	5.6	4.6	0.3	0.5	1/3	近代	2.5Y7/3	灰黄色	良	精良		透明輪-2.5Y7/3灰黄色	
226	25-1	磁器	碗	SD60	8.6	5.9	4.2	0.3	0.5	1/3	近代	2.5Y8/4	灰白色	良	精良		透明輪-2.5Y8/4灰白色	
227	25-1	磁器	碗	SD60	4.3	3.4	0.4		0.6	1/3	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色	
228	25-1	磁器	碗	SD60	11.5	6.5	4.8	0.5	0.8	3/4	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 輪 高台内ノ 16C 彫	
229	25-1	磁器	碗	SD60	3.3	3.7	0.4		0.4	完形底面	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 19C 輪 高台内ノ 輪99C 彫	
230	25-1	磁器	碗	SD60	5.8	3.9	0.4		0.5	1/3	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 輪 高台内ノ 高台内ノ	
231	25-1	磁器	碗	SD60	3.5	4.0	0.4		0.5	完形底面	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 19C 輪 高台内ノ 高台内ノ	
232	25-2	磁器	碗	SD60	4.8	3.7	0.4		0.5	完形底面	近代	7.5Y8/1	灰白色	良	精良		透明輪-7.5Y7/1灰白色 19C 輪 高台内ノ	
233	25-2	磁器	碗	SD60	11.8	5.9	3.3	0.3	0.5	1/3	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 輪 高台内ノ 輪100C 彫	
234	25-2	磁器	碗	SD60	5.5	3.8	0.4		0.4	1/2底面	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 19C 輪 高台内ノ 輪104C 彫	
235	25-2	磁器	皿	SD60	11.6	2.5	5.3	0.3	0.4	1/2	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 高台内ノ 輪103C 彫	
236	25-2	磁器	碗	SD60	9.8	5.0	3.3	0.3	0.4	1/5	近代	5Y8/1	灰白色	良	精良		透明輪-5Y8/1灰白色 輪 高台内ノ 輪102C 彫	
237	25-2	磁器	碗	SD60	11.0	5.0	3.6	0.6	0.3	1/2	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 輪 高台内ノ 輪106C 彫	
238	25-2	磁器	碗	SD60	11.8	5.1	4.0	0.5	0.6	1/3	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 輪 高台内ノ 輪107C 彫	
239	25-2	磁器	碗	SD60	11.4	5.0	3.8	0.5	0.6	1/3	近代	N8/	灰白色	良	精良		透明輪-N8/灰白色 輪 高台内ノ 輪111C 彫	

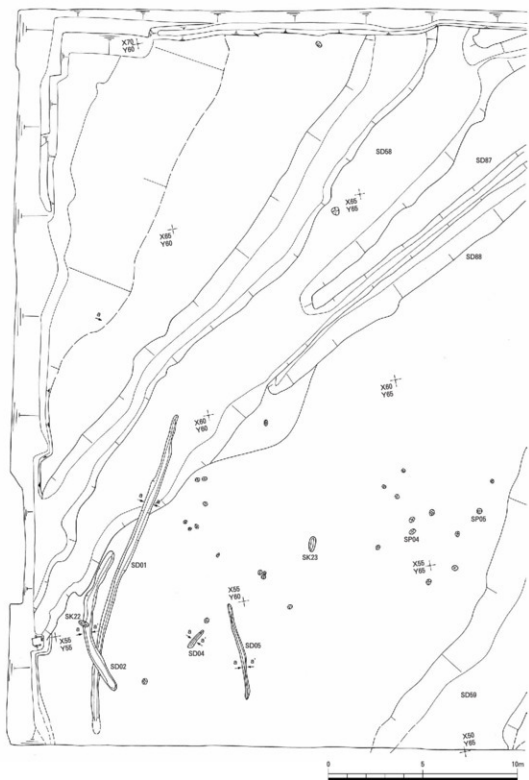
圖 面



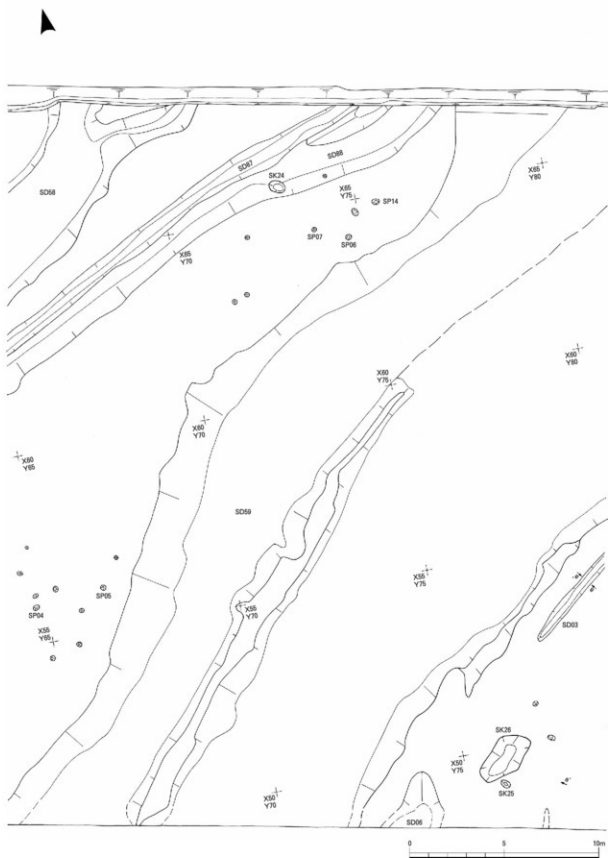
吉倉B遺跡調査地配置図



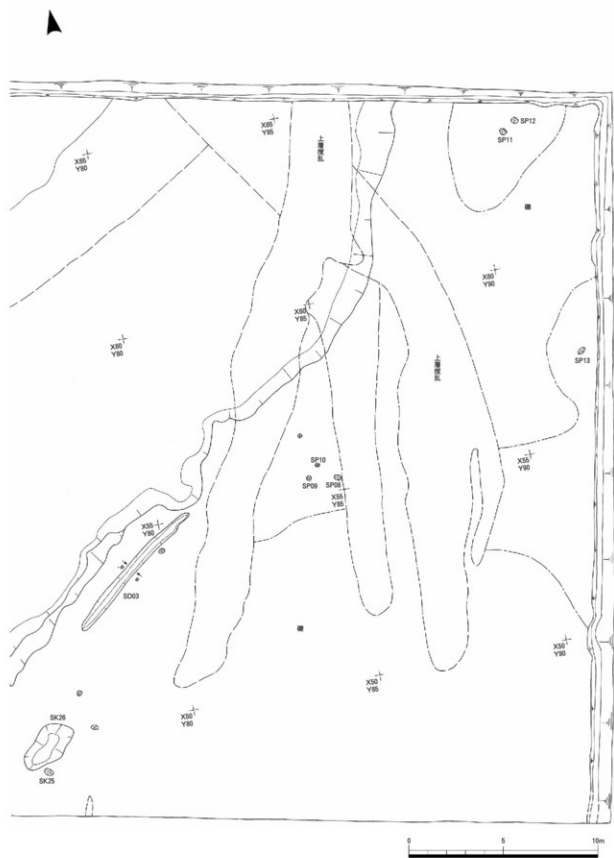
吉倉B遺跡古代面下層遺構全体図分割区割り図



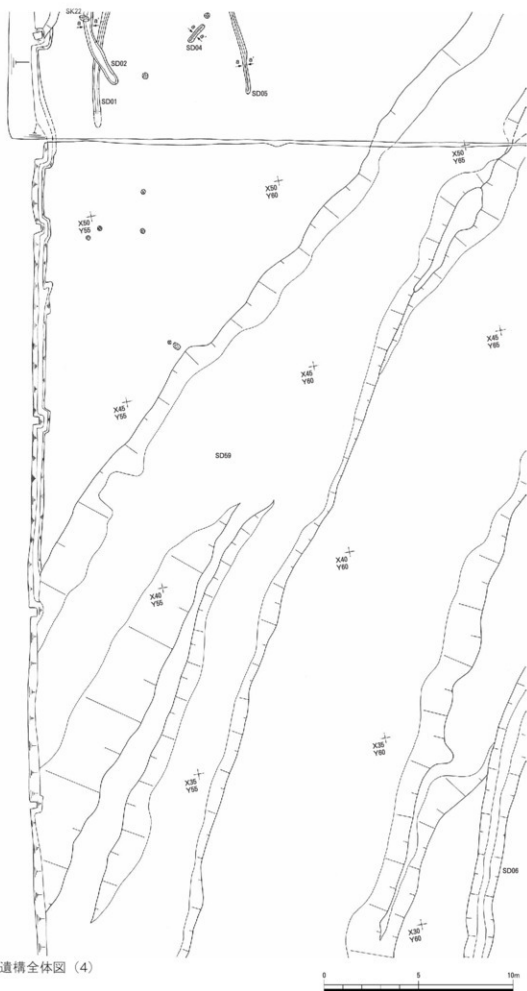
古代面下層遺構全体図 (1)



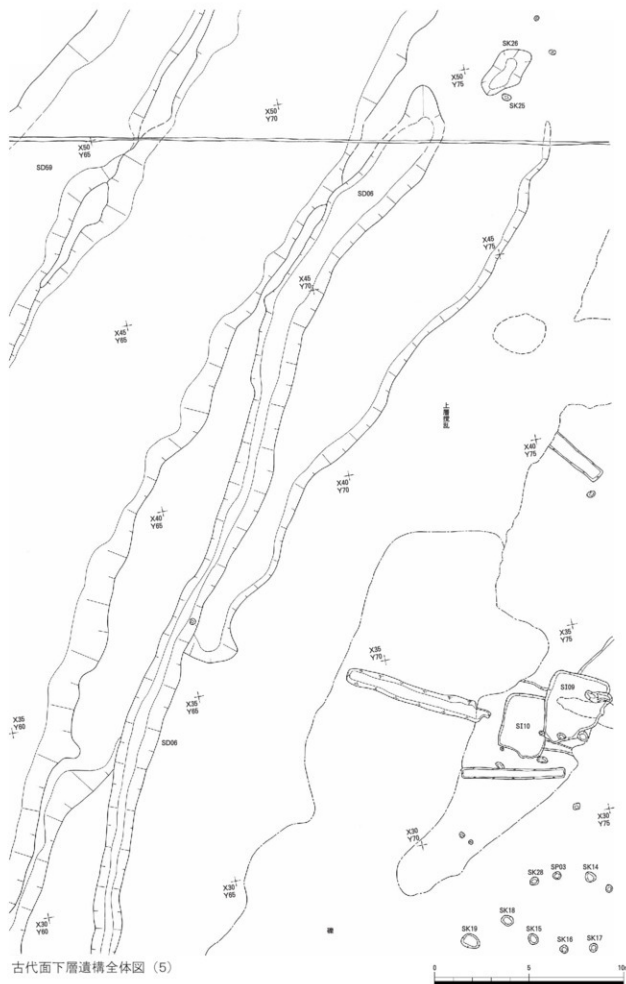
古代面下層遺構全体図 (2)



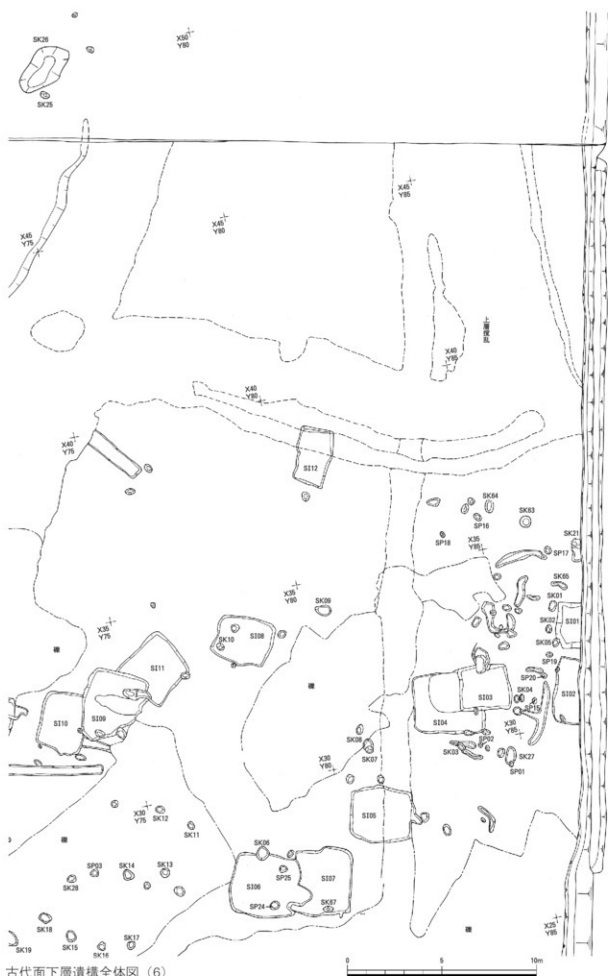
古代面下層遺構全体図 (3)



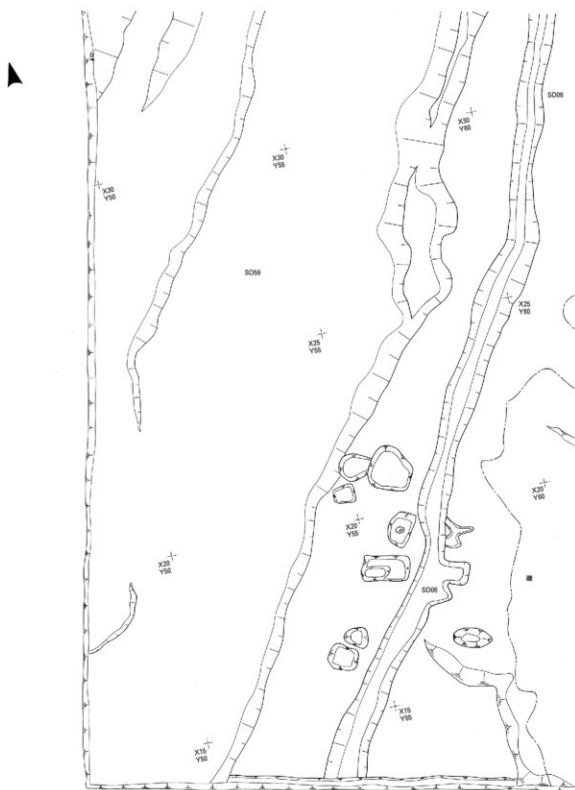
古代面下層遺構全体図 (4)



古代面下層遺構全体図 (5)



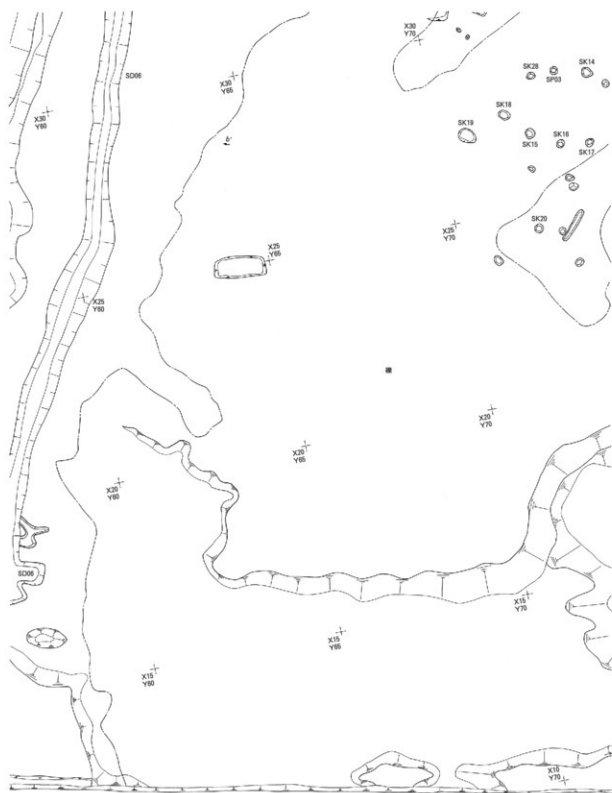
古代面下層遺構全体図 (6)



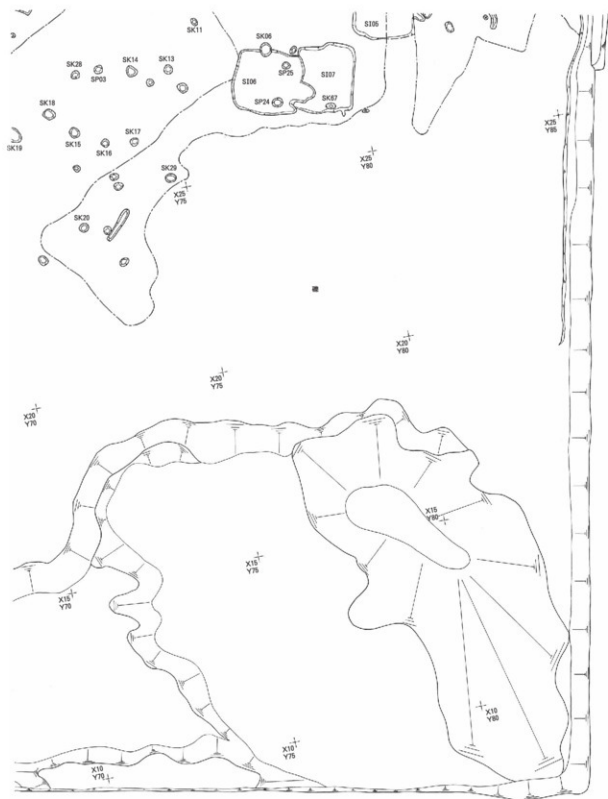
古代面下層遺構全体図 (7)



図面10

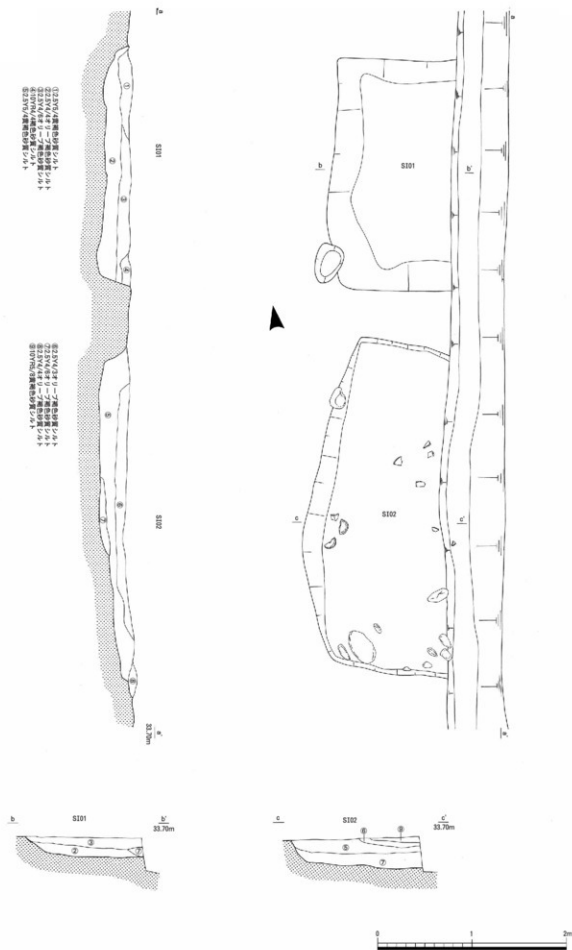


古代面下層遺構全体図 (8)

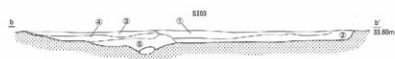
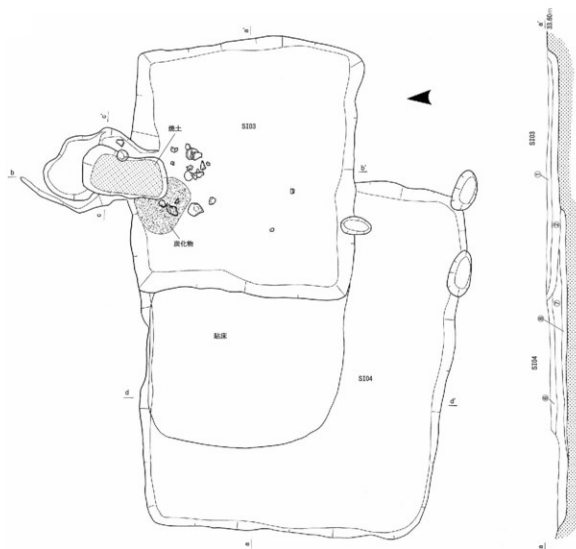


古代面下層遺構全体図 (9)





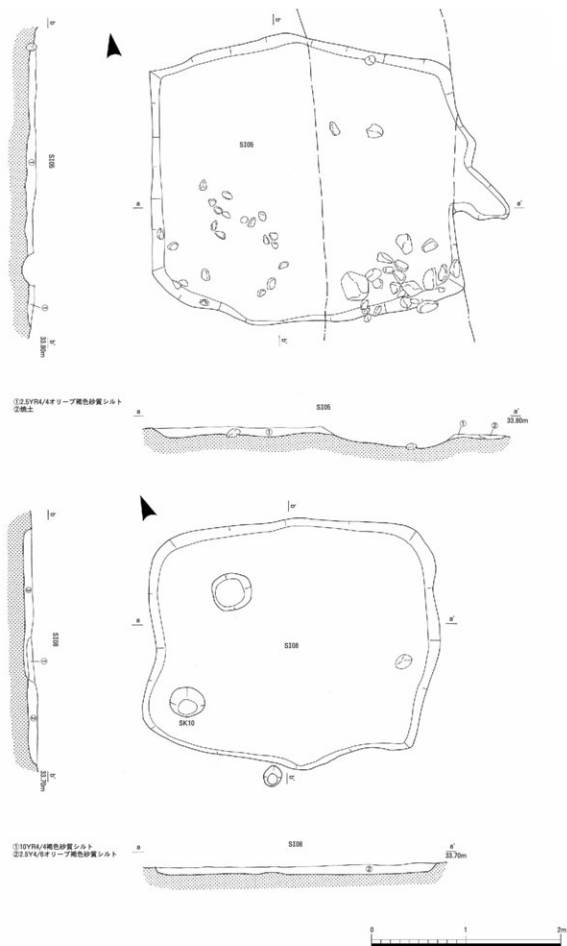
古代面下層竪穴建物実測図(1)



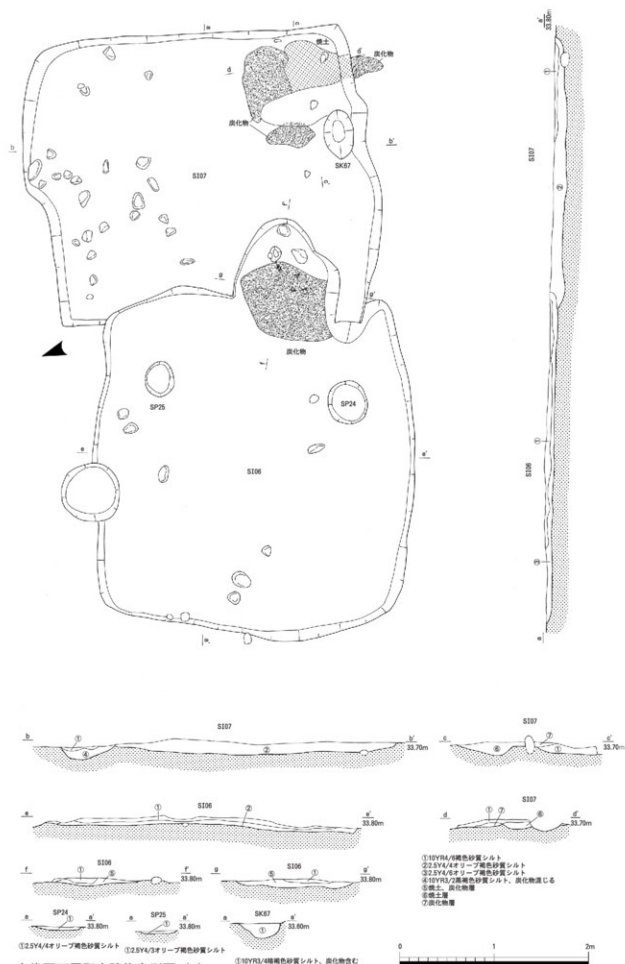
- ①2.5Y4/6オリーブ褐色砂質シルト
- ②10YR4/4褐色砂質シルト
- ③2.5Y4/6オリーブ褐色砂質シルト
- ④10YR4/4褐色砂質シルト、粘土含む
- ⑤10YR4/6褐色砂質シルト
- ⑥10YR4/4褐色砂質シルト
- ⑦2.5Y4/6オリーブ褐色砂質シルト
- ⑧2.5Y4/4黄褐色砂質シルト、マンガング

古代面下層竪穴建物実測図(2)

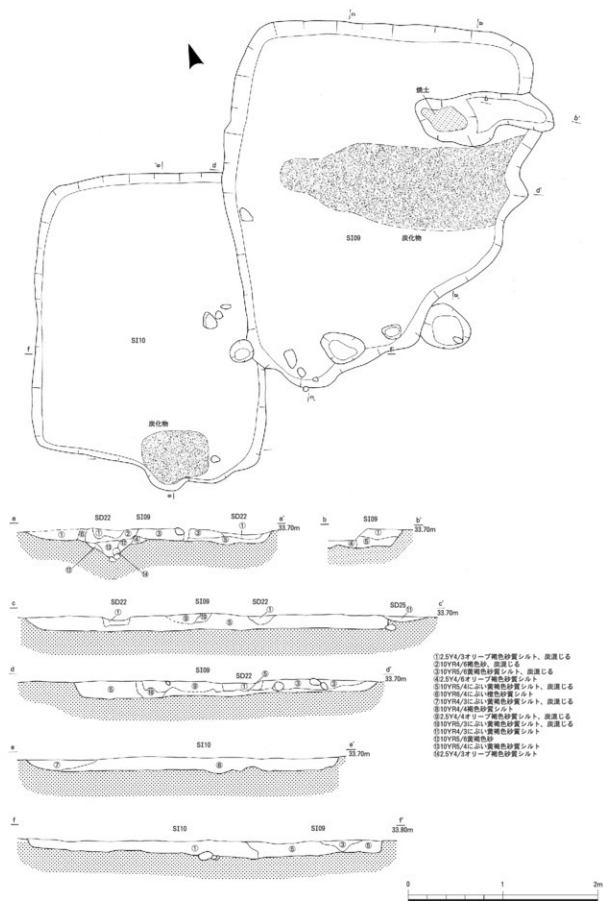
図面14



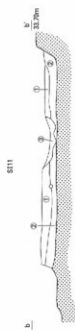
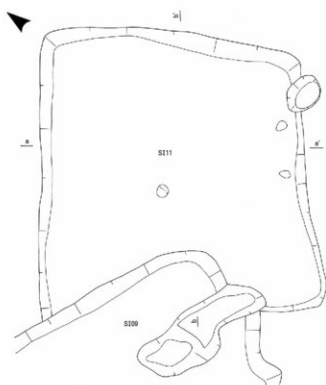
古代面下層竪穴建物実測図 (3)



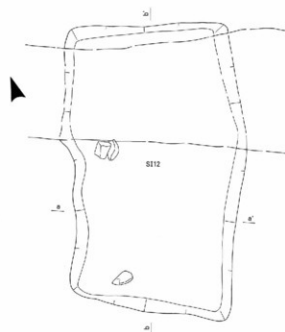
古代面下層堅穴建物実測図 (4)



古代面下層竈穴建物実測図 (5)



- ①2.5Y6/3黄褐色砂質シルト
- ②10YR4/6褐色砂質シルト
- ③10YR4/4褐色砂質シルト
- ④10YR4/6褐色砂質シルト（炭化物が混じる）

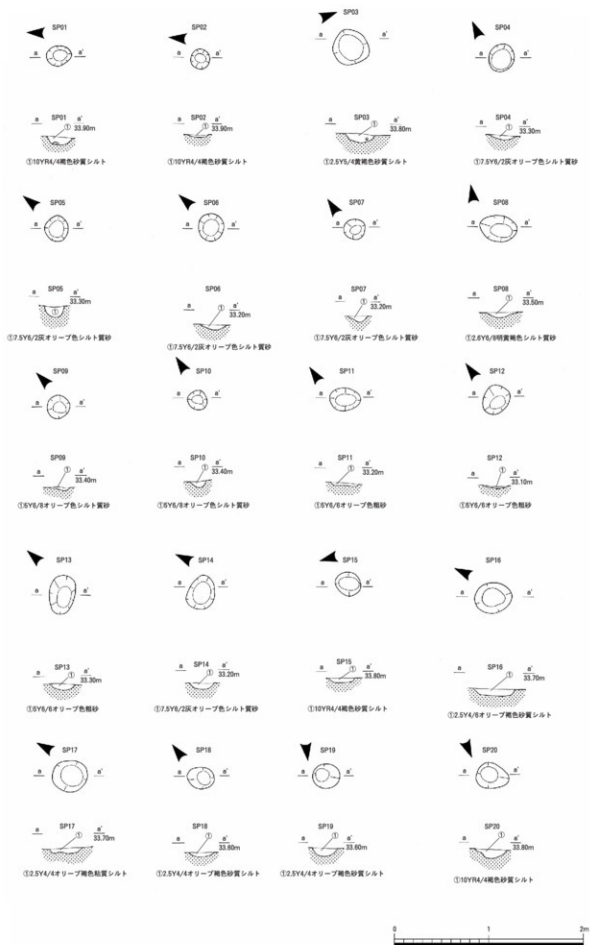


- ①2.5Y6/3オリーブ褐色砂質シルト
- ②2.5Y6/4黄褐色砂質シルト

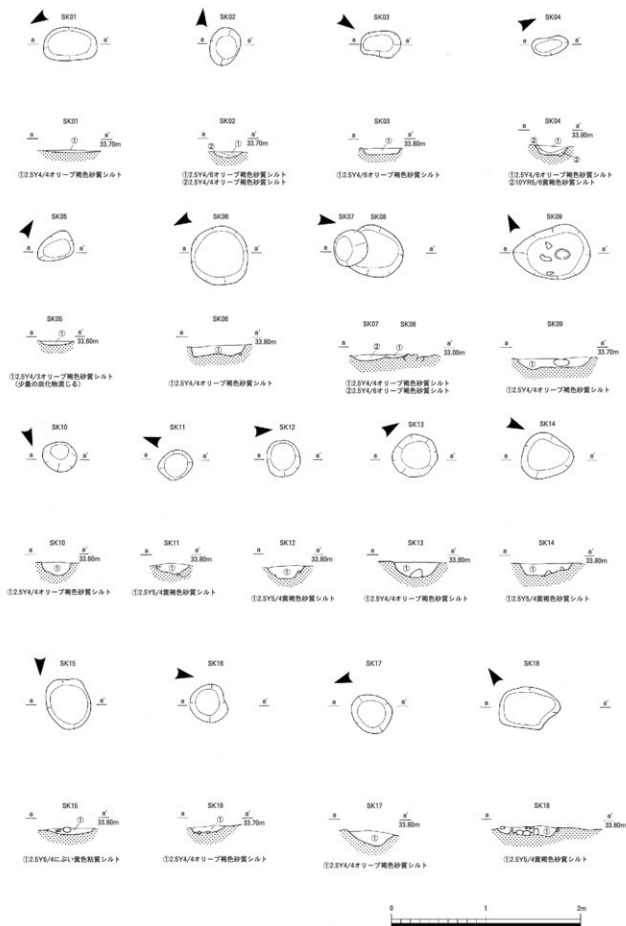


古代面下層竪穴建物実測図 (6)

図面18

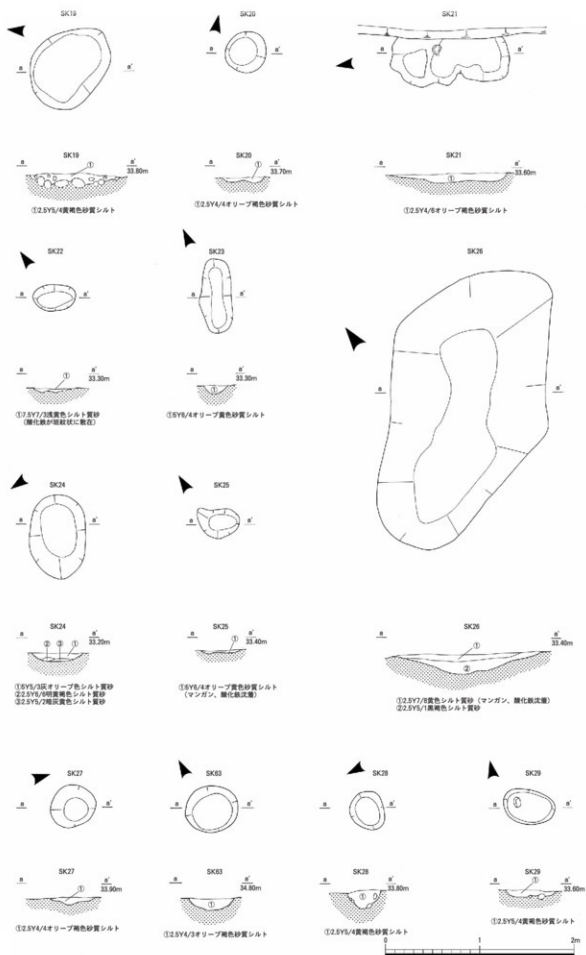


古代面下層土坑等実測図 (1)

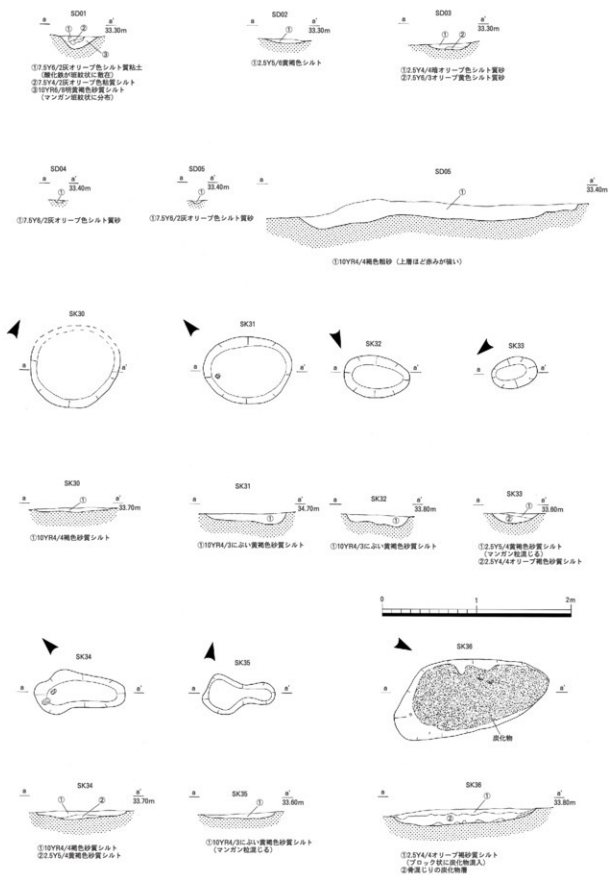


古代面下層土坑等実測図 (2)

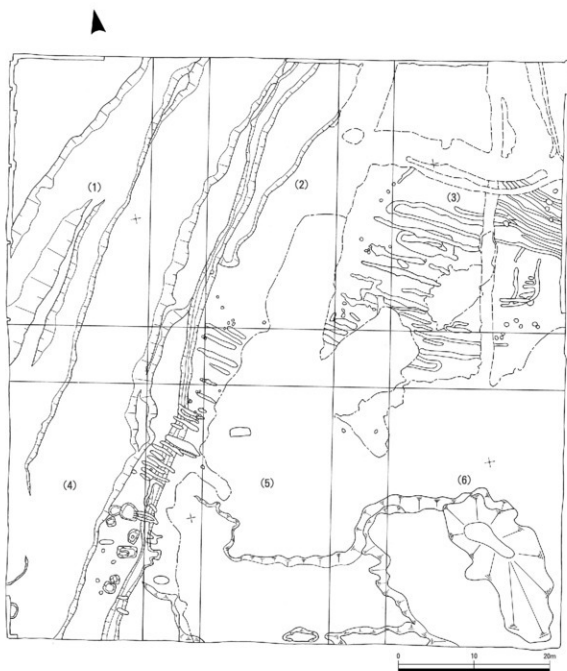
図面20



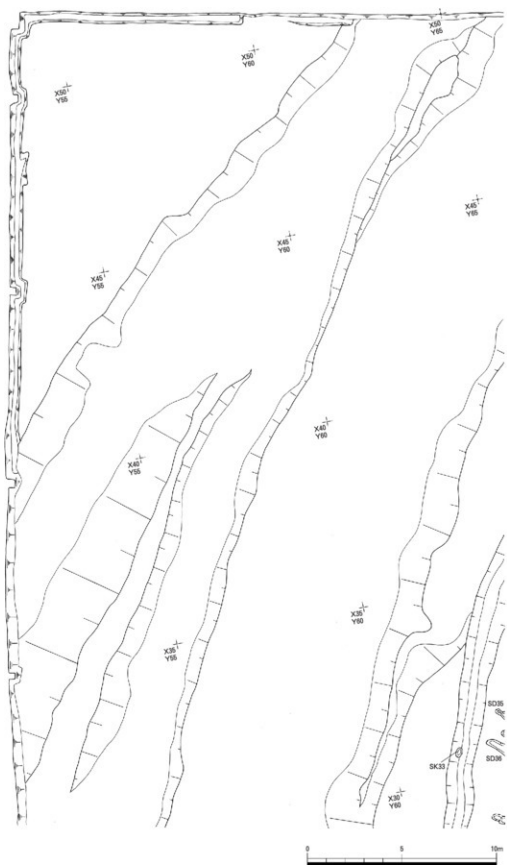
古代面下層土坑等実測図 (3)



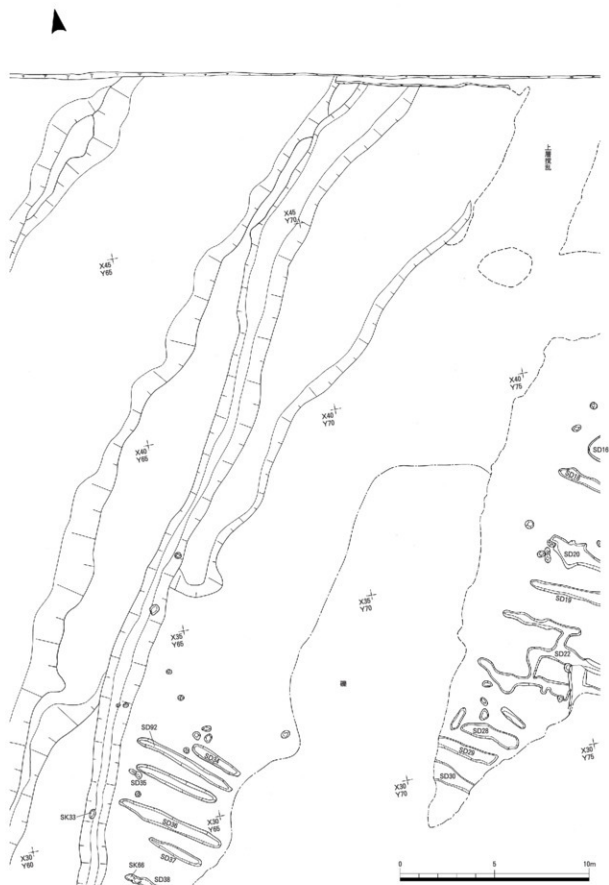
古代面下層溝・古代面上層土坑実測図



吉倉B遺跡古代面上層遺構全体図分割区割り図



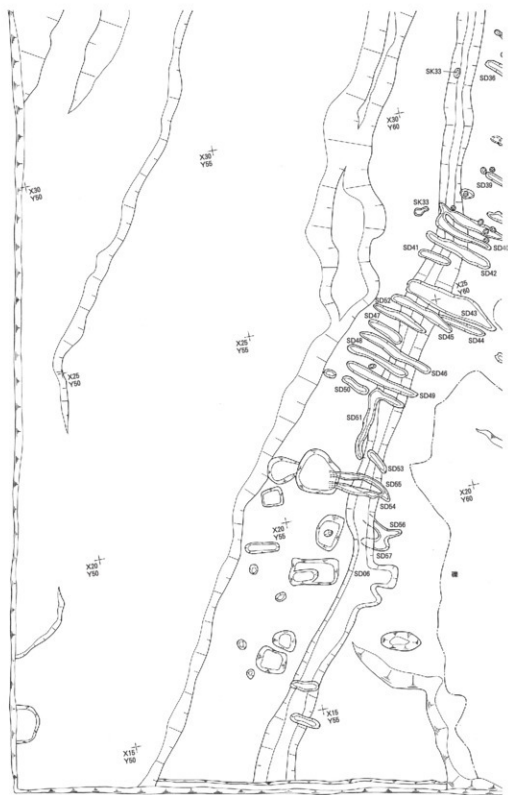
古代面上層遺構全体図 (1)



古代面上層遺構全体図 (2)

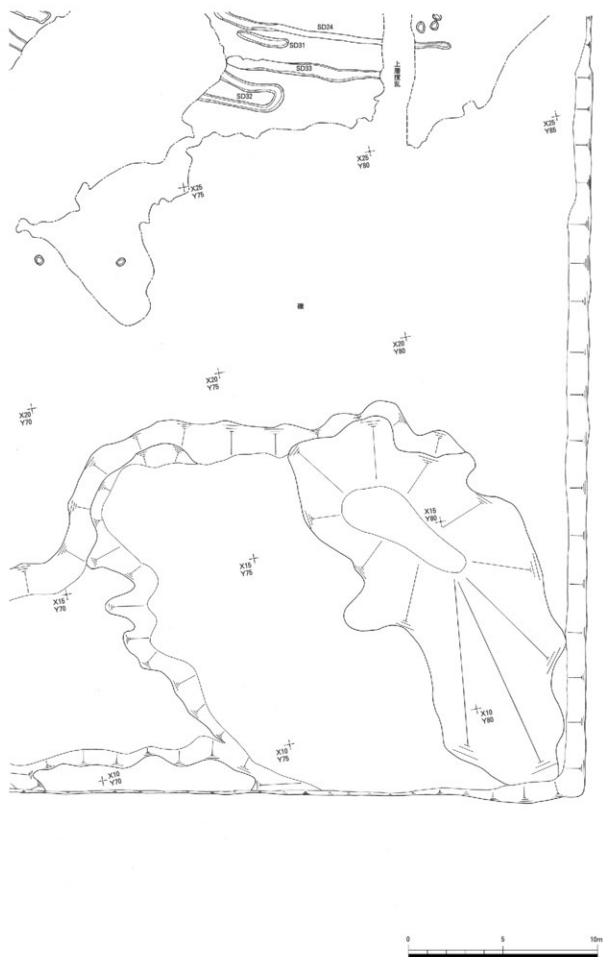


古代面上層遺構全体图 (3)

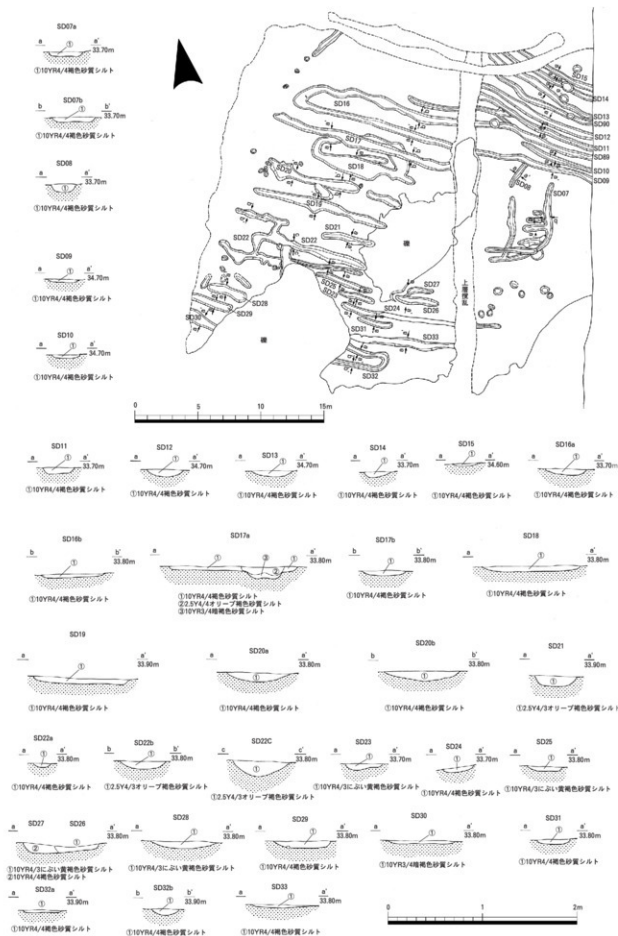


古代面上層遺構全体図 (4)

図面28

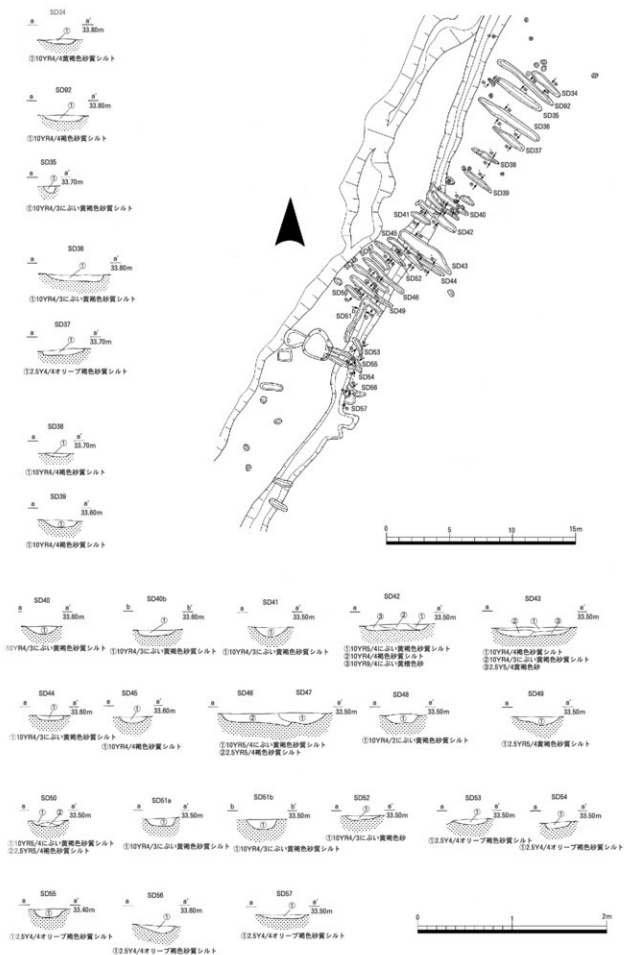


古代面上層遺構全体図 (6)

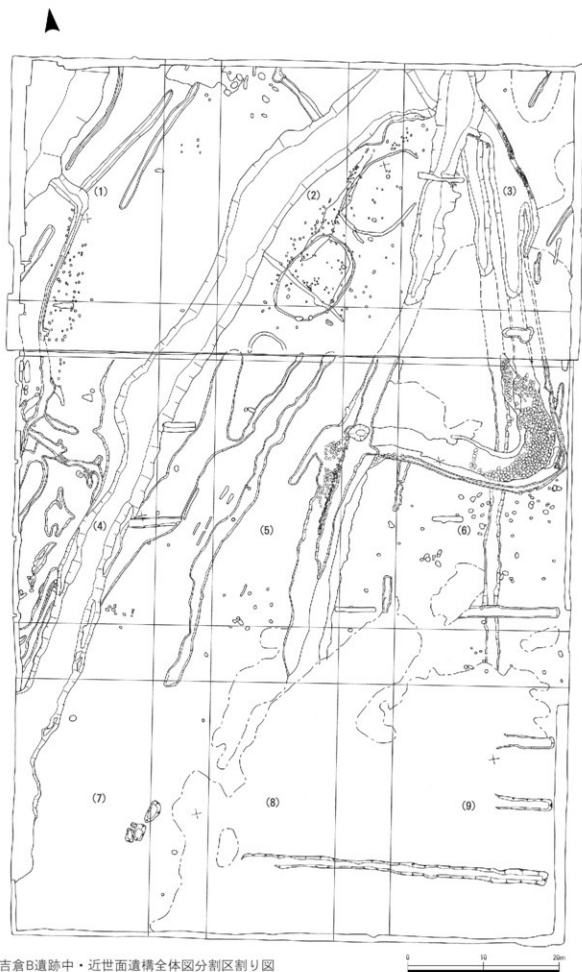


古代面上層溝群実測図 (1)

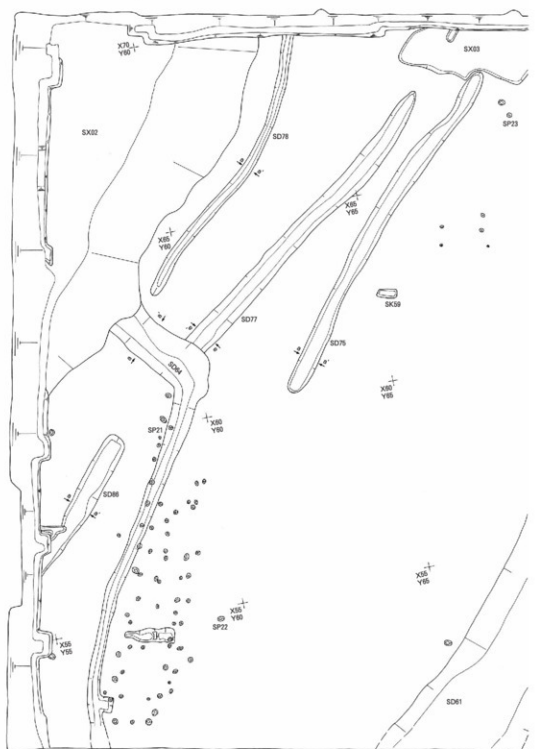
図面30



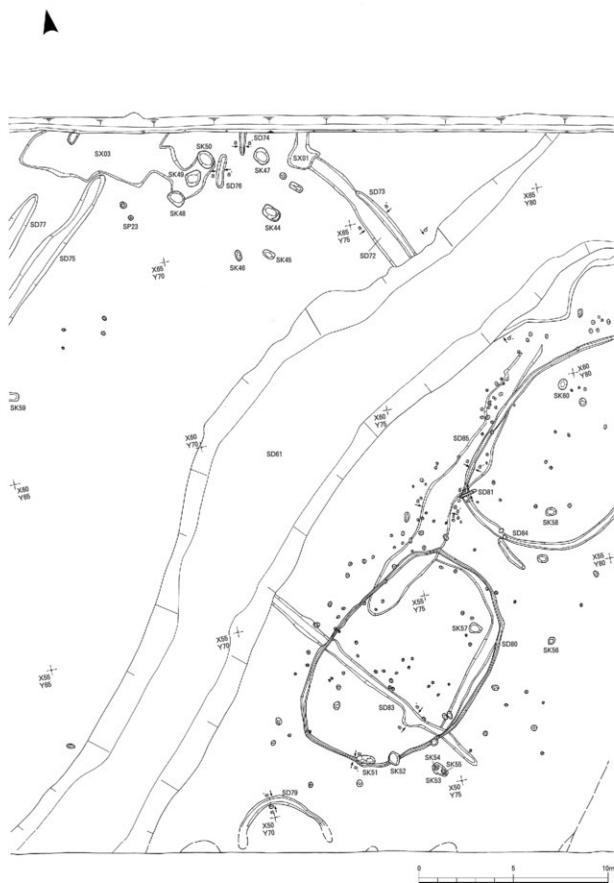
古代面上層溝群実測図 (2)



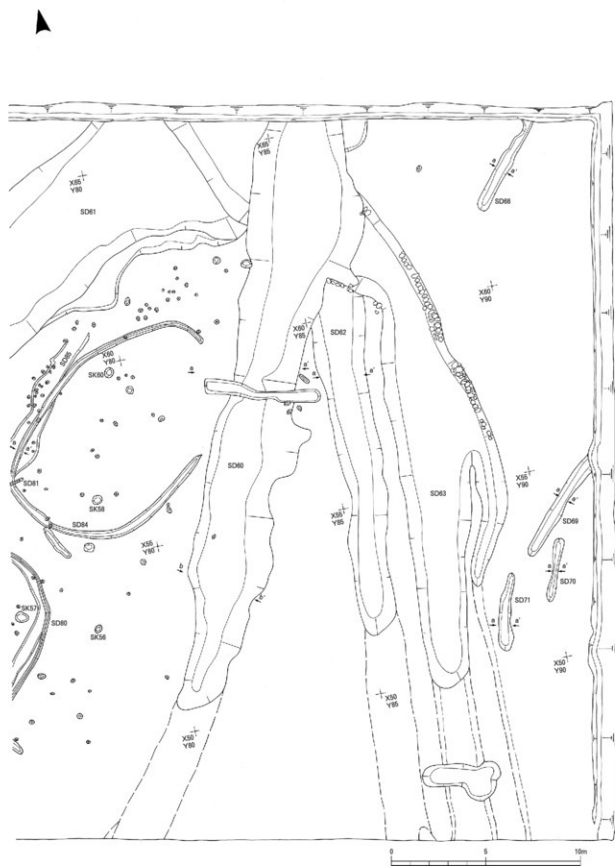
吉倉B遺跡中・近世面遺構全体図分割区割り図



中・近世面遺構全体図 (1)



中・近世面遺構全体図 (2)



中・近世面遺構全体図 (3)

